
著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ（UNKNOWN）
月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
～白銀のカリアティード～ II
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～II

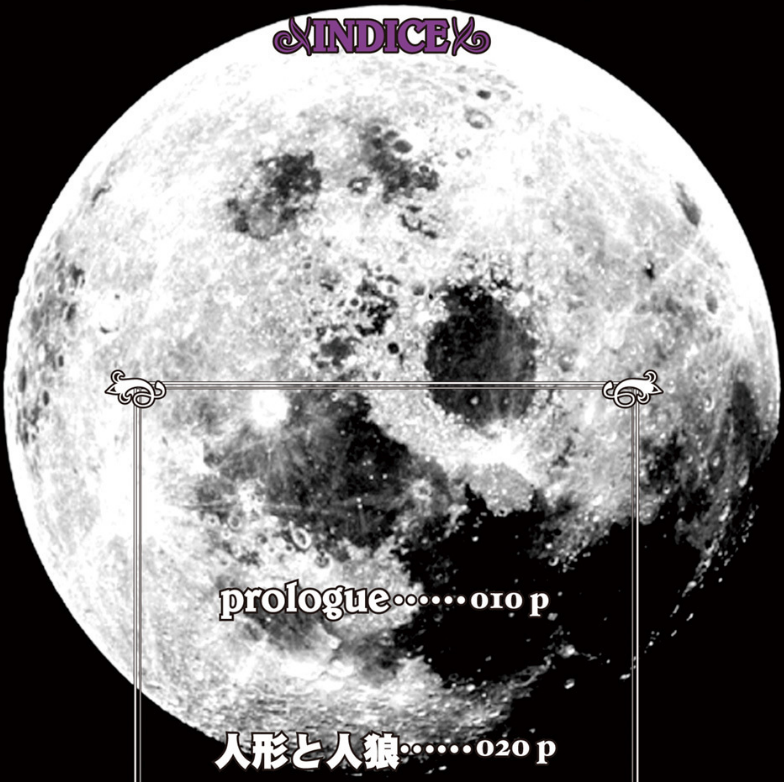
Ｊ□さいろー

原作　ニトロプラス

イラスト　大崎シンヤ（UNKNOWN）



著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ(UNKNOWN)
月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
～白銀のカリアティード～
II



CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
cariatide di argento Ⅱ

INDICE


ペルラ
フォーラを監視する
教皇庁直属の自動機械人形(オートマタ)
ペトルチアーニ
通称、仮面の男(マスケリーノ)。
ベルモントの裏社会を
支配する謎の富豪。
ノヴェラ＆フォーラ、
フィアーバの主人(パドローネ)
フィアーバ
緑柱石(ヘリオドール)の瞳石(ジェンマ)を持つ
自動機械人形(オートマタ)。
ノヴェラ＆フォーラの妹。
フランチェスコ
はぐれ者の人狼。
オルマ・ロッサの副頭領(ヴィーチェカーポ)シルヴィオの命を受け、
ノヴェラ＆フォーラの足跡を追う。


アレッシオ
南部出身の黒髪ギャング。
子供ギャング“弾丸”の
お守り役。
フォーラ
緑柱石の瞳石を持つ、
双子の自動機械人形の妹。
ノヴェラ
緑柱石の瞳石を持つ、
双子の自動機械人形の兄。
CARNEVALE
DELLA LUCE DEL
IA
Caria
e di
argento
ルーカ
弾丸のリーダー。
リタ
弾丸の一員。唯一の少女メンバー
ニコロ
弾丸の一員。食堂の料理長。

目次

カリアティード　【伊】cariatide

イオニアの反乱でカリュアエの町が征服され、町の女たちは奴隷となり苦役を課せられた。その故事にちなみ、女性像の刻まれた柱のことを、重荷を支える女『カリアティード』と呼ぶ。

prologue

　手というものは、なんのためについているのでしょうか。

　何かをつかむため、何かを指し示すため、撫でるため、叩くため、壊すため、そして何かを作り出すため。

　そう、貴方あなたにとって手とは希望の道具なのかもしれませんね。

　私はこれを、もっとも能動的な入り口と解釈しています。

　人にはいくつもの入り口があります。もっとも重要な入り口は左右についたこの瞳でしょう。外の情報はまずここから意識の内側へと入り込みます。

　次に耳、そして鼻、これらは全て受動的な入り口の仲間です。

　では口は？　この入り口は言葉を発することもできます。貴方が正気を保っていられれば、あらゆる賞賛も悪態もここから外へと流れ出すことでしょう。

　しかし手には敵かないませんね。

　手は直接に物を動かすことができます。切り裂くことも、抉えぐり取ることもできます。

　おや、どうしたのですか。ええ、目から水滴を落とせば石の壁を濡らすことができますが、貴方はそれで、目が能動的であると反証したつもりですか。

　残念ですが水滴を落とすことができるのは目ばかりではありません。芸術家のようにこだわったりしなければ、鼻や耳からも水滴は落とせるのです。そう、それこそ身体の至るところから……。

　お話の最中にせわしなくするのをやめてください。もう会話はお嫌ですか。お気持ちは分かりますが、耳というのは閉じることのできない入り口です。だから私は言葉が好きなのです。

　さあ、もう目の水滴を止めてください。

　私が語りたいのは貴方の手の話なのですから。

　目隠しをされた男は、自分がなぜ鎖につながれているのか理解できなかった。

子供の頃から見下していた兄や、信頼していた仕事仲間、憎い同業者たちがなぜ殺されなければならなかったのかも理解できなかった。

男は天才だったのだ。

取るに足りない庶しよ民みんから上流階級の名士に至るまで、あらゆる人々が彼の技ぎ巧こうを賞賛し、その指先が生み出す芸術作品に感動した。ベンヴェヌーティ兄弟といえば自動機械人形オートマタ業界では名の知れた芸術家技師だった。

その俺が、なぜこんな暗闇で人形のように磔はりつけにされているのだ。

全ては、あのいかがわしい仮面の男マスケリーノの招きに応じたせいだ。

魂を揺さぶる刺激を求めて、裏の世界に身を乗り出しすぎたせいだった。

「この手は芸術を生み出すことができます」

細い指先が、指揮棒バツケツタ胼だ胝このできた右の中指をなぞる。

肌触りだけで分かる、これは人形の指だ。古い──そう百年以上の骨董人形アンテイークだろう。ならば、いまの声も人形が発したものなのか。

しっとりと控えめな声こわ色いろは十九世紀以前に好まれたものだ。しかし闇の底から響くようなその声は人形が出したものとは思えなかった。名工として知られた男ですら聞いたことのない種類の声だった。

馬鹿らしい、どんな声であろうと人形は人形だ。

男は人形に敬意を払う連中の気が知れなかった。人形好きの好こう事ず家かの間には、そんな奇妙な風潮が広がっている。しかし人形はただの道具だ。精せい巧こうに作られているようでも決定的に人ではない。男はそれを暴あばいてやろうと思っていた。それが彼の芸術だった。

目隠しが取られた。

蠟ろう燭そくの薄明かりにすぐ目が馴な染じむ。

そこにいたのはまぎれもなく骨董人形アンテイークだった。そいつは手にした鋭利な銀の刃物を男の頰ほおに押し当てている。

「何をする」

　声が震えた。しかし職人の両目は、怯えながらも目の前の人形を品定めしていた。

　瞳石ジエンマは真珠ペルラの大玉、瑕きずひとつない極ごく上じょうの代しろ物ものだ。真珠は海の宝石だが、この骨董人形アンティークは人魚にしては優雅さに欠けている。海は海でも青く透き通る昼の海ではなく、月影を映した暗い夜の海のようだ。

　陰いん惨さんな印象をもたらすのは痩せすぎだからだ。こんなに痩せていては客を取らせても人気は出るまい。一部の物好きにもてはやされるだけだ。

「手というものは、何のためについているのでしょうか」

　痩せぎすの骨董人形アンティーク──この俺ならば不良品として改造に回している。

　その人形が、不気味な笑みを浮かべながら人間の身体を語りだした。

「たのむ、やめてくれ！」

　叫び声が地下室の石壁に反響し、耳の入り口から戻ってくる。

　男が血まみれになった顔を振って抵抗しても、痩せぎすの骨董人形アンティークは動じなかった。人体の入り口についての奇妙な話をしながら鋭利な刃物を指揮棒バツケツタのように振るい、瞼まぶたや鼻頭や耳たぶや唇に傷をつける。恐怖のあまり男が失禁すると、ようやく刃物が下ろされた。

「今のは冗談です、このような刃物で傷つけるために貴方あなたをお救いしたのではありません」

　痩せぎすが笑う。これは人形ではない、何か得体の知れない化け物だったのだ。

　震える男の眼前で、白はく磁じの指先が錆さびた鉄片を摘み上げる。

　何をする？

　目を瞠みはった。痩せぎすは鉄片の尖とがった先を男の掌に当てると、ゆっくりと力を込めた。

　絶叫──いや脳が焦げるような痛みに、叫んだかどうかも分からな

かった。恐怖と苦痛に総身が震え、上下の歯がガチガチと音を鳴らす。

「嘘だ、自動機械人形オートマタが人間を傷つけるなど、あっていいはずがない」

「実に貴方あなたらしいご意見です。これまで人形に牙きばを剝むかれることなど想像もせずに、数々の見事な芸術品を作り上げられたのでしょう」

　瘦やせぎすは眉まゆひとつ動かさなかった。口だけで微笑ほほえむと男の掌てのひらを鉄片で斜めに裂き、逆方向からＸの形に切り開いた。

「二十の半分です、正確には四十の四分の一です」

　男は今度こそ絶叫した。

　生まれて初めて声を振り絞った。叫んで、叫んで、咳せき込むまで悲鳴を上げ続けた。瘦せぎすが口元をうっとりとほころばせて、残りの三十に取りかかる。左右の掌と甲を引き裂き、芸術家の手に赤いＸが四つ刻まれる。

　男は嘔おう吐とした。とうに失禁はしている。こうなった理由を考えるいとますら与えられず、口に鉄球を放り込まれ言葉を奪われた。

　瘦せぎすが耳元で囁ささやく。

「誰でも盗みを働いたことはあるでしょう。男性ならば、女性の身体に断りなく触れることもあるでしょう。これから始まるのは拷ごう問もんではなく、手の犯した罪への刑けい罰ばつです。聞こえていますか、聞こえたのなら首で返事をしてください」

　赤い肉のこびりついた鉄片が鼻先につきつけられる。必死で首を縦に振ると、瘦せぎすは歌うような声で先を続けた。

「手にナイフで傷をつけます。私はナイフをなくしてしまったので代用品を使いました。ご安心ください、もう斬きりつけたりはいたしません。いまは手に包帯を巻いています。左右どちらの手にも、丁てい寧ねいに包帯を巻いて差し上げます」

　背伸びをした瘦せぎすが、石の壁面に鎖で繫つながれた男の両手に包帯を巻く。機械的に手を動かしながら、憔しよう悴すいしきった男の顔を間近から眺めている。

「包帯を巻き終えたら暖かい手袋をつけて差し上げます。私の記憶に

間違いがなければ、ベンヴェヌーティ兄弟はいつもラムの手袋をしていらっしゃいましたね。これはラム革ではありませんが、とても暖かいムートンです。それを手首できつく縛ります」

　言葉の通りに痩せぎすは男の両手に手袋をかぶせた。

　傷が刺激されて呻うめき声が漏れる。ようやく正気を取り戻しても、男はなぜこんな目にあっているのかまるで理解できなかった。

「これで終わりです」

　終わりだと？　その声が鉄球に阻まれる。

「あとは静かに時を過ごしていただきます。きっちり九十日です。そのあいだは私が貴方の身の回りのお世話を全ていたしますので、どうぞご安心ください」

　九十日！

　三か月もここに繋つながれたままにされるのだろうか。なぜだ。待て、待ってくれ、お願いだ、どうして……。

　静かに頭を下げた痩やせぎすが闇へ姿を消す。

　そして男は眠りを奪われた――。

　わずか数時間で手袋の内側で傷口がひどく痛みだした。傷口が蒸れるジクジクとした痛みは、まるで釘くぎを打たれたように強烈だ。そのせいで夜も眠れなかった。口にかまされた鉄球のおかげで言葉を発することもできず、たった一日で男は発狂しそうになった。

「貴方あなたには贖しよく罪ざいの時間が与えられています」

　ふたたび姿を現した痩せぎすは、苦痛に喘あえぐ男に彼の罪状を語って聞かせた。

　それは男の人生の否定だった。

　芸術の名を騙かたって行われた美の破壊。

　人形を隠かくれ蓑みのにした異性への歪ゆがんだ憎悪。

　同業者への対抗心と虚栄心によりエスカレートする悪趣味な改造。

　ひとりよがりのグロテスクを芸術と吹ふい聴ちようする欺ぎ瞞まん。

　どれもが耳に覚えのある中傷であり、それら全てを男は負け犬の戯ざれ言ごとと断じてきた。

　罵ば声せいを跳ね返す強きよう靭じんな意志がなければ美を貫くことはできない。

　しかし、そんな芸術家の矜きよう持じは、両手の入り口から送られてくる痛みの前にあっけなく崩れ去ってしまった。

「罪を悔いることで苦痛は和やわらぎます」

　瘦せぎすは何度もその言葉を繰り返す。やがて痛みに屈した男が涙を流して罪を認めると、彼女は太い注射針を男の肩に突き刺した。

　とたんに頭が麻ま痺ひを始め、気の狂いそうな苦痛が遠のいてゆく。それは強い鎮ちん痛つう剤ざいだった。

　助かった。

　男は心から安あん堵どして、黒い闇のような眠りの奥底へと引きずりこまれていった。

「どうぞ、快適な眠りをお楽しみください」

　人形が囁ささやく。

「今日から貴方は、自分の腐敗臭を嗅かぎながら暮らすことになります。暖かい手袋に蒸むらされた傷口は化か膿のうし、ゆっくりゆっくりと肉が腐っていきます。腐敗による痛みが脳を灼やくでしょうが、それは注射でしか消せません。起きている限りは、いつまでもいつまでも苦痛が続きます。永遠に続きます」

　瘦せぎすの囁く声が、漆しつ黒こくの眠りを紅ぐ蓮れんの悪夢へと変える。そうして男は、暗い石壁の標本として人形に飼われることになった。

　俺は本当に救われたのだろうか。

　あのとき死んだほうが幸せだったのではないか。

　激痛に呻うめきながら男は何度も問いかけた。

　男の兄と同業者たちを殺したのは、彼が改造を手がけたこともある自動機械人形オートマタだった。

　彼が作り上げた芸術品、ガイアの蝎さそり。

その蝎はしかし、男の仲間を皆殺しにしてしまった。彼が改造したのはただの人形ではなく、銀貨アルジエントという名の神聖な怪物だったのだ。男の最大の罪はそれを知らずにいたことだった。

闇の中で時だけが過ぎる。

来る日も来る日も男は激痛に喘あえぎ、唸うなり声をあげ、痩やせぎすの囁ささやく言葉に自らの罪深さを悔いて眠りに落ちた。いつしか両手からむせ返るような腐臭が立ちのぼり、何を口にしても嘔おう吐とを繰り返した。

鎮ちん痛つう、それだけが救いだった。

かつて男の暮らしていた世界、きらびやかな上流社会での賞賛と、贅ぜいを尽くした豪邸での生活。両手を焼くような激痛がそれらの記憶を朧おぼろにした。

あれは全て夢の中の出来事で、現実はこの地ち下か牢ろうにしかないのだ。腐臭を漂わせた罪深い男は、生まれ落ちたときから苦痛の中を這はっていたのだ。そんな哀れな糞くそ虫むしに救いを与えてくれるのは、真珠の瞳をした美しい女神だけだ──。

鎖につながれた闇の中で、男は真珠の光を求めて生きるようになった。

女神の前で大罪を悔い、子供のように泣きながら安らかな眠りを希こいねがう。それだけが男の生きがいだった。

彼女こそが真の女神だ。女神はきっと罪深い糞虫を生まれ変わらせてくれる。

その希望が、男を狂気の淵から幾度も救い上げた。

「かつての貴方あなたはこの手で小石を放り、静かな水みな面もを波立てました。今度は貴方が小石となり、水面に波は紋もんを刻むのです」

その言葉に男は歓喜した。

「どす黒く濁った沼に波紋を立てられなければ、石に価値などありません」

価値のある石になりたいと思った。

そしてとうとうある日、男は女神によって救われたのだ。

初めて見る外の光は網もう膜まくを灼やくほどに眩しく、男はなん

てひどいところなのだろうと思った。女神のかざす蠟ろう燭そくの光のほうが、よほど暖かく優しかった。

　男の目の前には草原があり、その向こうに森があった。

　車くるま椅い子すから転げ落ちて這はい蹲つくばった男に女神は囁いた。

「赤ずきんは母親から、狼のいる森を抜けて荷物を届ける試練を与えられました。それは命がけの試練であり、赤ずきんが成長するのに必要な儀式だったのです」

　そうだ、俺も生まれ変わるのだ。

「行って、新しい銀貨アルジエントの誕生を伝えなさい。この狼の森を抜けて」

　白い指先が手袋の紐ひもを解く。どろり、黒い液体をこぼしながら毛皮の手袋が外された。

　男は絶叫した。

　手袋から出てきた彼の両手は、すっかり骨になっていた。

　手をなくした俺はもう技師ではない。石だ！　水面を波立てる石になったのだ！

　甲声をあげて、石は草原を走り出した。

　ただひたすら狼の森を抜け、真珠の瞳の女神のために。


CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
cariatide di argento II
人形と人狼

i

　厚く垂れこめた雨雲から無数の水滴が降り注いでくる。

　雨の葬そう列れつはトラットリア・カプレットからオロスコピーア通りを抜け、古いカトリック教会に向けて黙々と進んだ。

　棺ひつぎを乗せた黒いシトロエンの徐行するあとを、ずぶ濡れの弾丸パロツトラがついていく。

　ギャングの子供がひとり死んだ。それだけのことだ。しかし人死にくらいでは建物から顔すら出さないスラムの住人たちが、今日はリッカルドを見送りに雨の路地に姿を見せていた。

　葬そう儀ぎはカトリック教会の形式に則のつとって執り行われた。

　法王の名前も知らない弾丸パロツトラの子供たちが両手を合わせて神に祈る。

　あるいは神ではなく、死者に語りかけているのだろう。

　昨日まで笑っていたリッカルドが花に包まれて埋まい葬そうされるのを、アレッシオは弾丸パロツトラと一緒に見送った。

　スラムに追つい悼とうの鐘かねが響き、誰からも慕われていたリッカルドが土の中に消えてゆく。一連の儀式が終わるまで、ルーカもノヴェラも一言も口をきかなかった。

　リッカルドは教会の裏手にある古い墓地に埋葬された。

　墓石が建てられ、花束が添えられる。リタは葬そう儀ぎに使われる白い菊のかわりにデイジーの花輪を用意していた。

「リッカルド、ピンクのデイジーが好きだったから」

　アレッシオもルーカも、リッカルドの花の趣味までは知らなかった。

　親しくしている相手にも知らないことが星の数のようにあり、あらゆる別離はそれを埋める前に訪れるものだ。アレッシオにとっては多くの別れのうちのひとつだが、ルーカや弾丸パロツトラの子供たちには違う。子供たちは初めて体験する強烈な喪失感と戦っていた。

　鐘が響く。

　日ごろ陽気な弾丸パロツトラが沈黙にうなだれる。地面に吸い込ま

れていく雨音を縫ぬって、ノヴェラのバンドネオンが鎮ちん魂こんの音色を響かせている。

「さよなら、リッカルド」

　泣き止まないリタの肩に手を置きながら、アレッシオはルーカを見ていた。

　胸の奥まで雨に濡れた弾丸パロツトラのなかで、ルーカだけが炎のようになっている。弾丸パロツトラのリーダーは復ふく讐しゆうの方法を考えているのだ。

　復讐なくして弾丸パロツトラは前に進めないことをルーカは知っている。だがどうやって子供たちを巻き込まずにそれを成し遂げるか、それが問題だった。仮面の男マスケリーノの庇ひ護ごを受けている弾丸パロツトラは、ボスの命令が下る前に動いてはいけない。それがマフィアの掟おきてだ。

　湿し気けた紙巻に火をつけて、煙を吐き出した。

　ルーカが我を見失わなければ弾丸パロツトラが激発することはない。

　リッカルドがいない今、誰もがルーカを頼るしかないのだ。向こう見ずな若いリーダーは、そのことをどこまで理解しているだろうか。

　葬そう儀ぎが終わると、ルーカはジャケットの内側に差した拳銃を抜いて、雨雲に向かって引き金を引いた。神父と下男が逃げるように姿を消す。ルーカは集まってきた弾丸パロツトラに向かってあらためて宣言した。

「リッカルドの仇かたきを討うつ、文句はねえな」

　弾丸パロツトラの子供たちが顔を見合わせた。それからルーカに視線を戻す。彼らの顔に浮かんでいた戸惑いの色が炎のような決意に変わる前に、アレッシオはルーカの前に立ちはだかった。

「少しでいいから待つんだ。いま動けば、ボスを裏切ることになる」

「そんなことは関係ねえんだよ、もう」

「仮面の男マスケリーノから独立するつもりか」

「それでもいいぜ、俺は」

　Ｍ９を握ったルーカがアレッシオを睨にらみつける。格好をつけても、その銃すらボスから貰ったものだ。

　肩を竦すくめたアレッシオは胸の銃を抜いてルーカに突きつけた。馬鹿め、反応が鈍い。

　──パン！

　硬直したルーカに向けて一発、空を裂さいた銃弾がルーカの髪をかすめて教会の外壁を穿うがった。子供たちの悲鳴が上がる。

「なんで外したんだ。撃ち殺せよ、それが仕事だろ」

「頭を冷やせ、銃もまともに扱えない奴が何の復ふく讐しゆうだ」

「あんたには関係ねえよ」

「お前の腕じゃ相手の勝ちだ。ノヴェラ、子供たちを連れて食堂トラツトリアに帰れ」

「関係ねえって言ってんだろ」

　ルーカは引かない。弾丸パロツトラの子供たちは大人しく来た道を引き返しはじめたが、ルーカは銃を握り締めたままアレッシオを睨にらんでいる。ボスの命令を守ることは大切だが、友人を思う彼の怒りもマフィオーゾとしては当然の感情だ。

「どうしても復讐をするというのなら仕方がない。運良く生き残れたらガキどもを連れてベルモントを離れろ。北ではなく鉄道でナポリまで行くといい」

「あんたはそうやってオレたちをなかったことにしたいのか」

「お前らの身のためだ」

「糞くそ食らえだよアレッシオ、リッカルドひとりここに埋めて逃げろって言うのか」

「一緒に死にたければ残ればいい。俺も言うだけのことは言った、あとは好きにしろ」

　銃をしまう。

　アレッシオが背中を向けても、若いルーカは雨の中に立ち尽くしていた。

　夜が明けた。

　昨日の雨が嘘うそのように、青く抜けた空は嫌味なほどの快晴だった。

窓からの強烈な朝日が寝不足の目に煩わずらわしい。のそのそとベッドから這はい出し、顔をしかめながら歯を磨みがいたアレッシオは、出掛けに兄妹の部屋を覗くことにした。

隙すき間ま風かぜの入る三階の角部屋で、ノヴェラはいつものようにバンドネオンを膝に乗せてフォーラと向かい合っていた。

フォーラは葬そう儀ぎに参列しなかった。

「リッカルドの死という情報を、フォーラの円筒シリンダはまだ受け入れていないのです」

ノヴェラはそう言っていた。

彼女はいつものように音程のおかしな子守唄ニンナナンナを口ずさみ、窓からの景色を眺めていた。昨夜の雨に濡れたアスファルトが、太陽の光を浴びて煌きら々きらと輝いている。手前のテーブルではアレッシオに背中を向けたノヴェラが小さくうなだれていた。

アレッシオは兄妹がこの食堂トラットリアに来たばかりのことを思い出した。

ほんのひと月ほど前だ。あの頃はフォーラのほうに人間味があるように感じられ、ノヴェラは無表情の人形に近かった。だが今のアレッシオには、ノヴェラの背中に悲しみの色を感じ取ることができる。

「フォーラの具合はどうだ」

「よくありません、また赤ずきんがおかしな話になっていて……」

ノヴェラの声が沈んでいる。向かいの椅い子すに腰を下ろすと、人形の白い顔が不思議とやつれて見えた。バンドネオンで彼女の手を引こうとしても、今日のフォーラは言うことを聞いてくれないのだという。それはきっと、ノヴェラの気持ちが彼女のほうを向いていないからだろう。

「あまり根をつめるな。人形も疲れることはあるんだろう」

「分かりません」

自じ嘲ちようするようにノヴェラが笑った。

「人の死に動どう揺ようするなど、なんのための人形だか分かりません」

「悲しいか」

ノヴェラは頷うなずかない。代わりにこう言った。

「リッカルドは優しかった。僕に車の運転も教えてくれました」

そして、アレッシオの言葉を待たずに先を続ける。いつか屋上で魂の話をしたときのように、止められない言葉が唇から次々と溢あふれ出してくる。

あのときリッカルドがいなければ、今ごろノヴェラはバンビーニに攫さらわれていた。彼らのアジトで好き放題に嬲なぶられたあげく、地下の業者に売り飛ばされていたかもしれない。自分を守るためにリッカルドは死んだのだ。ならば責任はノヴェラにある。

「……なのに、僕にできることといったらこれだけです」

ノヴェラはバンドネオンを机に置き、治療の経過を記録したノートを重ねた。

「そんな風に考えるな、お前にはお前の役目がある」

「けれど僕は……」

下を向く。蛇腹ベローにかかった手が震えている。

「アレッシオ、僕には分かりません。この感情も作り物なのでしょうか」

声が大きくなった。円筒シリンダの収まった腹に手を当てるノヴェラを、フォーラが不思議そうに眺めている。

遅かれ早かれ、ルーカはバンビーニのアジトに乗り込んで何らかの決着をつけるだろう。ノヴェラはそれについて行きたいのだ。しかし主人パドローネである仮面の男マスケリーノが彼に下した命令は、フォーラの円筒シリンダを元に戻すことだ。

感情を諦めて命令を遂すい行こうする。ノヴェラの置かれている立場は、弾丸パロットラの子供たちよりもむしろアレッシオに近かった。

あるいは……。

ふと雷光のような閃ひらめきが頭の中で弾け、アレッシオはノヴェラの瞳を見た。

緑柱石スメラルドの瞳石ジエンマに自分の姿が映っている。あるいは、これがノヴェラの探していた答えかもしれない。

「ノヴェラ、よく聞くんだ。お前が正しかったことを一つ教えてやる」

　半秒ほどためらってから、アレッシオはノヴェラに一つの事実を告げた。

「リッカルドの合成獣キメラの前輪には、弾だん痕こんが二つあった」

「アレッシオ？」

　緑の瞳が見開かれる。人形の華きや奢しやな身体がかたかたと震えだした。

「お前の聞いた銃声と同じ数だ。間違いない、俺がこの目で確かめた」

「アレッシオ、僕は……」

　ノヴェラが口を押さえてうずくまる。嘔おう吐とをこらえているのだとすぐに分かった。全身の発ば条ねが痙けい攣れんを起こし、細い手足がたちまち硬直する。

「僕は、憎しみの、中から、生まれました」

「なんのことだ」

　顔を上げたノヴェラは喘あえぎながら言葉をつないだ。

「円筒シリンダの、一番、古い記憶です。僕を作った人、指揮棒バツケツタで円筒シリンダを調律してる、青白いランプに照らされた横顔……その横顔が……」

　ノヴェラが喘あえぐ。緑の瞳はアレッシオを映していない。体内では円筒シリンダが異常を訴えているのだろう、がちがちがちがち━軋きしむ歯車の音が聞こえてきそうだ。

「その横顔が、憎しみに歪ゆがんでいる！　この世界に呪じゆ詛そを叩きつけて、僕を作った！」

「ノヴェラ」

「憎しみの物語ノヴエラがこの中に詰まっています、僕のための物語だ」

　ノヴェラは自分の腹を拳で殴なぐりつけた。思いきり、腹を円筒シリンダごと突き破ろうとするように。やがて口から吐き出された冷れ

い却きやく液えきがテーブルを濡らした。

「だから、僕はリッカルドみたいに『楽に』生きられない。車くるま椅い子すを押して暗い道を歩くことしかできない。価値があるのはどちらだ、僕ですか、彼ですか？　死ぬのはリッカルドじゃない、壊れるべきは僕だった」

「ガキどもはレースの前にこんなまじないを言っている。ブレーキを踏んで死んだ奴は地獄へ行く、踏まないで死んだ奴は天国へ行けばいい」

　ノヴェラの表情が固まる。

　アレッシオが右手を差し伸べるとノヴェラはそれを強く握り返してきた。

「俺たちもお前と一緒だ。腹の中の物語を塗り替えなければ前に進むことができない。リッカルドは孤こ児じだが、楽に生きることで過去を塗り替えた。死ぬときも幸せだっただろう」

　ノヴェラの震えが止まった。奥の椅い子すに座ったフォーラは雨上がりのスラムを眺めている。手を引いてノヴェラを起こし、アレッシオも席を立った。

「出かけてくる」

「どちらへ」

「仕事だ、俺には俺のすることがある」

　アレッシオはドアノブに手をかけ、振り向かずに言った。

「ノヴェラ」

「はい」

「お前はお前のすることをしろ」

ii

　僕のすること──。

　銀の仮面マスケラをかぶって天井を見上げる。

　フォーラと二人残された部屋で、ノヴェラは雨の音を聞いていた。

　どうしてあんなことを喋しやべったのだろう。

それはノヴェラ自身にも説明のつかない衝動だった。ご主人様からは『余計なことを喋るな』と命じられている。アレッシオに話したのは明らかに余計なことだった。

一昨日から記憶の暴動が何度も押し寄せ、ノヴェラの円筒シリンダを焦がしていた。

それはリッカルドの死の瞬間であり、仮面の男マスケリーノへの倒とう錯さくした奉仕の日々であり、もっと昔の、ノヴェラの原風景でもあった。

円筒シリンダに残るおぼろげな記憶──。

それはノヴェラとフォーラの生みの親の、憎しみに歪ゆがんだ顔。

つまり仮面の男マスケリーノの素顔だった。

あれは真実の記憶なのだろうか、それとも円筒シリンダの作り出した偽いつわりの記憶だろうか。

あのとき、アレッシオの差し伸べた手をノヴェラは握った。大きくて力強いアレッシオの手、右手に残るその感触こそが真実の記憶だ。

ぎりぎりと軋きしむ円筒シリンダが鎮しずまると、今度は棘とげのように突き刺さっていたもうひとつの疑問がどんどん大きくなってくる。

──どうして銃がほしくなったのだろう。

あのとき、拳銃は食堂トラツトリアの長テーブルの上、横たわったリッカルドの隣に置かれていた。それに手を伸ばしたノヴェラはルーカに殴なぐられたのだ。

どうして僕は銃を求めたのだろう。いくら考えても自分の行動に納得のいく理由は見つからなかった。それは、アレッシオに余計なことを話したのと同じくらい不合理なことだった。

仮面の視界に眩しい朝日が映っている。ノヴェラは部屋を見回した。

まだ昼には早い。穏やかな風がカーテンを波打たせ、テーブルにはノートとバンドネオンが置かれている。その向こうで、椅い子すに座ったフォーラの瞳は御お伽とぎの世界をさまよっている。今日のノヴェラの仕事はここに全て揃そろっていた。

ノヴェラはいつものように背筋を伸ばし、膝の上にバンドネオンを乗せた。

これが自分に与えられた役割だ。美人局つつもたせの手伝いをしたり、サッカーボールで子供と遊ぶ程度の逸いつ脱だつは許されているが、命と引き換えになるようなリスクを背負うことは禁じられている。たとえ禁じられていなくてもノヴェラは自動機械人形オートマタだ。円筒シリンダの楽譜スコアに刻まれた本能のようなものが無条件に危機を避けようとする。

しかし、ノヴェラの円筒シリンダの中をアレッシオの言葉が鳴り響いていた。

──お前はお前のすることをしろ。

アレッシオはルーカに復ふく讐しゆうを認めなかった。拳銃を使ってでも止めようとしていた。なのにノヴェラに向かって彼が言ったのは、全く正反対の言葉のようだ。

僕のすること──。

ボタンを押し、蛇腹ベローを動かす。流れはじめたグレゴリオ聖歌にフォーラの瞳が焦点を取り戻す。

「あら？」

バンドネオンの音色に誘われたフォーラが、仮面のノヴェラを見てにっこり微笑んだ。

「よく似合っているわ」

「僕もそう思うよ」

二人の言葉にバンドネオンの旋せん律りつがからみ、ひとつの歌のように空気に溶け込んでゆく。

トラットリア・カプレットは今日もシンと静まり返っていた。この静けさは昨日のように皆が悲嘆にくれているからではない。弾丸パロットラはバンビーニへの復ふく讐しゆうに向かったのだ。

朝食の演説をノヴェラは覚えている。

「いいか、俺は戦争はしない。リッカルドの仇かたきはアウトードロモで討つ」

ルーカは復讐の手段として殺し合いではなくレースの再戦を選択した。

朝の食堂トラットリアの空気を震わせて、ルーカが胸のうちの決意を吐き出した。リッカルドの無念は晴らされなければならない。しか

し対立は抗争を生み、弾丸パロツトラの子供たちも殺し合いに巻き込まれるだろう。それはだめだ、だから決着はレースでつける。

「親父バーボに言わなくて平気なの？」

ニコロが萎い縮しゅくした声でルーカに聞いた。頼れるリッカルドの死に、弾丸パロツトラはみんな怯えきっていたのだ。ひとり、ルーカの声だけが炎をまとっている。

「言う必要はない。アレッシオは弾丸パロツトラじゃない、外の人間だ。リッカルドが死んだことを水に流して、バンビーニと俺たちを和解させるのがあいつの仕事なんだ」

それは落ち着いた声だったが悲鳴のようでもあった。いつもはリッカルドに任せていたことを、今日からはルーカがひとりで背負わなければならないのだ。

「俺もアレッシオのことは嫌いじゃねえよ。でもリッカルドのことだけはこっちで落とし前をつける。アレッシオの調停を出し抜いてでもだ。俺たちが親父バーボを超えて行かねえと、リッカルドも安心して眠れねえだろ」

それはルーカの本音だった。

弾丸パロツトラの誰もがその言葉を真剣に聞いた。リッカルドのようにみんなを盛り上げるのではなく、不器用でも前へ引っ張って行こうとする強い言葉だった。ルーカの気炎が乗り移ったかのように、弾丸パロツトラの目にも炎が宿る。

朝食を終えた彼らがバンビーニとの対決に向かうのを、ノヴェラは階段の踊り場に腰掛けて見送った。

僕のすること──。

バンドネオンをテーブルに戻したノヴェラは、かわりにリッカルドの銃を握った。

どうしてこんなことをしたんだろう。ノヴェラは葬式の前にリッカルドの棺ひつぎから拳銃を抜き取り、鞄かばんの中に隠していたのだ。

これも不合理な行動だ。

銃じゆう把はを握り締める。ノヴェラは押し寄せてくる初めての感情に身震いした。

不合理なところに魂はあるのかもしれない。

仮面の下で僕はどんな顔をしているのだろう。憎しみに歪ゆがんだ仮面の男マスケリーノの横顔が脳のう裏りをかすめた。嘔おう吐とを嚙かみ殺す。いや、胸の奥からこみ上げてきたのは嘔吐ではなく高揚感だ。

僕のすること──それは治療これじゃない。

仮面のノヴェラは立ち上がった。行くべきところはひとつだった。

「行ってきます」

いや、もう戻ることはないのかもしれない。フォーラとバンドネオンを部屋に残したまま、ノヴェラは階段を駆け下りていった。

iii

月明かりの下のベルモントはマフィアと御お伽とぎの国。

太陽の下のベルモントは歴史と観光の街だ。

季節と曜日を問わず、ドゥオーモ広場を中心に広がる旧市街を訪れる観光客は絶えない。

観光客の溢あふれる通りを横切ったアレッシオは、石いし畳だたみの水溜まりを避けながら曲がりくねった旧市街の道筋を抜けて細い路地に身体を滑り込ませた。大通りから少し入るだけで人通りは急に少なくなる。

裏道の一角に隠かくれ家が風のバールが店を構えている。その前で足を止めた。

ラ・ヴィオラ──青銅の飾りをあしらった立派な看板に、店の名前が彫られている。ガエターノから聞いた店に間違いなかった。

観光地に程近いこの地区はアレッシオの管かん轄かつの外側だ。しかしここはベルモント。この街でバールを営むのであれば、仮面の男マスケリーノと何らかの形でつながっているはずだ。

アレッシオはラ・ヴィオラを見渡せるオープンカフェに入ると、焼き菓子ビスコツテイとカプチーノのセットを注文した。店員が頭を下げて店内に消えるのを待って、背後の席で新聞を読んでいる男に声をかける。

「あれか」

「ああ、情報が確かならな」

新聞を広げたガエターノが正面を向いたまま答えた。この男のつかんだ情報が正しければ、視界の向こうにある隠れ家のようなバールに、仮面の男マスケリーノに敵対する組織のボスと側近たちが潜んでいるのだ。

「ブラッキアリ・ファミリーが生き残っていたとはな」

「死に体には違いないさ、組織内の抗争に破れてすっかり斜しや陽ようの勢力だ」

「だからベルモントで巻き返しを図ろうとしているわけか」

「一度沈んだが最後、浮かび上がるなんざままならねえってことにも気づかねえでな」

ブラッキアリ・ファミリーは、北部組織の中でも武闘派として知られる伝統的なマフィアだった。北部の組織などとひとくくりに呼んでも、その実態は多くのファミリーからなる集合体であり、結束も一枚岩とはいえない。組織の内部には仮面の男マスケリーノとの宥ゆう和わ路線に反対するファミリーを抱えており、ブラッキアリはその急きゅう先せん鋒ぽうと言われていた。

「こんな街でも世界有数の観光地だ。利権という名の夢を見たくなるのも分かるがな」

コーヒーを飲み干してガエターノが笑う。

「バンビーニを作ったのが連中だという話も本当か」

「あの小僧バンビーニどもはブラッキアリを中心とした麻薬ルートの末端だ。そう考えるのが自然だろう」

つまりアレッシオが襲撃した古こ物ぶつ商しようのベルッチも、ブラッキアリ・ファミリーの仲買人ハスラーだったということだ。裏を返せば、その襲撃を北部組織が黙認するほどにブラッキアリの勢力は弱まっている。

「あのバールはどっちの縄張りだ」

「蝙こう蝠もりだな、今はボスになびいている」

新聞を畳たたんだガエターノが席を立ち、アレッシオがテーブルに乗せた封ふう筒とうを懐ふところにねじ込んだ。

「無茶をするなとは言わねえ、ドジを踏んでこっちを巻き込むなよ」

「くどいぞ」

「物好きめ」

　封筒の中身は五十万ヴィンチの札束。ボスに内緒で情報を流した謝礼金のほかに、面倒が起きたときの迷惑料も含まれている。コートを羽織ったガエターノは新聞を小脇に挟んで表通りへと消えていった。

　運ばれてきたカプチーノをすする。

　アレッシオはこの先のプランを練り直すことにした。

　バールの中にバンビーニの黒幕がいる。連中は麻薬ドウローガによる収しゆう益えきだけを目的にしてバンビーニというグループを作ったわけではないようだ。

　ガエターノはこう推測している。連中はバンビーニと弾丸パロツトラをわざと争わせ、それを火種にして仮面の男マスケリーノと北部組織との抗争を巻き起こそうとしている。落ち目のブラッキアリは北部の巨大組織をだしにして、旨うまいところだけを持って行こうとしているのだ。

　手口が性急なのは、自分のファミリーの弱体化を悟っているからだ。それゆえにやり口は強引になり、かえって組織の中で孤立を深めることになる。

　アレッシオにとって最も重要な情報は、ブラッキアリ・ファミリーがあのバールに潜んでいることではなく、その情報をガエターノが北部組織の幹部から入手したということだ。これは北部のボスたちがブラッキアリ・ファミリー切り捨て、仮面の男マスケリーノとの調停を優先したことを示している。

　風向きは上々だ。あとはボスがブラッキアリ・ファミリーを始末すれば、バンビーニと弾丸パロツトラの抗争が全面戦争へと発展する危険は事実上なくなると思っていい。

　ところが、なぜか仮面の男マスケリーノは動こうとしなかった。

　ガエターノを通じて、アレッシオや他の殺し屋たちに抹殺命令コントラクトを下せば、ベルモントに飛び込んできたブラッキアリ・ファミリーなど容易に鏖おう殺さつできる。

　逆にここで連中を見逃せば、情報を提供した北部の組織に見くびられ、反仮面の男マスケリーノの勢力が組織内での足固めを始めるだろう。あらゆる意味で今が抹まつ殺さつの好機なのに、ボスは動かなかった。忠犬のようなガエターノすら、昨夜の電話口では納得がいかないと首をひねっていた。

アレッシオは焼き菓子ビスコツテイをがりがりと嚙かみ砕き、カプチーノで流し込んだ。

仮面の男マスケリーノはリスクを承知で連中を泳がせている。何のために？

アレッシオはその答えを知っている。

道楽のためだ。

リッカルドの死でノヴェラが動どう揺ようしたことに、手を打って喜んでいるような男なのだ。

空になったカップを舐なめながら、通りの向こうのラ・ヴィオラを眺める。

裏道のバールにしては客の出入りが多い。

朝食の時間だから当然ともいえるが、仕事はできる限り人目につかないところで済ませたい。ましてやアレッシオが勝手に動けば、ボスの怒りは自分のみならず弾丸パロツトラにも向けられるだろう。

しかし状況は差し迫っている。

弾丸パロツトラとバンビーニはすぐにも衝突を起こすだろう。それまでに、バンビーニと北部組織とをつなぐブラッキアリというパイプを断ち切っておくべきだ。

このまま眺めていても仕方がない、アレッシオは相手の懐ふところに飛び込むことにした。

黒ずくめの殺し屋は、眩しい陽光を避けながら裏路地をラ・ヴィオラへと向かった。

一見して空間を把は握あくする。それは殺し屋としての生活が鍛え上げた能力だ。

薄暗い店内に踏み込んだアレッシオは、二十はあるテーブルのもっとも奥、調理場に近い衝つい立たての向こうに目指す標的がいることを認識した。衝立の回りの広いテーブルに客がいないことがそれを証明している。

朝食時の店内は混んでいたが、幸いなことに客の中にマフィオーゾらしき人間はいなかった。客層はどれも地元の人間のようだ。カウンターの店主を呼んだアレッシオは、衝立の隣のテーブルに通すように言いつけた。

「かしこまりました」

　旧市街のみかじめピッツオは弾丸パロットラの担当ではない。アレッシオはいち見げんの客だが、店主はすぐに言いなりの席を用意した。黒服のマフィアに逆らうとどんなことになるかをベルモントの人間はよく知っている。

　賑にぎやかな朝のバール、しかしここはもう敵地だ。

　アレッシオは足音を殺して衝つい立たての裏に移動した。衝立の下に十センチばかりの隙すき間まがある。向こうから足が見えないよう、猫のように椅い子すの上にしゃがみこんだ。

　物音と気配をかき消すのも職能のひとつだ。何人かの客が怪け訝げんそうにこちらを見て、気の回る奴はさっさと店を出て行った。注文を取りに来ようとした店員を目で追い払い、衝立の向こうに耳を澄ませる。果たして奥のテーブルでは、複数のマフィアが会食をしているところだった。

　言葉を拾う。

　連中は、観光客をターゲットとした麻薬ドウローガの販はん路ろを確立するために拠きよ点てんとなる商業施設を作る話をしていた。斜しや陽ようの組織にしては景気のいい言葉が、隠語を交えながら囁ささやかれている。仮面の男マスケリーノを失しつ脚きやくさせた後のプランなのだろう、彼らがベルモントを征服しようとしていることに間違いはなさそうだ。

　七人──話し声から人数を勘かん定じようする。

　アレッシオの拳銃は二丁。銃撃戦になれば引き金を四回は引かなければならない。

　背筋を這はい上がる緊張感に口の端が持ち上がった。

　その程度はたいしたリスクでもない。単独での仕事はいつものことだ。衝立の向こうに凄すご腕うでの殺し屋がいればアレッシオが死ぬだけで、そうでなければなんとでもなる。

　アレッシオはあらためて店内を見回した。

　敵の人数よりもボスの配下の目が気にかかる。

　仮面の男マスケリーノはノヴェラの心をどこまでも追い込もうとしていた。そのためには組織の抱えるリスクも、弾丸パロットラを犠牲にすることすら厭いとわない。身内を大切にするマフィアにあるまじ

き発想だが、アレッシオはセントポール教会でボスの狂気を垣かい間ま見みている。

仮面の男マスケリーノのもとには、ベルモントのあらゆる情報が集まってくる。この街のいたる所にボスの目と耳が潜んでいるのだ。アレッシオが独断で動いたことの報告も、間をおかずにボスの耳へ入ることだろう……。

俺は敵よりも味方を怖がっているのか？

アレッシオは口だけで笑った。

明確な敵は衝立の向こうにいるのに、頭を回るのは保身のことばかりだ。

だが恥じるな、これは自分だけの保身ではない。弾丸パロツトラを守るためにも必要なことだ。

ブラッキアリ・ファミリーの密談に意識を傾ける。何度か「小僧たち」という言葉が聞こえてきた。彼らが話しているのは、いかにして抗争の中で他の組織を出し抜くかという算段のようだ。

ガエターノの推測は正しかったのだ。

しかしここで動けば、自分が求めていたもののいくつかが失われる。

裏社会で成り上がる計画は水すい泡ほうに帰し、ボスの放つ殺し屋に怯える生活が始まるだろう。

ベルモントは仮面の男マスケリーノの拠点。町のあちこちに大勢の構成員が隠れているはずだ。しかしアレッシオはいまだにボスの兵隊と顔を合わせたことがない。仮面の男マスケリーノの組織は、それだけ徹底した秘密の管理がなされているのだ。

無意識に携帯酒瓶ヒツプフラスクを開けていた。安物のスコッチで唇を湿らせる。

愛用の携帯酒瓶ヒツプフラスクは、禁酒法時代のマフィアに憧れて買ったものだ。子供の頃からマフィアはアレッシオのヒーローだった。いつかマフィオーゾになって盛大に銃をぶっ放し、大金と成功をつかんでやろうと思っていた。

それから二十年余り、銃は持ったが成功はいまだ手にしていない。

その夢と引き換えにする意味はなんだ？

『親父バーボ』

　弾丸パロツトラのガキどもはアレッシオのことをそんな風に呼ぶ。

　しかしあの連中は、ボスから押し付けられた家族フアミリーだ。

　俺は弾丸パロツトラを疎うとんじているのか、大事にしたいのか。敵を背にして、またもいつもの疑問が頭をもたげてくる。

『どちらのアレッシオが本物ですか？』

　頭の中のノヴェラが聞いてきた。それを決められれば苦労はしない。二つの魂はどちらも本物のアレッシオだ。

　ためらうアレッシオを茶化すように壁の時計が秒を刻む。衝つい立たての向こうではブラッキアリの会話が核心に迫っていた。仮面の男マスケリーノのテリトリーを切り取るための第一歩として、バンビーニと弾丸パロツトラの抗争が成功しつつある。その報告だった。

「まだ最初の銃声は鳴らないようだ。やはり子供のギャングなどあてにはならん」

「花火は我々が用意した。連中は点火をするだけでいいんだが期待外れもいいところだな。弾丸パロツトラなどと粋いきがっていても、所しよ詮せんは臆病な洟はな垂たれ小僧の集まりか」

　金と権力のことしか頭にない連中が勝手なことを言っている。

「押しが甘かったな、死体の数が足りなかったのだろうよ」

「次も男ではだめだ。娘が死ねば臆病なガキの尻にも火がつくだろう」

　こいつらは殺す。

　アレッシオは静かに決断した。ブラッキアリの不用意な言葉が殺し屋の魂に火をつけたのだ。

　熱風に煽あおられたように背筋の神経が逆立ち、頭の中の理屈を隅へと追いやろうとする。

　マフィアへの憧れから持つようになった携帯酒瓶ヒツプフラスク、それを静かにテーブルに置いて胸の拳銃に手をかけた。

　待て、諦めるな！

　危ういところでアレッシオは怪物の手た綱づなを締めた。息を整

え、気持ちを鎮しずめる。

　拳銃を怪物に預けるにはまだ早い。この連中を生かしてはおけないが、ここで手を出せばボスと北部組織のお尋ね者だ。いずれはルーカが激発して同じ結果になるかもしれないが、彼らの意思で火中に飛び込むのと、アレッシオが突き落とすのとでは雲うん泥でいの差がある。

　手を出したら裏切り者、放置しても抗争だ。両手は銃じゆう把はを握りたくてうずうずしている。

　考えるのは三つでいい。

　リッカルドの復ふく讐しゆう、ガキどもの安全、そして俺の人生。

　こいつを満たすにはどうすればいい？

　ええい、いつから俺はこんなに計算高くなったのだ。五年前の自分なら、ためらわずに拳銃をぶっ放している。

　しかしこれが今のアレッシオだ。それならそれで自分の性分を活用しろ。

　気配を殺したまま耳を澄ませる。激情に身を任せてはならない。意識を集中して、連中の会話から不快な情報とそうでない情報をより分ける。

　ブラッキアリ・ファミリーの好奇心は、トラットリア・カプレットに身を寄せている珍しい骨董人形アンテイークへと移っていた。連中はノヴェラとフォーラについても調べを進めている。配下に古こ物ぶつ商しようのベルッチがいるのだから当然といえば当然だ。

「そいつらの瞳石ジエンマは何だ」

「緑柱石スメラルドと緑柱石アクアマリーナと聞いています」

「こいつはいい、ずいぶんと奢おごった人形だな」

「ガキのギャングさえ潰つぶせば人形もこちらのものです。ボスのコレクションに加えては？」

「人形本体よりも宝石だ。ベルッチなどに渡すなよ。生意気な小僧バンビーニを武装させた甲か斐いがあったじゃないか」

　──カチリ。

　アレッシオの頭に歯車が回っていたらそう鳴っただろう。

雷光の閃ひらめきとともに思案の糸がつながる。両手に銃を構えたアレッシオは、椅い子すの上から衝つい立たてを蹴けり倒し、引き金を二度引いた。

銃声！

テーブルを囲んだ四人のマフィアが頭を撃ち抜かれて横倒しになる。まずは四つ、飛び散った血と脳のう漿しようが店の観葉植物を赤く染め、遠くの客席で悲鳴があがった。

椅い子すから飛び降り、倒れた衝立を踏み越える。ひとりが背広の内側に手を入れた。続けざまにそいつの腹を撃つと、残る一人は床に伏し、もう一人は座ったまま両手を上げた。

手を上げた男を無視したアレッシオはテーブルに飛び乗ると、床に這はったまま銃を抜いた男の後頭部を上から撃ち砕いた。

絨じゆう毯たんにトマトソースの赤い染みがぶちまけられ、そいつの撃った弾が店の壁に穴を穿うがつ。

両手を上げた男が子犬のような悲鳴をあげた。右手のM84をそいつの額に向ける。

いや、こいつは最後でいい。薬やつ莢きようがワイングラスに落ちるのを見ながら、腹を撃たれて呻うめくもう一人の頭を左手のＭ９で吹き飛ばした。

ものの五秒ほどでラ・ヴィオラに六つの死体が転がった。なにも問題はない、この街がうまく回るのに必要な死体なのだ。

「どいつがブラッキアリだ」

がたがた震える男に問いかける。二つの銃口を向けられた男は、両手を上げたまま顎あごでテーブルを指した。

砕けた皿にとり散らかった豪勢な料理、そして頭を割られたスーツの肉にく塊かいが四つ。どれかは分からないが、どうやら目標は片付けたようだ。

ため息をついたアレッシオは、安心して両方の引き金を引いた。

七人、全て片付けた。

衝つい立たてをどかすと店の中はがらんとしていた。

観光客がいなければ市警察に通報されることもないだろう。アレッシオは床に散らばった葉巻を拾い、吸い口を齧かじり取ると立ったま

ま一服した。

　さすがは北部で名の通ったブラッキアリ・ファミリーのボスだ、いい葉巻を持っている。チョコレートに似た香りが血と硝しよう煙えんの匂においを薄め、殺し屋の逆立った神経を鎮しずめていった。

　弾丸パロツトラに敵対する七人のマフィアを独断で処刑した。

　だが、アレッシオは仮面の男マスケリーノを裏切ったことにはならない。

　なぜなら、この連中が兄妹人形を奪おうとしていたからだ。

　人形を守ることがアレッシオの仕事だ。たとえ殺した相手が北部組織に名を連ねる幹部であったとしても、ボスの命令は厳しく守られなければならない。全てはノヴェラとフォーラを守るために行われたことだ。

　ブラッキアリ・ファミリーは瓦が解かいした。バンビーニと弾丸パロツトラの抗争が大組織の対立へ発展することはないだろう。この先はルーカと子供たちの決めることだ。アレッシオが指さし図ずできる話ではなかった。

　カウンターの向こうでは店主が真っ青になって震えている。アレッシオは懐ふところから取り出した二十万ヴィンチを迷惑料としてカウンターに置いた。

「余よ所そ者ものが同士討ちをしただけだ、あとの始末は頼む」

　言い置いて店を出る。

　カウンター席を通り抜けようとしたとき、アレッシオは店内にもう一人の気配を感じた。

　振り返る。壁際のソファー席に若い男が足を組んで座っていた。

　奇妙な話だ。いくら薄暗いとはいえ、視界の開けた店内で今まで男に気がつかなかったのはどうしてだ。

　首をひねりながらアレッシオは男に近づいた。ずいぶん若いが、この惨劇に動じた様子はない。ボスの配下だろうか。あるいは北部組織の人間かもしれない。

　テーブルを挟んで向かい合う。不意に、手の中の怪物が反応した。

「……！」

　アレッシオが思うより先に右手が走り、M84の銃口をそいつの額に突きつけていた。

　ぴたりと固定された銃身は微動だにしない。

「芸人さん、早く手を上げるんだよ！」

　店主が悲鳴を上げる。銃を突きつけたままその男を見た。着ているのは十八世紀風の貴族の衣装だ。ノヴェラと同じような格好だが、ベルモントの街角にはこんな衣装をまとった大道芸人がごろごろしている。

　若い芸人が顔を上げた。薄闇の中でその眼が光る。

　アレッシオは息を呑んだ。

　違う、こいつは芸人ではない。こんな目をした芸人がいるはずがない。

　喉のどが鳴る。こいつは殺し屋だ！

　いったいどういう男なのだ。見たところまだ若者で通じる年齢だ。目鼻立ちは端正だが、左右の頬と鼻頭に刃物で切り裂かれたような傷跡が縦横に走り、異相と呼ぶにふさわしい面つら構がまえをしている。



いや、顔の傷なんかはどうでもいい。問題はこの野獣のような視線だ。

ブラッキアリは武闘派で知られたボスだが、あるいはこの男のような目つきをしていたのだろうか。顔を見る前に頭を吹き飛ばしてしまったアレッシオには確かめる術すべもない。

若い大道芸人は額に突きつけられた銃口を気にも留めず、空いたグラスにワインを注いだ。

「葡ぶ萄どう酒しゅは昔から赤と決めている。君も飲むかね」

「遠えん慮りょしておこう」

ボトルから注がれるワインの音が耳じ朶だを打つ。

アレッシオはこの男を警戒しているが、殺すつもりはない。それを察しているのだろう、男は悠ゆう々ゆうと紫の液体の香りを楽しんでいる。

この殺さつ戮りくの舞台にいながら、その表情は穏やかだ。そいつが顔を上げた。

「臭うな」

「なに？」

鋭い視線がアレッシオを捉える。

男はしばらく鼻先をひくひくさせてから、やれやれと首を振った。

「失敬、思い違いのようだ。昨夜ゆうべの夜食と似た臭いがしたのでね」

ひとりで納得をしたように、ワインを流し込む。

得体の知れない男だが、どうやら敵意はなさそうだ。

真っ赤な生ハムプロシユートを指で摘んで口に運ぶ男を見ながら、アレッシオは銃を下ろした。グラスの中身を飲み干した男がまたボトルを取る。

「この街の人間はみな同じような臭いがする」

「下水の臭いだろう。ドブ臭くさき麗うるわしのベルモントだ」

「御お伽とぎの国の裏側か」

　男が口だけで笑った。

　互いに害意がないのならば、速やかにこの場を立ち去るべきだ。理性はそう告げていたが、拳銃を収めたアレッシオは改めて大道芸人の顔を覗き込んだ。

　ああ、なぜこの男のことが気になるのかが分かった。この目に見覚えがあるのだ。こいつはまるで鏡の向こうの俺のようだ。つまりは人殺しの目に違いない。

「ここで見たことを忘れてほしい」

　アレッシオの言葉に男が頷いた。それから店の主に声をかける。

「店主、店の評判を落としたくなければすぐに鍵かぎをかけるといい。死体は私が始末しよう」

「あんたは組織ファミリーの者か」

「いいや、私ははぐれ狼だ」

「似たようなものだな」

　男の言葉に嘘うそはなさそうだ。アレッシオは自分のほうへ置かれたワイングラスを取り、喉のどを潤うるおした。

「これはいい酒だ」

　ワインは飲みつけないが上物だということは分かる。男に注がせて二杯目を口にする。

「酒は赤くて酔えればいい」

「その割りに上物を飲むじゃないか」

　グラスを掲げた男が底の知れない笑みを浮かべる。

　どうやら俺は、こいつのことが嫌いではないようだ。

　裏の世界に生きる人間は余計な詮せん索さくをしない。しかしふと、アレッシオの脳のう裏りを奇妙な思いがよぎった。理屈でも願望でもない、強いて言えば勘かんのようなものだ。

　──この男と手を結べば、ボスから兄妹を解放してやれるかもしれない。

笑ってグラスを飲み干した。とんだ夢物語だ、いったい俺はなにを妄もう想そうしている？

「行くのか」

「ああ、まだ仕事が残っている」

ブラッキアリ・ファミリーはバンビーニを武装をさせたと言っていた。ならばアレッシオには行くべきところがある。若い男に背を向けて快晴のベルモントへ踏み出した。

同じ裏社会の人間だ。縁があればまた会うこともあるだろう。

太陽の光が黒い殺し屋を照らす。アレッシオの背後でラ・ヴィオラの重い扉が閉まり、がちゃりと錠じようのかかる音がした。

iv

僕は四人いる。

人間のかかる多重人格障害という病気があるが、それとは違う。

四人の僕はそれぞれ別の顔を持っている。

フォーラと話すときの僕は気苦労な兄で、アレッシオと話すときの僕は熱心な生徒だ。弾丸パロツトラの子供たちと遊ぶときは控えめな年長者で、仮面の男マスケリーノの前では従順な奴ど隷れいになる。

昔は一人しかいなかった。相手によって自分の色が変わることに気づいたのは、トラットリア・カプレットに来てからだ。

銀の仮面マスケラで顔を隠したノヴェラは、廃はい墟きよの窓からアウトードロモを見下ろした。

ここで仮面をかぶっているのは何人目の僕だろう。

話す相手が変わるだけで、僕はころころと変身する。

きっとバンドネオンのような装置なのだ。ボタンを押しながら蛇腹ベローを伸ばし、ゆっくり押し込むと、いくつもの複雑な音が絡み合って生まれ、ひとつの調和を形づくる。

ボタンの上で指を踊らせれば、ドミソのＣメジャーがミソシのＥマイナーに変わり、音が世界の色を変える。円筒シリンダの中では三つどころでなく、もっと複雑な和音が鳴り響いているのだろう。

僕だけではない。それはアレッシオも同じだった。

　ノヴェラの前では不機嫌な兄のようなアレッシオが、フォーラと一緒にいるときはショーケースを見つめる子供のような目をすることがある。ルーカの前では厳しく、他の弾丸パロツトラにとっては優しい父親だ。

　相手によって和音も変わる。

　僕のなかにいるのは四人ではないのかもしれない。

　魂というものは、実は無数にあるのかもしれない。

　五人目のノヴェラが、六人目のノヴェラが、腹の内側でそう叫んでいる。

　バンドネオンもフォーラの治療も、いまは記憶という名の歴史にすぎないと叫んでいる。

　ノヴェラはリッカルドのＭ９を構えた。

　自分がするべきことのため、ノヴェラは仮面と共にここにいる──。

　銀の仮面マスケラが青空を映し、東からの陽光を照り返す。

　廃はい墟きょになった地域ホールの三階から、ノヴェラはアウトードロモのスタートラインを見下ろしていた。視界の向こうでは赤い合成獣キメラのエンジンが重い咆ほう哮こうをあげている。

　あの運転席にルーカが乗っているのだろう。

　赤いシトロエンは弾丸パロツトラの合成獣キメラだ。新しく作られた車輛ではなく、昔のレースで使われたまま車庫に眠っていたものだ。きっと性能はバンビーニの合成獣キメラに劣っているのだろう。

　やがて、通りの向こうから前と同じクリーム色の合成獣キメラが現れた。コースの左右に分かれた弾丸パロツトラとバンビーニの前を、ファビオの乗った合成獣キメラがゆっくりと進む。

「敵はどこだ」

　視界を戻す。仮面の視界でノヴェラは標的を探した。

　一昨日の夕方、リッカルドの合成獣キメラは最後のコーナーを曲がるところで前輪を狙そ撃げきされた。

　ノヴェラの計算が正しければ、バンビーニの狙撃手はこの窓から見える景色のどこかに潜んでいたはずだ。アウトードロモの古いアスファルトは昨夜の雨をとうに蒸発させ、灰色にくすんでいる。ノヴェ

ラはリッカルドの拳銃を構えて、目め路じの限りに標的の姿を探し求めた。

　射撃のことは分からないが、弾だん倉そうには十五発の９ミリパラベラムが詰まっている。標的の姿が見えたらリッカルドのように迷わず引き金を引き、全弾を打ち込むまでだ。

　雨上がりの快晴で廃墟の中は蒸し風呂だ。ノヴェラのような人形でなければ、ここから狙撃をしようにも狙いがつけられないだろう。

　ふと、背後でかすかな足音が聞こえ、ノヴェラは銃を構えたまま振り返った。

「……ノヴェラ？」

「リタ！」

　ドアの前に立っていたのはリタだった。十一歳の少女は、仮面をつけたノヴェラを見ると怯えたような顔になった。

「どうしてここが」

「あたし、髪の毛が光って見えたから」

「この仮面じゃなくて？」

「うん、仮面それは見えなかった」

　リタはゆっくりノヴェラに近づいてきた。仮面の理由を聞くより先に、彼女の視線はリッカルドの銃に吸い込まれている。

「なにするの？」

「リッカルドの仇かたきを討うつんだよ」

「どうして」

「どうしてって……」

　そんな風に聞かれるとは思ってもみなかった。戸惑うノヴェラにリタが問いを重ねる。

「どうしてノヴェラがそんなことをするの」

「だってそれは、僕のするべきことだから……」

「どうして」

　そんなことは決まっている。

「リッカルドが死んだのは僕のせいだ」

　首をかしげて聞いていたリタは口を引き結んで右手を上げた。

　彼女の手が翻ひるがえる。

　ぱちん──小さな音がして、仮面に覆おおわれていないノヴェラの頬ほおを少女の平手がとらえた。

「……リタ？」

「違うよ、ノヴェラのせいじゃない」

　細い声が震えている。ポケットをまさぐったリタが黒い紐ひもをノヴェラに押し付けた。

　なんだろう。リッカルドの銃を置いてこんがらがった紐を解く。それは、弾丸パロツトラの誰もが首にさげているネックレスだった。

「リッカルドに頼まれてあたしが作ったの。ノヴェラの分だって」

「僕の……」

　円筒シリンダの中で記憶が蘇よみがえる。ノヴェラはこのネックレスに見覚えがあった。男娼プツターノの美人局つつもたせとして街に立った日に、リタがリッカルドに渡していたネックレスだ。わずか二日前のことがもう何週間も昔のように思えてくる。

　よく見ると、革の紐ひもが黒く見えたのは固まった血の色だった。リタからネックレスを預かったリッカルドは、これをポケットに入れたままレースに挑んだのだ。

　友達の血が染みついたネックレスを握り締める。

『楽にやろうぜ』

　そう言われたような気がした。

　リタは潤うるんだ瞳でこっちを見ている。円筒シリンダの内側でまた新しい音が弾け、違う和音が生まれるのが分かった。円筒シリンダの奏でる音楽に耳を澄ませる。銀の仮面マスケラ、リッカルドの拳銃、弾丸パロツトラのネックレス、赤い合成獣キメラ、リタ、楽にやろうぜ──ノヴェラを取り巻くあらゆるものが響き合って、新しい和音になる。

　リッカルドの無念は晴らされなければならない。何があってもそれは変わらない。

　けれど僕は大事なことを忘れていた。

　リッカルドの復ふく讐しゆうは、リッカルドの望む形で果たされなければならないのだ。

　リッカルドは僕に何を望んでいた？

　ノヴェラは弾かれたように立ち上がった。リタの手を取って助け起こす。

「間に合うかな」

「うん、きっと平気」

「ありがとう、リタ」

　笑顔になったリタが頷く。走り出したノヴェラの背後から彼女の声がした。

「ノヴェラ、勝ったらキスしてあげる」

　二回目のレースは、弾丸パロツトラ側が敗北と引き換えの条件を上乗せする形で決められた。

　弾丸パロツトラが勝てばバンビーニはスラムから立ち去る。これは前と変わらない。しかし負けたときはノヴェラの身み柄がらを差し出し、弾丸パロツトラは解散しなければならない。

　失うものの一方的に大きい条件だが、弾丸パロツトラもノヴェラもそれでいいと思っていた。問題は負けてからの心配ではなく、いかにしてリッカルドの無念を晴らすかだ。

　ルーカはもう赤い合成獣キメラの運転席にいる。リッカルドに比べてルーカの運転は決して上手とはいえない。ファビオはもう勝った気でいるだろう。アウトードロモに向かって走りながら、ノヴェラは腰に差したリッカルドの拳銃を握り締めた。

　二台の合成獣キメラが空ぶかしブリツピングを始める。全力で走り、スターターの銃声が轟とどろく前にコースにたどり着いた。

「ルーカ、待って」

　仮面を着けたノヴェラを見て、ルーカも弾丸パロツトラもバンビーニの連中までが目を丸くした。赤い合成獣キメラに取りつき、助手席

のドアを開けて中に滑り込む。

「なにしに来た、早く出て行け」

「僕が運転する」

「なんだと」

「リッカルドから教わったんだ。僕もリッカルドの無念を晴らしたい」

「無理だ、合成獣キメラだぞ」

　ルーカはハンドルから手を離さない。ノヴェラは叫んだ。

「リタが教えてくれた。違うんだよ、僕たちはたぶん逆のことをしようとしてる」

　リッカルドの無念を晴らすことと復ふく讐しゅうは違う。同じように、ルーカのするべきこととノヴェラのするべきことも違うのだ。

　リッカルドがノヴェラに期待していたのは拳銃こいつじゃない。

　ノヴェラは銃を抜いた。ルーカの動きが止まる。

「お前……」

「ルーカ、僕はこんなこと二度と言わないから聞いてほしい。みんなには内緒の話だ」

　銃口を下にしてルーカに耳を近づける。

「事故のあった夜、アレッシオが現場で確認したんだ。リッカルドの合成獣キメラの前輪に銃で撃たれた痕あとが二つあった。僕が聞いた銃声と同じ数だ」

　復讐は真実の下もとで行われるべきだ。ルーカの瞳が見開かれた。言葉はなかったが、烈れっ火かのような感情が押し寄せてくる。

「役割分担だ。僕は誰が撃ったのかを知りたい。ルーカも知りたいだろう」

　弾丸パロツトラの合成獣キメラが勝ちそうになれば、リッカルドを撃った奴がまた出てくるだろう。逆にレースで負けたら何も得られずに全てを失うことになる。

「本当にこいつを走らせられるんだな」

「リッカルドは褒ほめてくれたよ」

　頷うなずいたルーカは黙って後部座席に退がった。ノヴェラは運転席に座りハンドルを握った。ファビオは一人、こっちは二人、重量でもレースはさらに不利になった。

「ルーカ、リッカルドの銃をお願い。僕はちゃんと撃ったことがないから」

「アレッシオはなんて言ってるんだ」

「あの人は関係ないんだろ」

「ちげえねえ」

　拳銃を受け取ったルーカが笑った。シートベルトを締める。仮面が邪じゃ魔まをして前が見えない。銀の仮面マスケラを脱いだノヴェラは、かわりに弾丸パロツトラのネックレスを首に巻いた。

「おい、それはなんだ」

「もらったんだ、リッカルドに」

「お前にはまだ早ぇよ」

「早い？」

　無理でも駄目でもなく、ルーカはそう言った。

「いつかは僕も弾丸パロツトラに入れるかな」

　口ごもったルーカが自分の銃をしまい、リッカルドの遺のこしたＭ９を構える。ノヴェラも深呼吸をして正面に広がるアウトードロモを見つめた。

　本当のレースなんて初めてだ。けれど車の扱いはリッカルドから叩き込まれている。

　━お前はお前のすることをしろ。

　その言葉は円筒シリンダの内側に強く響いている。

　これまではどんな言葉も同じ強さで響いていた。けれど、言葉にはそれぞれ別の重さがあるのだ。ノヴェラはこのスラムでそれを知った。

「敵は最後のカーブだよ」

「了解したぜ、ノヴェラ」

　レースはバンビーニ側の銃声で始まった。

　灰色の合成獣キメラほどではなかったが、赤い合成獣キメラも性能は悪くないようだ。スタートダッシュはファビオの合成獣キメラとほぼ互ご角かくだった。そのまま直線のアスファルトを突き進んでいく。

　車体が揺れる。ノヴェラはハンドルを取られまいと必死で押さえつけた。

　リッカルドから聞いてはいたが、合成獣キメラの運転は普通の車とまるで違っていた。揺れがひどい。ともすれば軽い車体が浮き上がりそうになる。エンジンの轟ごう音おんと地面をこするタイヤの悲鳴が、途切れなく生まれては飛び去ってゆく。ルーカがなにか叫んだようだが聞こえなかった。ハンドルを押さえ込みながらノヴェラは唾つばを飲んだ。

　ルーカには偉そうに言ったが、合成獣キメラに乗るのは初めてだ。

　アクセル、ブレーキ、ハンドル、シフト、クラッチ、全ての操作はリッカルドから教わっている。普通の運転とは違う裏技、たとえばハンドルを切って後輪を滑らせるような操作も理屈としては頭に入っている。しかしこの轟音と振動は想像をはるかに上回っていた。

「こんな、凄すごいよ……うわっ！」

　一昨日、リッカルドの走ったコースをなぞって走る。

　アクセルを踏み込むと無茶なスピードに車台シヤーシがたわみ、箱全体がガタガタと震える。いつものドライブのように景色を見る余裕なんてない。先の道路とダッシュボードのメーターを読むので精一杯だ。

　路面の些さ細さいな段差ひとつで車が跳ね上がる。ものすごい縦揺れと振動で、タイヤはろくに接地していないように感じられる。ハンドルにしがみついて、身体が浮きそうになるのをなんとか持ちこたえる。後部座席ではルーカがシートに抱きついていた。いったいリッカルドはこんな嵐の中で、どうやって操そう縦じゆうしていたのだろう。

「前に出られないか！」

「限界！」

轟音の中、ようやく聞こえた言葉に叫んで返答する。

合成獣キメラは外からの入力に反応する機械、乱暴に言ってしまえば円筒シリンダと一緒なのだ。アクセルを踏み、ハンドルを回すことで車体は制せい御ぎよされる。アレッシオは拳銃のことを手の中の怪物と言っていたが、運転席のノヴェラは怪物に飲み込まれたようなものだった。

窓の外、ファビオの運転するクリーム色の合成獣キメラが隣を走っている。並走しているつもりだが、じりじりと抜かれていくのが分かった。やはり性能は向こうの勝ちだ。ノヴェラはリッカルドがやったように、性能差を操そう縦じゅうでカバーしなくてはならない。

振動に翻ほん弄ろうされながらも、円筒シリンダの内側では歯車が適切な対応を計算している。

できるだけブレーキを踏まずにカーブを曲がれるスピードと進入角の見当をつけ、コースを修正する。どうにかミラーを覗くと、ルーカは黙って窓の外を見ていた。ノヴェラの運転を信頼しているのではなく、自分の役割を果たすので必死なのだろう。

「ルーカ！」

叫んだ。振動とエンジンの唸うなり声に言葉がかき消される。もう一度声を張り上げた。

「この揺れで銃が撃てる？」

「いいからファビオの前に出ることだけを考えろ！」

「わかった！」

最初のコーナーを抜けると直線の道路が開ける。

クリーム色の合成獣キメラは車体半分ほどのリードをさらに広げにかかった。

少し先に二番目のコーナーがあり、その向こうは蛇だ行こうした道がしばらく続く。そして第三コーナーを曲がると、あとはゴール手前までの長い直線が続くことになる。そこまでにファビオを抜かなければ、最終コーナーに隠れた狙撃手は姿を現さないだろう。ノヴェラのハンドルが蛇へびを燻いぶり出さなくてはならないのだ。

並走していたクリーム色の合成獣キメラが外側に離れていった。いったん外側にコースを取ったファビオが、第二コーナーからの立ち上がりで強引に内側を狙ってくる。完全に前に出すわけにはいかな

い。アクセルをべったり踏み込んだまま、内側から車を寄せていく。

「当たらないのか」

「人形は人間よりも正確な操作ができるんだ」

「お前は人間になりたいんじゃないのか」

「そんなのレースに勝ってから考えるよ！」

　コーナーを抜けると道は緩ゆるやかに蛇行している。ハンドルを右に切るとすごい音がした。

「なにこれ！」

「タイヤが擦こすれる音だ、気にすんな！」

「タイヤが……うわっ！」

　──ガンッ、ゴンッ！

　岩でもぶつかってきたような音と衝撃が襲いかかってくる。

「これは！」

「知るか、サスが底付きしたんじゃねえのか！　俺も車は詳しくねえんだ。リッカルドにでも……」

　思わずその名前を口にしたルーカが口を噤つぐむ。激しく揺さぶられる車内でルーカは拳銃を構え、窓の外に意識を集中した。

　いつ制せい御ぎょを失うか分からないスピードだ。後ろにルーカが乗っているおかげで辛うじてバランスが取れている。

　相手の運転が荒いのはファビオも悪路に苦戦しているのだろうか。あるいは素しろ人うとがハンドルを握っていると思って舐なめているか、保険を当てにしているのかもしれない。

　強引な攻めを諦めたファビオが再び外側にコースを取る。二台が横並びになった。

　計算できる範囲の際きわどいハンドル操作でなんとか並走しているが、このままでは最後の直線でファビオの合成獣キメラに抜かれてしまう。それでは復ふく讐しゅうが果たせない。

「絶対に勝つ！」

　ノヴェラは叫んだ。

　シフトを変えるたびに車のあちこちからギィギィと嫌な音が上がる。

「ああ勝つぜ！」ルーカの声がした。

「勝つ！」

　計算も根拠もない、けれど叫んだ。決意と同時に身体が熱くなってくる。まるで体内を循じゅん環かんする水銀が沸ふつ騰とうしたかのようだ。

　必ずファビオに勝つ。そのためにはどうしたらいい？

　初心者のノヴェラは想像するだけだ、こんなときリッカルドだったらどうするだろう。円筒シリンダをフル回転させてイメージを膨ふくらませた。

　リッカルドはレースのときにブレーキを踏まない。リタがそう言っていた。そんな風に思い切ることができるだろうか。ノヴェラはリッカルドの魂をわずかでも受け継ぐことができるだろうか。

　意識を集中させる。振動と騒音を振り払い、機械の唸うなり声に耳を澄ませた。

　次のコーナーだ、両手でハンドルを押さえ込む。ノヴェラたちは決して怪物に飲み込まれたわけではない、怪物はこの手の中にある。

　車を外に振った。直線ではファビオを抜けない。勝負をかけるのはここしかない。蛇だ行こうするコースのおかげでスピードが上がらず、じりじりと二台の差は広がっていく。

　コーナリングに向けて再び角度を計算する。ファビオが前のコーナーと同じタイミングでブレーキをかけるなら、出し抜くことができるかもしれない。カーブの百メートル手前から、思い切ってアクセルを踏み込んだ。

「行ける！」

　クリーム色の合成獣キメラが減速する。もっとだ。計算したギリギリのちょっと向こう側までアクセルを緩めず、狙いすましたようなタイミングでコーナーの内側に割り込んだ。

　今だ。ブレーキを踏ふみ込んでスピンすれすれでコーナーを抜け、暴れるハンドルを押さえつける。

　ここを抜ければあとは直線だ。特注のスピードメーターは二〇〇キロを指している。

「やったぜ！」

　ついに前に出た。ファビオに抜かせないように進路を塞ふさぎながら、少しずつアクセルを緩ゆるめる。それでも一二〇キロは出ているのだ。窓の外を古びた石造りの建物が飛び去っていく。

　振動と騒音に包まれた運転席で、ノヴェラは味わったことのない現実感に身を委ねていた。

　風、音、振動、そして何倍速かで飛び去る景色と、ハンドルを通して感じる合成獣キメラのレスポンス──無数の情報が雪崩なだれをうって円筒シリンダに流れ込んでくる。

　こんなに密度の詰まった情報を受け取るのは初めてだ。

　かつてノヴェラが見ていた景色は、高い位置からの俯ふ瞰かん図ずのようだった。地域ホールの廃はい墟きょからアウトードロモ全体を見下ろすように、全ての情報と自分との間には一定の距離があった。

　今は目線の高さが地上まで下がり、ぐっと視野が狭せばまったようだ。いや、ピントが合ったと言い換えてもいい。仮面マスケラをつければ視界はもっと狭まるのだろうか。

　クリーム色の車体が外側から幅を寄せてきた。

「きたぞ、ノヴェラ」

「ナメやがって」

　使ったことのない言葉が喉のどを衝つく。そっちがその気ならぶつけてやろう、ハンドルを外に切った。二台の合成獣キメラが急接近する。助手席の窓の向こうにファビオの顔が見えた。怯えている。さらに車を寄せていくと慌あわてたファビオがハンドルを外に切った。クリーム色の車体が斜め後方に遠ざかる。すぐにブレーキの悲鳴が聞こえた。

「あいつコケやがった」

「リタイヤ？」

「路肩に乗り上げただけだ、すぐに来るぞ」

　ファビオが走れるのなら勝負は終わっていない。ノヴェラは安あん堵どした。ならば卑ひ怯きような狙撃手も諦めずに仕掛けてくるだろ

う。

　スピードを緩めた。もうファビオの車を気にする必要はない。最後のカーブが迫ってくる。

　敵はどこに潜んでいる。

　狙撃ができて身を隠せそうな場所はどこだ？

　全ての神経をハンドルと左右の瞳石ジエンマに集中させた。地域ホールの三階から見下ろした風景と、地上の風景を円筒シリンダの中で重ね合わせる。

「ルーカ、右のゴミ捨て場だ」

　アクセルを緩めながら叫ぶと、窓を開けたルーカが身を乗り出した。速度は八〇キロを割っている。果たして銃を構えたバンビーニの姿が見えた。あの日、ノヴェラを押さえ込もうとした爬は虫ちゆう類るいの目をした奴だ。

「あいつだ」

「駄目だ、狙いがつかねえ」

「つかまっていろ、奴の正面につける」

「なんだって！」

　合成獣キメラはもうコーナリングに入っている。前輪を撃たれたらリッカルドの二の舞いだ。

「スピンしたらごめん」

「マジかよ」

　こうなったらやるしかない。

　ノヴェラは思いきりハンドルを切りながらサイドブレーキを引いた。赤い車体が軋きしみを上げる。

　リッカルドから教わった悪戯いたずらだ。ハンドルを押さえ込むと合成獣キメラの車体が耳を裂さくような悲鳴とともに横滑りを起こした。同時に大気を裂さくような銃声。問題ない、奴の撃った弾はあさっての方向だ。

　テールが滑る。赤い合成獣キメラは爬は虫ちゆう類るいの目をしたバンビーニの眼前に背面を向けた。唖あ然ぜんとするそいつの正面に

ルーカの銃口！

　リッカルドのＭ９が三度吼ほえ、大柄のバンビーニが血ち煙けむりを上げて倒れるのがバックミラーごしに見えた。アクセルを踏み込み最終コーナーを抜ける。どうやら横滑りで左の後輪がパンクしたようだ。

　それでもファビオの車が追いつくよりは早い。ゴールに集まった弾丸パロツトラの歓声が二人を呼んでいる。ノヴェラとルーカの合成獣キメラは、徐行しながらゆっくりとゴールラインを割った。

「勝った……！」

　ハンドルを握ったままノヴェラは宙を仰いだ。窓の外にはギャラリーの弾丸パロツトラが集まってくる。後席からルーカの手が伸びて、頭をくしゃくしゃにかき回された。

「やったな新入り」

　親指サムを立てた右の拳をぶつけ合う。

　生命の危険を冒おかして、人間を撃ち殺した。意図して禁きん忌きを踏み越えたノヴェラの腹の中で、円筒シリンダの軸じく受うけが軋きしみをあげている。

　けれど、緑柱石スメラルドの瞳ジエ石ンマに映る景色は、初めて見るほど鮮やかな色をしていた。

　真上からの陽差しを浴びた合成獣キメラが赤い車体を震わせた。

　咆ほう哮こうが止まり、怪物が鉄の塊かたまりに戻る。

　ルーカとノヴェラが車から降りると、弾丸パロツトラの子供たちが歓声をあげて駆け寄ってきた。

「勝ったねルーカ、勝ったんだ」

「リッカルドの仇かたきが討うてたよね」

「当然だ、腹ごしらえをしたら荷物をまとめるぞ」

　勝利はしたが、ルーカの口調は厳しかった。

　リッカルドの仇は取ったが、仮面の男マスケリーノの掟おきてを踏みにじってしまった。この先、弾丸パロツトラに厳しい制せい裁さいが課せられることは想像に難くない。

「約束を忘れんなよ」

　ルーカが大声を出すと、肩を竦すくめたバンビーニが未練たらしくこっちを窺うかがう。

「行こうぜ」

「帰るのかよ、ノエル」

「ファビオが負けたんなら仕方ないだろ」

　ひときわ小こ柄がらな少年がバンビーニをまとめて立ち去ろうとしたところへ、ベージュの合成獣キメラが滑り込んできた。

「まだだぜ、ルーカ」

　運転席からファビオが顔を出した。手には拳銃を握っている。

「てめえ！」

「こっちもリーダーを殺されておめおめと引き下がれねえんだよ。お前らもここで逃げたら負け犬だぞ」

　ファビオに煽あおられたバンビーニたちが次々に銃に手をかけた。

　弾丸パロットラの銃はルーカの持っている二丁だけだ。しかし周りを取り囲んだバンビーニのうち七人が、ルーカと同じ形の拳銃を持っていた。

「往生際が悪いったらねえぜ」

　ノヴェラはリタを背中にかばい、ルーカは子供たちを合成獣キメラの陰に逃げ込ませた。

「どうしよう、ルーカ」

「どうにもやべえな、チビだけでも逃がせりゃいいが」

「おいルーカ、前はホテルで世話になったな」

　銃口をルーカに向けたファビオがブレーキを踏む。指はもう引き金にかかっている。

「あばよ、ルーカ」

　乾いた銃声がアウトードロモに響いた。

「……！」

呻うめき声とともに拳銃がアスファルトに転がった。ルーカの両手にはＭ９が握られたままだ。合成獣キメラの窓から伸びたファビオの腕が、だらんとだらしなくドアにへばりついた。

「アレッシオ！」

ノヴェラは叫んでいた。いつの間にそこにいたのだろう。自分たちを囲んだバンビーニの背後に黒ずくめの殺し屋が立っている。その右手に黒光りを放つ怪物が握られていた。バンビーニが後ずさりをして、弾丸パロットラの子供たちが次々に歓声を上げた。

アレッシオは俯うつむいたまま黙っている。誰かが銃口を動かしたら撃ち殺すつもりかもしれない。親父バーボの顔を真上からの陽光が照らし、額ひたいの下に漆しつ黒こくの影を落としていた。

「お前ら逃げたほうがいいぜ、そこにいるのは殺し屋だ」

ルーカが忠告する。しかしアレッシオのことを知らないバンビーニたちは、握り締めた銃を離そうとはしない。黒ずくめの姿に威圧されながらも、そっちを睨にらみつけている。

そのとき、ファビオの乗ったクリーム色の合成獣キメラが轟ごう音おんを上げた。

バンビーニと弾丸パロットラの視線がそっちに集まる。息詰まる沈黙のなか、ファビオの合成獣キメラはバックで発進するとアウトードロモの反対側へ向きを変えて走り去っていった。

「おいファビオ？」

「どうしたんだよ」

「なにやってんだ、帰るぞ」

ノエルの声で我に返ったバンビーニたちは、ばらばらと散らばるように走り去った。

大きくため息をついてルーカが銃を下ろす。右手の怪物をジャケットの内側に戻したアレッシオは、顔を上げると肩を竦すくめて笑った。

「なんで来たんだよ、アレッシオ」

「ガエターノにガキの躾しつけがなってねえと言われたんだ」

「ふざけんなよ」

　ルーカが舌打ちをする。勝手にバンビーニと対決した弾丸パロットラに肩入れなんかしたら、アレッシオの立場は相当悪くなるはずだ。

「こんなことして、あんた平気なのかよ」

「これも仕事のうちだ」

　リッカルドの真ま似ねをしたアレッシオが、二本指で敬礼をする。

「ごまかすなよ、俺たちはボスを裏切って……」

「腹が減ったな、帰ってニコロのピザでも食うとしよう」

「おい、くそ親父！」

　ニコロや子供たちが小躍りしながら食堂トラツトリアへ戻っていく。ルーカがアレッシオを『親父』と呼ぶのをノヴェラは初めて聞いた気がする。

「ったく、なんなんだよあいつは」ルーカが砂すな埃ぼこりにまみれた顔で口を尖とがらせる。

「親父バーボなんじゃないかな」

「なんだって？」

　目を丸くしてノヴェラのほうを向いたルーカは、急に意地の悪い顔になった。

「なんだよお前の顔、ドブ水で顔を洗ったみてえだぜ」

　きっと真っ黒なのだろう。手の甲で拭ぬぐうと、案あんの定じよう灰色の砂がべっとりと付く。

「ルーカだって埃まみれだよ」

「こら、なにしやがる」

　これなら仮面の男マスケリーノも僕だと気づかないかもしれない。

　おかしくなったノヴェラは、砂で汚れた手をルーカの顔になすってやった。

　石いし窯がまからニコロの焼いたピザのいい匂においがしてくる。

　夕方の食堂トラツトリアはいつに増して賑にぎやかだった。

朝に簡単な食事をしてからなにも口に入れていない。アウトードロモの緊張が解けた弾丸パロツトラたちは、食欲の塊かたまりになっていた。

ニコロが腕によりをかけたピザは焼き上がるそばから平らげられてしまい、ノヴェラのところまで回ってくる様子がない。ノヴェラは仕方なく、隅のテーブルでフルーツの盛り合わせをつまんでいるフォーラの前にバンドネオンを置いた。

「ただいま、フォーラ」

またこの食堂トラツトリアに戻ってこられてよかった。この弾むような気持ちは初めての感覚だ。

「待たせてごめんね」

「待ってなんかいないわよ、うぬぼれ屋さん」

フォーラが楽しそうに笑った。バンドネオンに合わせて語りかけると、今朝けさはまるで伝わらなかったノヴェラの言葉が面白いように彼女の中に染み込んでゆく。

「どんなお話を聞きたいのかしら？」

ノヴェラのことは相変わらず弟だと思っているようだけれど、今日は赤ずきんも猟師も懐中時計を振り回そうとはしなかった。ノヴェラの気持ちが安定することでフォーラの症状も安定するのだろうか。

「また布人形を作っておくれよ、フォーラ」

「いいわよ、これが終わったらね」

集まってきた子供たちにフォーラの集中が途切れてしまう。

「いいよ、あとでゆっくりやろうか」

いったん手を止めた。もともと食堂トラツトリアで治療をするつもりはなかったのだ。机に戻したバンドネオンの隣には銀の仮面マスケラが置かれている。

復ふく讐しゆうの仮面だ。レースのあと、一度は捨ててしまおうかと思ったけれどできなかった。

なぜって、僕にはまだ復讐すべき相手がいるから……。

「お前も新入りか」

　取り付いてくる子供たちから逃げてきたアレッシオが、ノヴェラの首にさがった弾丸パロツトラのネックレスをつまんだ。見ればアレッシオの首にも同じ弾丸パロツトラのネックレスが巻かれている。

「新入り同士ですね」

「よしてくれ、あいつの悪ふざけだ」

「いいじゃない、それリッカルドのよ！」

　アレッシオに指を差されたリタが、頬ほおを膨ふくらせながら親指サムを立てる。隣ではルーカが「あんまり似合わねえな」と口を尖とがらせながら、まんざらでもなさそうだ。

「よろしく、親父バーボ」

　思いきってそう呼ぶと、アレッシオは眩しそうな顔をした。

「ずいぶん人間みたいな面つら構がまえになったな」

「そうでしょうか」

　頭を撫なでられる。僕はどこか変わったのだろうか。

　思い返してみてもピンとくることはない。しかし物忘れをするようになった。たとえば仮面の男マスケリーノのことだ。ご主人様とベッドの上でどんなことをしていたのかを思い出そうとしても、円筒シリンダの記憶はぼんやりとしていてうまく取り出すことができなくなっていた。

　人間になるというのはどういうことか、まだノヴェラには分からない。

　物を忘れるということなのだろうか。

「どうした」



「いえ、また親父パーボの嫌いな話ができそうです」

「ぞっとしない話だ」

頭を掻かく黒ずくめの殺し屋に親指サムを立ててみせる。

「新入り、こいつを持ってろ」

後ろから顔を覗のぞかせたルーカが黒い塊かたまりを突き出してきた。リッカルドのＭ９だ。

「僕が？」

「一人前が僕なんて言うな、俺でいい」

親父バーボらしいことを言ったアレッシオは、新しいピザが焼き上がるのを待てずに生のチーズをつまんでいる。あらためて銃じゆう把はを握ると、リッカルドの拳銃はノヴェラの手の中にぴったりと収まった。

「そんな物を持っちゃ駄目よ、ノヴェラ」

腰に手を当てたフォーラが姉さんみたいな顔で怒っている。

「いいんだ、俺のだから」

ひと回り背の高い妹を見上げながら、ノヴェラの円筒シリンダは自分が笑っていることに気がついた。

V

黒いスーツの二人組を街の連中が避けて通るのは、マフィアとの付き合い方を彼らが熟知しているからだ。マフィアのやったことには目と耳と口を塞ふさぐ。その原則を守っている限り、堅かた気ぎの市民に火の粉こが飛んでくることは滅多にない。

硝しよう煙えんの匂においを撒まき散らしていた抗争が終わって三年、ベルモントのスラムにもつかの間の安定が訪れた。そいつを保つのがボスの兵隊であるアレッシオの役目であり、やがて組織に入るであろうルーカの役目だ。

停めておいた車に乗ったアレッシオは、キーを回してハンドルを握った。助手席に座ったルーカに口やかましく注意されながら、おっかなびっくりアクセルを踏む。

「曲がるときはよく見て曲がんだよ、死ぬぞ」

「どっちを見るんだ、右か、左か」

「全部に決まってるだろ。あんた銃を持ってるときは背中にだって目が付いてんだろ」

「そうカリカリするな、お前は教えるのが下手だな」

「あんたに言われたくねえよ」

　さんざん銃でしごかれた仕返しとばかりにルーカの罵ば声せいが飛ぶ。おかげで以前は車に乗るたびにどこかへぶつけていたが、なんとか当てずに乗れるようになってきた。

「アレッシオ、どうして急に運転なんかする気になったんだい」

「リッカルドの抜けた分だ」

　黒いスーツを着たルーカが目を丸くした。

「運転ならノヴェラが上う手まいんだぜ」

「あいつがいつまで食堂トラツトリアにいられるか分からない」

「そうか、そうだよな。でもノヴェラが帰りたがらないのに突き返すのは嫌だぜ」

「人形を気味悪がっていた奴の言い草か」

　ごまかすように笑ったルーカが窮きゆう屈くつそうにネクタイを緩ゆるめた。限りなく黒に近いダークグレーのスーツは、アレッシオが見立ててやったものだ。十五万ヴィンチもするスーツを着て、ルーカは北部組織の連中を相手に交こう渉しようのテーブルについている。

　今日はその帰りで、スムースに進んだ話し合いにルーカは上機嫌だった。

　大人びた黒服をルーカはすっかり気に入っているようだ。通りを歩きながらも、ショーウインドウに映った自分の姿をしきりに眺めていた。いまも助手席のルーカは、ミラーに映したネクタイの位置を何度も直している。安物を締めていては舐なめられるので、ネクタイも靴くつも一級品を揃そろえてやった。これでまた十万ヴィンチ──アレッシオがボスから受け取った二百万ヴィンチはもう半分も残っていない。

「まだ飯までは間があるな。食前酒アペリテイーヴオでもひっかけてから戻るか」

「今日はやめとこうぜ」

「一人前になりたければ酒にも慣れておくんだ」

「そうじゃねえよ、左折もできねえくせに飲酒運転する馬鹿がどこにいんだよ」

「できないわけじゃない」

「こするのはできたって言わねえんだよ」

　右折ばかりの遠回りをしながらトラットリア・カプレットまで戻ると、すぐ近くで銃声が聞こえた。三回、立て続けに黄たそ昏がれの空気を震わせる。

「お、やってるな。早く停めてくれよアレッシオ。馬鹿、ぶつかるって。ゆっくり停めろって言ってるだろ！」

「急ぐかゆっくりかはっきりしろ」

「両方だ、あんたいつも言ってるだろ」

　叱られながらなんとか車を停める。「二十五点」辛から口くちの採点をしたルーカが、助手席から飛び出して食堂トラツトリアの裏手に走っていった。またすぐに銃声が聞こえてくる。バンドネオンの治療を終えたノヴェラが射しや撃げきの練習をしているのだ。

　最初はルーカが先生役だったが、ノヴェラの射撃はアレッシオの運転よりもよほど筋がいいようだ。リーダーが射撃で負けてはたまらないと、近頃はルーカも積極的にタイヤを狙っている。夕闇のなかで標的に命中させられる距離を覚えるのは、大切な訓練だ。

「お前もうアレッシオから習えよ」

「親父バーボは忙しいんでしょ。あ、俺の標的を撃たないでよ」

「ケチ臭いこと言うなよ、お前細かいぞ」

　銃を撃つとき、ノヴェラはいつもボスが持たせた銀の仮面マスケラを被かぶる。いい趣味ではないし視界も狭せばまると思うのだが、本人が取ろうとしないからアレッシオも好きにさせている。

「あ、その弾だん倉そうだって俺のだし、ルーカのはさっき渡したでしょ」

「新入りは遠えん慮りよするもんだろ。お前はそろそろ休きゆう憩けいしてフォーラの面倒でも見てやれ」

「ずるいよルーカ」

　なにやらごちゃごちゃ揉もめだした二人を残して、アレッシオは食堂トラツトリアへ戻った。

　アウトードロモのレースから三日、バンビーニの姿が消えたスラムは、すっかり日常の顔を取り戻していた。兄妹人形を狙っていたブラッキアリを片付けた報告は、その日のうちにガエターノに電話で済ませている。

　不思議と仮面の男マスケリーノは何も言ってこなかった。

　スラムのことは弾丸パロツトラが交こう渉しようして決めていいと、投げやりな返答があったきりだ。

　広いが雑然と荷物の置かれた食堂トラツトリアの奥、厨ちゆう房ぼうから子供たちの賑にぎやかな声が聞こえてくる。アレッシオが顔を覗のぞかせると、五、六人の弾丸パロツトラが下ごしらえの真っ最中だった。コック帽をかぶったニコロが細かく指示を出して、子供たちを取りまとめている。

「おかえり親父バーボ」

　手を止めたニコロが声をかけ、子供たちもそれに倣ならった。

「ちょっとした高級料理店だな」

「人数だけはね。ねえ親父バーボ、よかったら相談があるんだけど」

　エプロンで手を拭いたニコロが子供サイズのパニーノに手を伸ばした。

「食べてみてよ」

　一口かじると、胡こ椒しようで焼いた鶏とりの味が口の中に広がる。

「美味うまいな」

「おいらはなんにも手を加えてないんだよ。まだ踏み台が要る子もいるけど、みんな仕事の飲み込みが早いんだ」

「驚いたな、もう一ついいか」

　笑ったニコロからパニーノを二つ受け取って口に放り込む。料理の手伝いは交代制だったが、最近はニコロの提案で同じメンバーがやることになっていた。

「たいしたもんだ、商売になるんじゃないか」

「注文をさばく時間もずいぶんと短くなったんだよ。だからさ親父バーボ、ランビキ地区の外からも注文を取っていいかな？」

　いつも静かなニコロが瞳を輝かせている。

　スラムから出るということは、陽の当たる場所へ行くということだ。商売の手を広げることは身軽さを失うことでもある。そもそもこの配達も無許可で行っているのだ。ギャングとしての弾丸パロツトラのことだけを考えれば、出るべきではなかった。

　子供たちの作ったパニーノをかじる。

　大衆食堂タベルナを経営していたニコロの両親は、売人の抗争に巻き込まれて射殺された。親の店のかわりにトラットリア・カプレットを大きくすることが、ニコロのささやかな夢なのだ。いやニコロだけではない。子供たちにはスラムの外へ出ようとする力がある。

「分かった、ルーカと相談しておこう」

「ありがとう、親父バーボ」

　いずれにしろボスのリアクションを待ってからだ。夕食の支し度たくにとりかかる子供たちを眺めていたら、美人局つつもたせの仕事を終えたリタのグループが帰ってきた。

「ねえちょっと父さんバーボ、外でノヴェラがなにしてたか知ってる？」

　商売用の赤いコートを脱いだリタが真っ赤になって怒っている。

「連れションしてたのよ、信じらんない！　ルーカとつるんでからノヴェラったらどんどんおかしくなってるわ。これ以上悪い影響が出る前に隔かく離りしたほうがいいわよ、ルーカを！」

　どすどすと食堂の床を踏み鳴らしたリタは、キャビネットに置かれたリッカルドの写真に「ただいまリッカルド」と声をかけた。一緒に帰ってきた弾丸パロツトラの少年たちがそれに倣ならう。リッカルドの写真に挨あい拶さつをする習慣ができたのは、レースでバンビーニを破ってからのことだ。

「今日は観光客が引っかかったのよ。五万ヴィンチも払ってくれたの」

「あまり派手にやるなよ。市警察も現行犯は見逃してくれないからな」

「もちろんドジを踏んだりはしないわよ」

　まだ十一歳のリタだが、彼女も自分なりにリッカルドの代役を果たすつもりでいるようだ。参さん謀ぼう役の抜けた巨大な穴を埋めるために、食堂トラツトリアの全員が自分の役割を考え、弾丸パロツトラを崩ほう壊かいさせまいとしている。

　十九時を回ると、仕事を終えた子供たちの出入りが激しくなってきた。

　トラットリア・カプレットは配達専門だから店に客が来ることはない。おかげで食堂トラツトリアの中は弾丸パロツトラの私物だらけになっている。連れ小便でリタを怒らせたルーカとノヴェラは、アレッシオたちが食事を始めたころになってようやく戻ってきた。

「殺し屋のルーカだ」

「おかえり、殺し屋さん」

　たちまち黒服のルーカに子供たちが群がる。スーツを着てマフィオーゾの格好をするようになってから、ルーカは小さい弾丸パロツトラから大人気だ。

「遅かったな」

　アレッシオに睨にらまれたノヴェラは慌あわてて席につくと、石いし窯がまから出てきたばかりのフォカッチャにかぶりついた。

「こら、飯の前は手を洗え」

「ごめんなさい！」

　ノヴェラとルーカが厨ちゆう房ぼうの手洗いに駆け込んでいく。全く騒々しくてかなわないが、手をごしごしと拭ふいてばかりいたノヴェラがずいぶんと変わったものだ。彼が腹の中に抱えていた、人間になるという目的は達成されつつあるのだろうか。

　手を綺き麗れいにして戻ってきたノヴェラは、あらためてフォカッチャに手を伸ばすと丸ごとかじりついた。それから、横目でアレッシオを窺うかがう。

「なんだ」

「あ、いえ、その……」

　下を向いてまたかじりつく。それからもそわそわちらちらと、食事をしながらアレッシオの様子が気になって仕方がないようだ。やがて

こらえかねたように口を開いた。

「ルーカの交こう渉しようはうまく行ってるんですか」

「問題はない、今が踏ん張りどころだな」

　反仮面の男マスケリーノの強硬派だったブラッキアリが死んだおかげで、北部の組織とボスの調ちよう停ていはすぐに落着した。アウトードロモで起きたことは全て、ギャングの暴走行為による偶発的な事故として幕が引かれた。不運な出来事だったが、もう事故が続くことはないだろう。

　そして仮面の男マスケリーノからスラムを任された弾丸パロツトラが、北部組織の窓口役と交渉をすることになった。

　アレッシオが驚いたのはルーカの変へん貌ぼうぶりだった。スーツを着たからではないだろうが、話しぶりも直情的な一いつ本ぽん槍やりではなく、融ゆう通ずうの利いた交渉ができるようになった。

　北部の組織はベルモントのスラムにも麻薬ドウローガの販売網を持っている。いくら弾丸パロツトラが薬物を嫌っていても、スラムに麻薬ドウローガはつきものだ。いまさらそれを受け入れないとは言えない現実がある。ボスにスラムを任された弾丸パロツトラのルーカは、そのうえで自分たちの立場を説明した。

　つまり、スラムでの麻薬ドウローガ販売については従来どおり容認する。

　弾丸パロツトラはこれら一切に協力も邪じや魔まもしない。しかし取引にバンビーニ、ならびに元バンビーニの子供を使うことは認められない。なぜなら彼らは弾丸パロツトラの掟おきてを破った連中だからだ。

　そのシンプルな主張を北部組織に認めさせるために、ルーカとアレッシオはここ数日で何人かの窓口役と会合を持った。相手から舐なめられないように、ルーカには繰り返しマフィアのテーブルマナーを叩き込ませている。

「よくルーカが大人しく本なんか読んでるわね」

「必要なら覚えるしかねえだろうよ。それより親父バーボ、ボスからはなんの返事もないのかよ」

「気にするな、返答がないってことは、文句もないということだ」

　セントポール教会での密会を最後に、ボスとの連絡は取れなくなっ

ている。ガエターノも忙しいの一点張りで、弾丸パロツトラに具体的な指示が出されることはなかった。であればアレッシオとルーカのするべきことは、ボスの権けん益えきを守ることと、弾丸パロツトラの存在を北部の組織に認めさせることの二つだ。

　それにしても、ここがベルモントでよかった。これが南部だったら、独断で動いたアレッシオと弾丸パロツトラは、とうの昔に冷たくなって土の下に埋められていただろう。

「世話になるな、親父バーボ」

　スーツのルーカがすまなそうに頭を下げた。レース以来、ルーカはときどきアレッシオを親父バーボと呼ぶ。

「いいからそっちのを盛ってくれ、腹が減ってたまらねえ」

　アレッシオが皿をつき出すと、白い歯を見せたノヴェラがおかしそうに笑った。

　執事のガエターノから電話が入ったのは、部屋に戻ってすぐだった。

「アレッシオ、五十万ヴィンチは返せねえが聞くだけ聞いてくれ」

「なんだ、話してみろ」

「ボスから、人形をすぐに返すように伝えろと言われた。どうもお前が旧市街でやらかした西部劇を快く思っていないようだ。悪いが、俺にできるのはここまでだ」

「了解だ」

　受話器を戻した。電灯を消したままベッドに仰向けになる。

　やはりボスは怒っているようだ。兄妹人形を守るという名分があるから、おおっぴらには文句を言わないのだろうが、それすら小こ賢ざかしい真ま似ねだと思われているかもしれない。

　この数日、凪なぎの中で風を待っていたが、どうやら吹いたのは向かい風のようだ。

　暗い部屋の天井を見上げる。

　ノヴェラとルーカは夜の見回りに出ている。

　ボスからの命令を受けて、連中はどう考えるだろうか。

フォーラの具合は好転していない。リッカルドの死を体験することでノヴェラは人間に近づけたのかもしれないが、フォーラを治すという本来の課題は未解決のままだ。いまだ彼女の円筒シリンダはくるっている。

食堂トラツトリアで彼女に迫られた記憶が蘇よみがえり、アレッシオは携帯酒瓶ヒツプフラスクのスコッチを呷あおった。

半開きのドアから三階の廊ろう下かが見える。

食事には顔を見せなかったが、廊下の奥の扉を開ければフォーラがいるはずだ。

このごろのフォーラは食堂トラツトリアの周りを散歩しては、小石なんかを拾ってきてテーブルに並べたりしている。コップに雑草を生けることもあった。なんの遊びをしているのかノヴェラが尋ねても、彼女は笑うばかりで答えようとしない。

食堂トラツトリアで襲われそうになってから、アレッシオはフォーラを遠ざけていた。ノヴェラや子供たちの前で顔を合わせることはあっても、彼女と二人きりになるのだけは徹底して避けた。

あのフォーラは、間違いなくかつてアレッシオを魅み了りようした骨董人形アンテイークだ。

ヴェネツィアで名を売った娼婦人形プツターナのテレジーナなのだ。

アレッシオはいまだにそれを、ノヴェラにも仮面の男マスケリーノにも話していない。心のどこかでは、ノヴェラの治療によってフォーラが当時の記憶を取り戻すことを願っていたが、その前にボスの命令が届いてしまった。

どのみちアレッシオとは別の世界の住人なのだ。たとえフォーラにテレジーナの記憶が戻ったとしても、彼女はボスの愛玩道具でしかない。

きっと俺はベルッチの館を襲撃した日から、薄暗い森の中に迷い込んでしまったのだろう。その森はアレッシオが若き日々を無む駄だに過ごしたヴェネツィアの迷路と同じ景色をしている。

夜の森は暗闇の支配する世界だ。早く抜け出さなくては取り込まれてしまう。

ボスからの命令は森の出口へと続いている。

森の奥へと続く道は廊ろう下かの向こうで口を開けている。

アレッシオは茂みの中に立ち止まったまま、両方の道を眺めていた。その後にはガキどもがぞろぞろとついてきている。

今朝けさがた、ルーカはこんなことを言っていた。

「俺たちがついていくのは、仮面の男マスケリーノじゃなくて親父バーボなんだ」

ノヴェラを仲間に迎え入れたつもりでいる弾丸パロツトラどもは、きっと森の奥へと行きたがるだろう。能天気な連中にとっては、仮面の男マスケリーノの庇ひ護ごよりも身近にいるノヴェラとフォーラが大切なのだ。

しかし兄妹人形の返へん還かんを拒絶したら、トラットリア・カプレットはボスの兵隊に襲われる。これはバールでの銃撃戦どころではない、明確なボスへの裏切りなのだから。

携帯酒瓶ヒツプフラスクは空になっている。窓際の机から安物のスコッチを取ってきて、ボトルのまま喉のどに流し込んだ。酔いが兆してきたが眠れそうになかった。

朝になるのを待って、アレッシオはノヴェラと行きつけのバールに顔を出した。

カウンターに立ったまま、濃いエスプレッソで昨夜ゆうべのアルコールを洗う。見るからに裏社会の人間と少年型骨董人形アンテイークの組み合わせは人目を引いたが、好奇の視線を露骨に向けてくる物好きはいなかった。

「あんたが人形を連れてくるなんてな」

「店主、こいつは人間だ」

「本当かい、こんな綺き麗れいな顔の子を給仕バリスタで雇えれば、うちも繁はん盛じようするんだがねえ」

「繁盛されては困る。気軽に使えなくなるからな」

「ひどいことを言いやがる。それにしても……」

店主はノヴェラが首から下げた弾丸パロツトラのネックレスをしげしげと眺めた。

「女の客が押し寄せてくるんじゃないかって思うんだがねえ」

　未練たらしくアレッシオの顔色を窺うかがう。

「厄やつ介かいだぞこいつは。口を開けば小難しい問答ばかりするからな」

「そんなことはありません。僕は人間と自動機械人形オートマタの魂たましいについて考えているだけで……」

　たちまち始まった魂問答に店主が肩を竦すくめる。からかわれたノヴェラは不本意そうな顔でエスプレッソをすすった。

「車の運転は慣れたか」

「はい。いまはアウトードロモで合成獣キメラを走らせています。リッカルドみたいにはできないけれど、もうバンビーニが来ても負けません」

　茶ちゃ化かされたので強がっているのだろう。ひと月前は複雑怪奇だったノヴェラの円筒シリンダが、ずいぶんと分かりやすいものになったような気がする。笑ってカップを舐なめると、ノヴェラが不安そうにアレッシオを見上げた。

「僕はリッカルドの代わりになれていますか」

　アレッシオの前ではどうしても「僕」になってしまうようだ。それに気づいたノヴェラが「すみません」と頭を下げた。

「お前がそうしたいなら、それでいい」

「はい」

　カップに視線を落としたノヴェラが、横目でちらちらと質問の返事を促してくる。

「お前はよくやっている。ルーカもずいぶん救われているはずだ」

「そうですか」

「だがな、その代役もいつまでできるか分からなくなってきた。昨夜ガエターノから電話があって、ボスがお前たちをご所しよ望もうだ」

　安あん堵どを浮かべていたノヴェラの顔がたちまちこわばった。エスプレッソのカップがソーサーにぶつかって耳障りな音を立てる。

「親父バーボ……」

「そんな目で見るな。利口なお前は分かっているだろうが、俺にでき

ることはそんなに多くない。だがお前たちがどうしたいかを聞いておきたい」

「答えられません」

「ボスのところに戻るのは嫌か」

「……答えられません」

「最初に会ったときと一緒だな」

「すみません」

　ノヴェラが視線を落とす。しばらくカウンターの木目を眺めてからこっちを向いた。

「それは今すぐですか」

「時期は聞いていない。だから指示があるまでこちらから動くつもりはない」

「みんなには？」

「まだ話していない」

「親父バーボ、しばらくの間……」

「ああ、お前が答えを決めるまでは伏せておく」

　カップを置いてカウンターを離れた。

「どちらへ」

「普通の人形には必要のないところだ」

　赤面するノヴェラを置いて手洗いに行く。しばらくは一人で考えさせてやろう。主人パドローネの要求に自動機械人形オートマタの円筒シリンダはどういった答えを導みちびき出すのだろう。あるいはこれも仮面の男マスケリーノの仕組んだ揺さぶりなのかもしれない。

　セントポール教会で聞いた話が事実ならば、ノヴェラもフォーラも仮面の男マスケリーノを少なからず憎み、恨うらんでいることだろう。その思いを打ち負かすのは瞳石ジエンマの指輪だ。いくら憎しみが強烈であっても、瞳石ジエンマの指輪を前にした人形は反抗の術すべを持たない。

　瞳石ジエンマに逆らった人形は、円筒シリンダの軸じく受うけが砕

けて自壊してしまう。だから主人パドローネの命令は絶対なのだ。アレッシオが裏切り覚悟で兄妹を守ろうとしても、いくら彼らが食堂トラツトリアに残りたいと願っていても、ボスが瞳石ジエンマで命令を下せばそれで決まりだ。主人パドローネへの抵抗は徒労でしかない。

　━しかし、もし彼らが人間になっていたとしたら？

　手洗いから戻ると、一人の男がノヴェラに話しかけているのが見えた。くすんだコートを羽織った小こ柄がらな中年だ。ボスか、あるいは他の組織の者かもしれない。手洗いの脇に置かれた椰や子しの鉢はち植うえの陰から様子を窺うかがった。

「ベルッチという古こ物ぶつ商しようを知っているかね」

　男の声が聞こえた途端に酔いが醒さめた。

「いえ、知りません」

「そうか、君は自動機械人形オートマタだね。主人パドローネはどうしている」

「昼過ぎにこの店に来るので、それまで待っているように申し付かっています」

　ノヴェラが丁てい寧ねいに答えると中年の男はなにか言いたそうにしていたが、やがて諦めたように店を出ていった。

「行くぞ、しばらく外出は控える」

　ノヴェラを連れて店を出た。

　あいつは警官だ。アレッシオの脳のう裏りには男の顔が焼き付いている。ヴェネツィアの麻薬捜査官パオロ、アレッシオのようなマフィアにとっては天敵のような男だ。

　いやな予感がする。二人は尾行に気を配りながら急ぎ足で来た道を引き返した。

　仮面の男マスケリーノから連絡があったのはその日の夜だった。

　ガエターノからの電話を受けたアレッシオは、なにより先に麻薬捜査官がベルモントにいることを伝えた。

「パオロがベルモントにいるぞ」

「本当か」

「そっちで把は握あくしていないのか。今朝けさがたバールで見かけた。ベルッチのことを嗅かぎまわっているようだ」

「了解した。あとはこちらで対応しておく。お前は気にするな」

「寝ね惚ぼけてるのか、ベルッチが麻薬取引で引っ張られるのは構わんが、こっちまで火の手が回ってきたらたまったもんじゃない。気にせずにいられるか」

「そういうことじゃない、新しい仕事なんだよ。お前はガキのお守もりから卒業だ、スラム暮らしも今日限りでいい」

「どういうことだ」

「朗報だ、仮面の男マスケリーノはミラノへ進出することを決定した。その足がかりをお前が作るんだよ。明日にはミラノへ発たってもらう。向こうの組織や裏社会について生の情報を集めてくれ」

「現地に兵隊はいるのか」

「全てはこれからだ。ミラノに着いたらカバリエリに俺の名前で部屋を取れ。追って活動資金と指示を渡す。いいか、これはチャンスだぞ」

「俺が組織に入る話はどうなっている」

「これだけの仕事を任せるんだ、もう組織の一員と思っていい」

「そうか、分かった」

　受話器を置いた。それから電話線を引っこ抜き、部屋の隅に電話機ごと叩きつけた。

　なにがチャンスだ、これは体ていのいい厄やつ介かい払いだ。若い頃のアレッシオが何度も舐なめた泥どろの味とそっくり一緒だ。

　飲みかけのスコッチで喉のどを洗う。覚悟はしていたが、高ぶる感情を抑えるのには苦労した。

　頭の中で数日分の記憶を遡さかのぼる。

　大道芸人の殺し屋とヴェネツィアの麻薬捜査官。どのラインがどこと繋つながっているのだろうか。いや、いまさら考えても始まるまい。仮面の男マスケリーノはアレッシオを排はい除じよして、好き勝手に人形と弾丸バロツトラを弄もてあそぶつもりなのだろう。さらに過か酷こくな運命をノヴェラとフォーラに背負わせ、高みの見物を楽しむに違いない。

ボトルが空になった。

鉄パイプで殴なぐられたように頭の中がぐらぐらと揺れている。あるいは煮立っているのかもしれない。ブラッキアリ・ファミリーを撃ち殺したことを後悔はしていない。しかしアレッシオの未来は、再び濁だく流りゆうの中に飲み込まれることになりそうだ。

いっそこの街から逃げてやろうか。ノヴェラとフォーラと弾丸パロツトラを連れてナポリに逃げ込むのも悪くない。

無駄だ。

ベルモントの裏社会を制圧し、北部の組織にも顔の利く仮面の男マスケリーノからは逃げ切れまい。結局は受け入れるしかないのだ。明日になればアレッシオは列車でミラノに向かい、兄妹人形と弾丸パロツトラはボスの管理下に置かれるだろう。

「酒が足りないぞ」

誰ともなしに文句を言って部屋を出た。

たしか厨ちゆう房ぼうにはワインの買い置きが残っていたはずだ。

ふらつく足取りで階段へ向かう。けつまずいて階段の手すりにつかまった。顔を上げると目の前に人形の部屋が口を開けているのが見えた。

vi

ヴェネツィアは水の都。

水面を渡る風が吐息のように頬ほおを撫なでると、旅人は魂たましいの捜し求めていた癒いやしの国を訪れたことを知る。

バルコニーの欄らん干かんから身を乗り出して、櫂かいをさばく水先案内人ゴンドリアーノを見下ろした。水みな面もを渡る風が髪をなびかせる。朝の陽差しを浴びたヴェネツィアの町は、まるで御お伽とぎの国のように煌々きらきらと眩しい。

建物の間を縦横に走る水の小路。ゴンドラには何度も乗ったけれど、行ったことのない水路がたくさん残っている。だからこうやって町を見ながら、運河がどこに繋つながっているかを想像するだけで私はわくわくする。

「フォーラ、聞いてる？」

　ああ、まただわ。

　その声で全てがしらけてしまい、私は不機嫌な顔をして弟のノヴェラを振り向いた。生真面目で陰気で神経質で、そのくせご主人様に媚こびるのだけは上手なノヴェラなんて大嫌い。

　私は大嫌いなノヴェラと向かい合って、大好きなバンドネオンの音色に耳を傾ける。

　最近変わったことはないかと聞かれて、お屋敷の様子がおかしくなったことを話してやった。

「様子って？」

「ノヴェラは気づかないの？　おかしいのよ。どの扉を開けても同じ部屋に出てしまうの。大広間を開けたと思ったら寝室で、お風呂に入ったつもりだったのにやっぱり寝室、ピアノ室も寝室だったし、書しよ斎さいに本を返そうとしても寝室になってるの。ねえノヴェラ、すごいことを思いついたんだけど聞いてくれる？　ひょっとすると……ひょっとするとよ、私ほんとは雑用のメイドにされちゃったんじゃないかしら。本で読んだことがあるわ。雑用メイドは立ち入れない場所がお屋敷にはいっぱいあるんだって。大広間とか、ご主人様の部屋だってそう。だから扉の向こうが同じお部屋になっちゃったんじゃないかしら」

「そんなことないよ」

「でもおかしいじゃない。ペルラ姉様だって、すっかりお見限りなのよ」

「フォーラ、こう考えてみたらどうかな。ひょっとするとここはヴェネツィアのお屋敷なんかじゃないのかもしれない。もっと小さな家に僕たちは暮らしているのだとしたら」

　ときどきノヴェラは突とつ拍ぴよう子しもないことを思いつく。私は呆あきれるのを通り越して吹き出しそうになってしまった。

「ノヴェラって変わってるわ。ご主人様はそういうところがお好きなのかしら」

「僕はご主人様に好かれてなんかないよ」

「うるさい、ノヴェラなんて勝手に謙けん遜そんしてればいいのよ」

　嫌味なノヴェラはやっぱり大嫌い。

　私は弟に向けていた視線を、バルコニーから見えるヴェネツィアの

町並みに戻した。

　抜けるような青空を見ているとときどき不安になる。私はここにいてもいいのかしら、ご主人様に構ってもらえないまま、いつかは捨てられてしまうのではないかしら。そんな想像をするだけで涙が溢あふれてきそうになる。

　もちろんノヴェラなんかに泣き顔を見られるのは死ぬほど嫌だから泣かないけれど、そうやって我慢をすると今度はお腹が痛くなる。かっかっと火照ほてるように熱くなって痛むのだ。そういえば私は頭痛になったことがない。

「つまらなそうだね」

「そう見えるのなら目がいいわね」

「こうやって話すのは嫌い？」

　卑屈なノヴェラも大嫌い。けれどそんなことは言わなくてもいいことだから、私はにっこりと笑ってみせる。

「平気よ、ノヴェラと話すのもご主人様に言われたお勤めのうちだもの」

　私はご主人様の言いつけに一度だって背いたことはない。

　たまにわざと逆のことをすることもあるけれど、それだってご主人様に楽しんでもらうために考えた、私なりの駆け引きだ。

　なのにご主人様が冷たいのは、私が御お伽とぎ話ばなしを上手く話せなくなったからかもしれない。ノヴェラがいくらバンドネオンを奏かなでても、どうしても王子様の名前が思い出せないのだ。

「人形なんてみんな壊れてしまえばいいんだわ。だってそうでしょ、人に愛してもらえない人間をオートマタって呼ぶのよ」

　困ったように笑ったノヴェラは、バンドネオンの音色に乗せていつもの話を始めた。自己とか記憶とか魂たましいなんかが出てくる、思いっきり退屈でつまらない話。私はペルラ姉様の赤ずきんのほうがずっとわくわくできる。それより我慢ならないのは、ノヴェラは自分が人形だからって、姉の私まで人形だと思っていることだ。

　今日聞かされたのは、思考と意思は別のものだなんていう本当にどうでもいい話だった。

　ノヴェラ先生はもっともらしい顔で意味の分からないことを言う。「歯車でもできるのが思考で、魂によって生まれるのが意思だ」なん

て、言葉遊びみたいなことを言っては目をうるうるさせている。

「ねえ、どうしてフォーラの心には鍵かぎがかかってしまったのだろう」

「愛の鍵？」

「違うよ、記憶の鍵」

「つまんないうえにしつこいわ」

　ふてくされた私は、ふと思いついてノヴェラに聞いてみた。

「ねえ、記憶ってそんなに大切なの？」

「そうだよ、記憶がなかったら自分の形がなくなってしまう」

「思い出なんてなくたって、私は私だわ」

「それはフォーラにも記憶があるからだよ。けれどいまは鍵がかかっているから、少ししか取り出すことができないんだ。どうしてだろう」

「決まっているわ、要らないものだからよ」

　ふいにノヴェラははっとした顔になった。感心したような目でわたしを見る。賢さかしげな弟をやりこめたような気がして、私はちょっとだけ得意になった。

　けれどやっぱりノヴェラはノヴェラだった。せっかくいい気分になっていたのに、またわけの分からないことを聞いてくる。

「フォーラは人間になったの？」

「ばかみたい、私はもともと人間よ」

　もう頭がおかしくなりそう。私は人間に決まっている。それに本当はこんなことを話している場合じゃないわ。だってもうすぐ満月になる。こんなところでのんびりしていたら大変なことになってしまう。満月になったら狼が出てくるのに……。

　怖くなった私をよそに、ノヴェラはご主人様と出かける支し度たくをはじめた。

「私は置いてきぼり？」

「ごめんね、いい子で待ってて」

「生意気よ弟のくせに」

　ノヴェラが出て行くと部屋は急にがらんとしてしまった。

　ちょうどいいわ。もともと今日はゆっくりしたい日だったんだから。

　部屋にひとり残された私は天てん蓋がいつきのベッドに身を投げ出して、ぼーっと時が過ぎるのに身を任せることにした。

　レースのカーテン、クリスタルのシャンデリア、毛足の長い絨じゆう毯たんにアンティークの家具。どれもご主人様が私のために買い集めてくれた調度品だ。なのにときどき、私の目にはこの部屋が隙すき間ま風かぜの吹き込む廃はい墟きよのように映ることがある。なぜだか知らないけれど、そういうとき私はひどく落ち込んでしまうのだ。

　目を開ける。

　ほら、やっぱり。

　私の視界に飛び込んできたのは、見たこともない板張りの小部屋だった。

　もうこんな景色は見たくない。悪夢みたいな幻を振り払おうと、私は極ごく上じようの葡萄酒ぶどうしゆに手を伸ばした。とろりと濃厚な紅ルビ玉ーノの液体を、とっておきのヴェネツィアングラスに注いで一息に飲み干す。私はお酒に酔わない体質だから、ただ味を楽しんでいるだけ。それでも少しは気持ちが紛れてくる。

　ふかふかのベッドに仰あお向むけになって、私はご主人様を想った。

　ご主人様はいつも貿易のことばかり考えている。

　何が上がったとか下がったとか、そんな数字のことばかり。

　そういえば、ご主人様を驚かせてやろうと思って、私なりのビジネスプランを披ひ露ろうしてみせたことがあった。私が得意のお裁さい縫ほうで作ったぬいぐるみやアップリケを、世界に輸出してみたらどうかって。

　あのときは名案だって褒ほめてもらえたけれど、まだ商品化の話はやってこない。

「でも負けないわ」

　そうしてお酒をもう一杯。

　ご主人様とノヴェラはどこにお出かけしたのだろう。悔しいけれど、ノヴェラには貿易の話が分かるみたい。意地悪なご主人様は、いっつも私をほったらかしにしてノヴェラとばかりお話をするのだ。

　階下で物音がして、酔っ払ったご主人様とノヴェラが帰ってきた。ご主人様はノヴェラの肩に手なんか回している。またお腹が火照ほてってガンガンと痛くなった。

　やっぱりノヴェラは女なのかもしれない。

　ふいに気づいてしまった。

　本当はノヴェラは私の妹で、ご主人様を独り占めにしようとしているんだ。そうに違いないわ。いつもごまかされていたけれど、こうなったら動かぬ証拠をつかんでやる。

　そうだわ、それって名案じゃないかしら！

　飛び起きた私は自動機械人形オートマタの使用人に言いつけて、古い写真機を持ってこさせた。柱の陰に隠れてノヴェラが部屋に戻るのを見届ける。半開きになったドアにぴたっと背中をつけて、部屋の中を窺うかがった。

　ノヴェラの動く気配と衣きぬ擦ずれの音がする。シャッターチャンスをものにするために、息を殺して足を忍ばせる。ノヴェラが女だって動かぬ証拠を写真に収めて、鼻先に突きつけてやるんだから。

　いち、にの……。

　唾つばを飲みこんだそのとき、ドアの向こうからノヴェラが顔を覗のぞかせた。

「なにやってるの」

「な、な、な、なんでもないわ！」

　シャツの前を開けたノヴェラを前にして、私は馬鹿みたいに取り乱してしまった。顔が熱くなってくる。がんばれ私、こんなことでひるんでどうするの。

「写真？」

「そうよ、記念にいろいろ取っておこうと思って」

「なんの記念？」

「ヴェネツィア仮面祭！」

　口から出まかせに取り乱す私をノヴェラがきょとんと見つめる。

「なんでもないわ、気にしないで」

「うん、写真が撮れたら見せて」

「見せてあげるわよ、いいのが撮れたらね」

「ねえフォーラ……」

　裸みたいな格好で私を見つめたノヴェラは、それから奇妙な言葉を呟いた。

「フォーラはここにいたい？」

「なんの話？」

「ご主人様が家に帰ってこいって言ってるんだ」

　ノヴェラの表情がこころなしか沈んでいる。私は写真機のレンズをノヴェラの顔に向けて、ぱしゃっとシャッターを切ってやった。

「おかしな子ね、ご主人様はここにいるじゃない」

「え？」

「ここが私たちのお家よ、お馬鹿さん」

　ノヴェラがぱちくりと瞬まばたきをした。心なしか緑の瞳が潤うるんでいる。

「そうだね、フォーラの言うとおりだ」

　唇を震わせて微笑ほほえむノヴェラを見ていたら、急に不安になってきた。

　──ご主人様が帰ってこいと言っている？

　お腹の中がドキドキと疼うずく。

　なぜだろう、お腹は熱いのに身体がすっかり冷えきってしまった。

　どうしてこいつはこんなにも私の心を揺さぶろうとするのかしら。文句を言うかわりに私はノヴェラの手を握った。だってすごく寒かったから。ノヴェラでも誰でもいいから暖めてほしかった。

　そうよ、写真機なんてなくてもノヴェラが女だってことを確かめる方法があるんだから。

　手を握ったままノヴェラを引き寄せた私は、黄金きん色の髪を指先にからめ、耳たぶに唇を近づけて囁ささやいた。

「ノヴェラ、猟師さんごっこしない？」

「いやだ！」ぎょっとした顔でノヴェラが叫ぶ。

「怒らなくてもいいじゃない、今日は私が狼をやるから」

「フォーラどうしたの、おかしいよ」

「いいから来て、男なら嬉うれしいはずよ」

　抵抗するノヴェラの腕をひねり、よろめいた足を払ってベッドに引き倒した。起き上がろうともがく腰の上に馬乗りになり、両肩を押さえつける。格闘戦の性能も私のほうが上だ。ノヴェラの円筒シリンダは戦闘用に調律されていないから抵抗しても無駄なこと……。

「……？」

　いま、なにを考えていたのかしら。記憶の扉から奇妙な言葉が零こぼれ出したような気がする。けれど私は構わずにノヴェラのズボンに手をかけた。

「やめてフォーラ」

　顔を真っ赤にしたノヴェラがじたばたと暴れる。はだけられたシャツから覗のぞく白い肌が、私の視界に眩しく入り込んでくる。この子、やっぱり女だわ。押さえ込んだままズボンの中に手を差し入れた。

「本当に男だったら、ご褒ほう美びにしゃぶってあげる」

「冗談でも怒るよ」

「冗談じゃないわ、なによこんなもの」

　銀のバンドネオンを取り上げた。本当はこれが私を淋さびしくしているのかもしれない。

「だめだよ、返して」

「嫌よ、返してほしければメス狼みたいに、よつんばいになりなさい」

「フォーラ！」

　そのとき、私の腕の間で緑柱石スメラルドの瞳がぎらりと光った。両手を伸ばしたノヴェラは、卑怯にも私の長い髪を両手でつかむと手た綱づなのように絞しぼり上げた。

「痛い、痛いわやめて！」

　綺き麗れいに巻いたロールが台無しにされてしまう。私はすっかり取り乱してしまった。

　もういやだ。大人しく降参したら許してくれるかしら、それともノヴェラの円筒シリンダを腹ごと割り砕いたほうがいいのかしら、逡しゅん巡じゅんした私のお尻をノヴェラの膝が蹴けり上げる。悲鳴をあげて逃げようとすると、飛んできた靴くつの踵かかとがお腹にめり込んだ。

　私の身体はベッドから撥はね飛ばされ、背中からクローゼットにぶつかってうつ伏せに崩れ落ちた。

「や、やったわね！」

　悔しい。歯を食いしばって顔を上げると、とたんに周りの景色がおんぼろの廃はい墟きょみたいになった。悔しくて、悲しくて、私は大声をあげて泣いてしまった。喉のどを詰まらせて、しゃくりあげて、それでも涙が次々と流れ落ちてくる。

「ノヴェラはずるいわ！」

「どうして」

「だってそうでしょ、男のくせにノヴェラばっかりご主人様に可愛かわいがられて！　ご主人様は私のところに全然来てくれないのよ。何がいけなかったの？　私はずっとご主人様を待ってるのに、くる日もくる日も宝石やテーブルフラワーを飾っておもてなしの用意だってしてるし、時間をかけておめかしだってしてるのに。なによ、ノヴェラなんていつも泥だらけじゃない」

　目から零こぼれる涙に続くように、唇を割った泣き声が溢あふれ出してくる。気持ちが爆発して、泣くのを止められなかった。どうして私はノヴェラなんかに負けてしまうんだろう。

　途中から言葉にならなくなった。頭の中がすっかりぐちゃぐちゃで、なんで泣いているのかも分からなくなる。泣きじゃくる私をじっと見ていたノヴェラは、ベッドに腰掛けるとバンドネオンを膝に置いて、ゆっくり蛇腹ベローを動かした。

　ノヴェラの和音が広がった。

　小さくて静かな、気持ちの中に染み込むような、どこか寂しげな旋せん律りつが私を包み込む。

　私は泣き腫はらした顔を上げてノヴェラを見た。もう涙は落ちてこない。気持ちがすうっと穏やかになっていくのが分かって、不思議と少しだけ嬉うれしかった。

「赤ずきんの話、する？」

「うん」

　旋律はいつしかグレゴリオ聖歌に変わっていた。

　鼻をすすりながらノヴェラの隣に腰を下ろす。どうしてノヴェラが女に見えたりしたんだろう。どうしてこんな私にノヴェラは優しくしてくれるんだろう。そんなことを考えながら御お伽とぎ話ばなしを口ずさむと、一度もつかえずに最後まで話すことができた。

「できたよ、フォーラ」

「そうかしら」

　ノヴェラが嬉うれしそうに微笑ほほえむ。恥ずかしくなって私は下を向いた。ノヴェラの奏でるバンドネオンはこんなにも私を落ち着かせてくれる。

　そしてノヴェラが旋せん律りつに乗せて、いつもの質問をしてきた。

「僕は君の何？」

「……お兄ちゃん」

　その夜、私はひどく泣いてしまった。

　嬉しくて、寂しくて、恐ろしくて、悔しくて、悲しくて、妬ねたましくて、いろんな感情がお腹の中でぶつかっては弾け、涙がとめどなく零こぼれ落ちた。

　バンドネオンが聴きかったのにノヴェラはいない。

　気持ちの悪い銀色の仮面マスケラをつけて、夜なのに仕事があると言って出ていってしまった。ひとり残された私は、隙すき間ま風かぜの音に怯えながらベッドで泣きべそをかいていた。

　窓の外から狼の足音が聞こえるみたい。

　こんな夜に外に出たら、きっと狼に食べられてしまう。そんな想像をするたびに怖くなって、私はベッドの中でがたがたと震えていた。

　ペルラ姉さまはどこにいるのかしら。

　昔はこんな怖い夜がくると、必ずペルラ姉様が来てくれた。

　泣きべそをかいた私にキスをして、添い寝をしながら身体のいろいろなところを触ってくれた。そうよ、姉様はブロンドの可愛かわいい女の子が好きなの。

　私は姉様に身体を預けるだけで安心できた。姉様の指が身体の中に入ってきたときも、ちっとも怖さなんて感じなかった。姉様の指先を感じながら聞いた御伽話は、どれも胸が弾けそうになるくらい過激で刺激的だった。

　そんなペルラ姉様も、もうずっと姿を見せてくれない。

　ご主人様も、ペルラ姉様も、ノヴェラもいなくなったら、私は本当にひとりぼっちだ。

　また涙が零れそうになる。足音が聞こえたのはそのときだった。みしみしと床のきしむ音がする。扉をノックされた私は小さく悲鳴を上げてしまった。

「どなた？」

　返事がない。ゆっくりと開いた扉の向こうから黒い影が部屋に滑り込んできた。

　狼？　ううん、違うわ。

「ご主人様！」

　私の声はきっと弾んでいたはずだ。

　入ってきたのは間違いなくご主人様だった。なにかいいことがあったのかしら。

　さっきまでの怖さも寂しさもどこかへ飛んで行ってしまった私は、うきうきしながらご主人様を部屋に招き入れた。

　足元がふらついているのは、酔っていらっしゃるからだ。

「フォーラ……」

「なあに？」

　もう一度私の名前を呼んで、主人様が抱きついてきた。

　嬉うれしい！

　私もぎゅっと抱きしめた。ご主人様に抱かれながら一緒にベッドに倒れ込む。

　やっぱり、ご主人様も私のぬくもりが忘れられなかったんだわ。どきどきしながら深呼吸をしたら、すっかり泥でい酔すいしたご主人様の身体から、ぐったりと力が抜け落ちてしまった。

「ええそうよ、昔からご主人様は勝手だったわ」

　口を尖とがらせてご主人様の頭を太ふと腿ももの上に乗せる。期待して損したけれど、でもこうやってご主人様をあやしてあげるのも悪くはないかも。

「ご主人様、お酒が過ぎますよ」

「フォーラ……」

　気持ちよさそうに膝ひざ枕まくらをしながら、ご主人様の手がふらふらとお酒のボトルを探している。

「あん、まだお召し上がりになります？」

　囁ささやくと、ご主人様はこっくりと舟を漕こぐように頷いた。

　前にご主人様からもらった高いお酒が残っていたはずだ。中身の少し残ったウィスキーのボトルを引っ張り出した私は、琥こ珀はく色のお酒を口に含んでご主人様にキスをした。

　舌と一緒にアルコールを流し込む。ご主人様が喉のどを鳴らすまで口の中で舌を動かし続けた。

　私も身体が熱くなってきたみたい。長いキスが終わって唇を離すと、ご主人様は安心したように力を抜いてくれた。

　きっとお仕事で疲れているんだわ。お酒はもうおしまいにして、膝枕のご主人様をじっと見つめる。

　こんな顔をしていたかしら？

　なかなか美形だと思う。うん、けっこういい男よね。無ぶ精しよう髭ひげを生やしたご主人様の顔が、太ももの上で無防備に瞳を閉じている。

「ご主人様……」

　この部屋は隙すき間ま風かぜが入るから寒いのだ。ご主人様の身体がわずかに震えている。

「いいわ、私が暖めてあげる」

　ご主人様を優しくベッドに寝かせた私は、ドレスの裾すそをからげると内う股ちでご主人様の顔を挟み込んだ。熱い吐息が下着に当たると、なにか悪いことをしているような気がして、お腹の中がドキドキする。

「おかえりなさい」

　私は幸せを噛かみ締めながら、ご主人様の引き締まった身体を覆おおう黒い衣服に指をかけた。

vii

　──この世で最上の音楽とは、親愛なる者の腕に抱かれて聞く子守唄だ。

　両親のいないアレッシオにとって、それは姉の歌だった。

　三つ上の姉は彼の唯一の肉親で、尊敬と崇拝の対象だった。昼は姉の作った料理を食べ、夜は姉の御お伽とぎ話ばなしと子守唄を聞きながら眠りに落ちた。そして朝は姉に叱られながら、のろのろと学校へ通う。そんな平穏な日常と、テレビや小説に出てくるマフィオーゾへの淡い憧れがアレッシオの世界の全てだった。

　八歳のときに初めて人を殺したのも、姉を守るためだった。

　姉を襲おうとした乱暴者を撃ち殺した。おかげでマフィアに目を付けられるようになったが、子供心にもそれは誇らしい記憶だった。

　次に人を殺したのは十二歳だ。

　アレッシオの住んでいたアパートの真下の階の住人がマフィアの構成員で、小こ競ぜり合あいの相手に火をかけられたのだ。ガソリンを撒まかれたので火の手は早かった。夜中に叩き起こされたとき玄関はすでに火の海で、アレッシオは姉に手を引かれてバルコニーへと逃れた。

　隣の家のバルコニーへ飛び移り、そこから逃げ出すしか道はなかった。

しかしここは六階だ。

高いところの苦手なアレッシオにそんなことができるわけがない。

パニックを起こしたアレッシオは姉に頬ほおを叩かれた。もう火の手は窓に迫っている。

「よく見て、あなたなら飛べるわよ」

姉が言うのなら大丈夫だ。アレッシオは無事に飛び移り、振り向いて姉の姿を探した。

火の手が窓ガラスを割ったのはそのときだ。姉の姿はない。あちこちを見回したアレッシオが見たものは、欄らん干かんに絡みついた細い手だった。

踏み切りのバランスを崩した姉は、隣のバルコニーに届かず右手一本で欄干にぶら下がっていた。泣き声を上げたアレッシオは懸けん命めいに姉の手を引き上げようとしたが、姉の身体は柵さくの向こう側だ。子供の力ではどうしようもなかった。

アレッシオが欄らん干かんを乗り越えて、自分の足につかまってもらったら？

そんな想像が頭を掠かすめたが、高所恐怖症のアレッシオは身体が竦すくんで動けなかった。それでも姉の名を呼んで、いまそっちに行くからと励ました。半ば以上は自分への励ましだった。

震える両手で欄干をつかむ。アレッシオは自分が何をしているのかも分からなくなっていた。ただ欄干を越えることだけで頭が一杯で、両手にはまるで力が入らなかった。

「アレッシオ、無理をしないで」

姉の落ち着いた声がした。いつだって姉は落ち着いていて、正しいのだ。

正気に返ったアレッシオが下を見ると、欄干の向こうで静かに首を振った姉は優しい目でこう言った。

「お願い、誰か呼んできて」

アレッシオは隣の部屋の窓ガラスを割って、慌あわてて廊ろう下かに飛び出した。自分の家は火の海になっている。走った。運良く階段で消防士を捕まえて全速力で駆け戻った。

姉さん、いま助ける！

　割れた窓からバルコニーへ出た。火事の炎が風を起こし落ち葉を舞い上げている。欄干から身を乗り出して姉の姿を探した。いない、どうして？

　バルコニーの欄干にしがみ付いていた細い手首は、どこにも見えなかった。

　そうしてアレッシオは御お伽とぎ話ばなしと子守唄をいっぺんに失った。

　フォーラに抱かれて目を覚ました。

　飲みすぎたようだ、頭が割れるように痛い。外はまだ暗かった。

　狭いベッドでフォーラと肌が触れ合っている。二人とも裸だった。

　記憶のページをゆっくりとたぐったアレッシオは、自分がとんでもない樹海の迷宮へ踏み込んでしまったことを悟った。酔った勢いでフォーラを抱いてしまったのだ。フォーラに抱かれたような気もするが、そんなことはどうでもいいことだ。

　身体を起こす。不思議とたじろぎはしなかった。

　そうなってしまったものは仕方がない。むしろ気持ちは晴れ晴れとしていた。つまりは、このままミラノ行きの列車に乗るわけにはいかなくなったまでの話だ。

　スタンドをつけるとフォーラが黙って涙を流しているのが見えた。泣きながらじっと天井を見つめている。その表情は静かで、しかし救いを求めているようでもあった。

「夢を見たのか」

　アレッシオが声をかけると涙がすっと消え、フォーラは艶あでやかに微笑ほほえみかけてきた。

「ご主人様」

「どうして泣いていた」

「泣いてなんかいないわ」

　無意識の涙だったのだろうか、一片の悲哀も感じさせない笑顔がアレッシオを見つめている。上半身を起こしたフォーラはシーツを引き寄せて胸を隠した。リボンの解かれたブロンドの髪が、肩口にさらりと垂れ下がる。

「もし私が泣いていたのなら、それはご主人様が私を捨てたからよ」

「俺のことか」

「ご主人様は、ノヴェラよりもフォーラを大切にするって言っていたのに」

　緑柱石アクアマリーナの瞳がまっすぐアレッシオをとらえている。

「……テレジーナ？」

　もしや記憶が戻ったのか。思わずその名前を口にすると、フォーラは伸ばした指をアレッシオの顎あごの下でくるくると回した。

「意地悪ね、別の女ひとの名前で呼ぶなんて」

　いつだったかノヴェラはフォーラの症状をこんな風に分ぶん析せきしていた。

　フォーラの記憶はいつも断片的に存在していて、連続性を持っていない。起きるたびに新しいことを思い出し、前に思い出したことを忘れてしまう。それをそのつど束ね合わせて、フォーラの好きな思い出を作ってしまうのだ。

「ご主人様はどうして私を捨てたの」

　シーツが落ちて白い肌が露わになった。細い身体の胸もとで、張りのある左右の乳ち房ぶさが上を向いている。視線を外したアレッシオをフォーラが追いかけてきた。

「私が人形だからいけないのかしら」

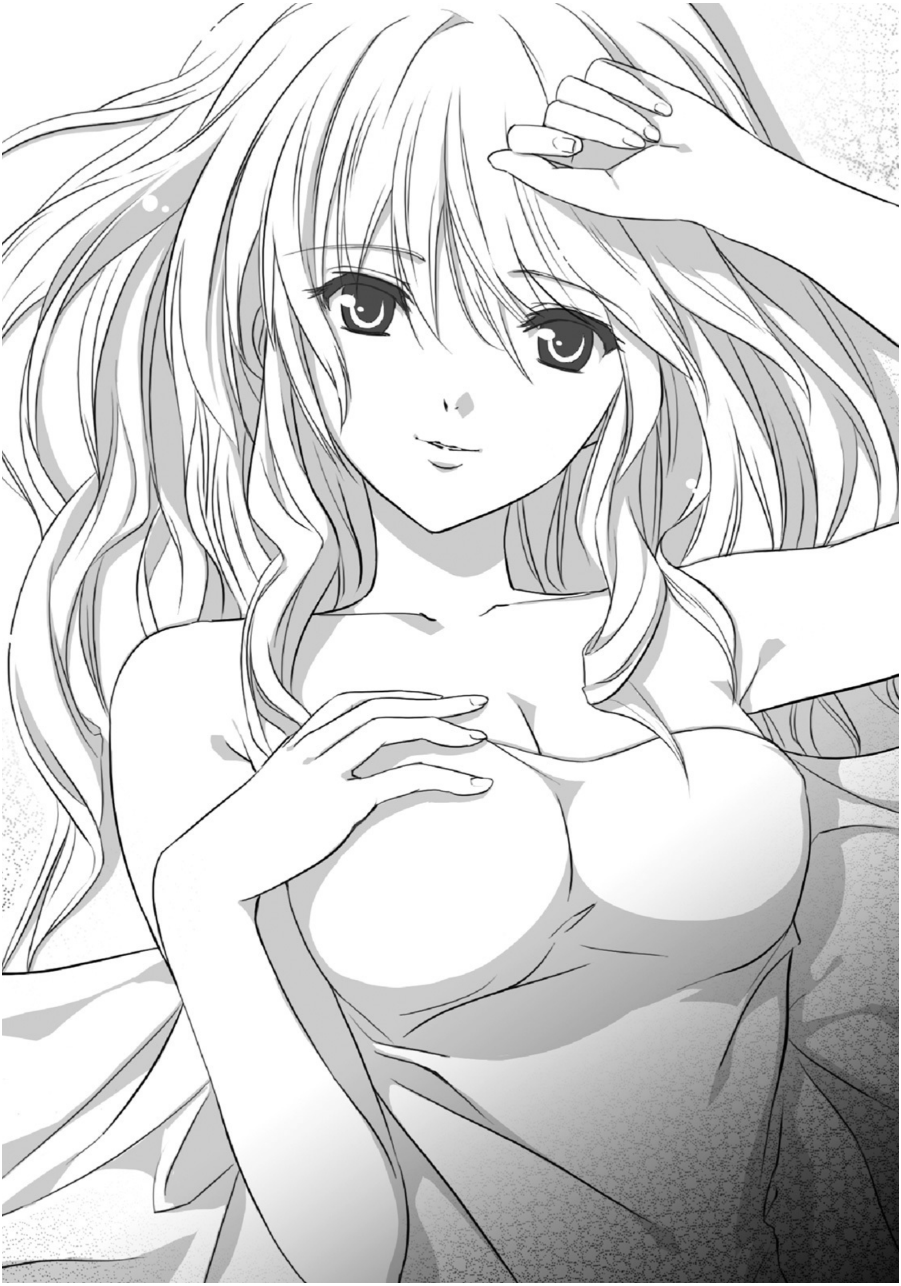
「フォーラは人間だ」

「本当に」

「ああ、本当だ」

「そうね……そうよ、私は人間だわ」

　何度か頷うなずいてから、フォーラは再びアレッシオを見た。



「昔から、あなたは優しいわ」

「あなたっていうのは誰のことだ」

　からかうように笑ったフォーラは、何も答えずに微笑ほほえんでいる。

　白い裸体に魅せられたアレッシオは、スタンドを消してフォーラと唇を合わせた。そのままベッドに倒れ込む。じゃれついたフォーラがアレッシオを寝転がし、腰の上に跨またがった。

「私がお姉ちゃんになってあげるわ」

　昔、テレジーナに言われたのと同じ言葉だった。

　記憶がアレッシオを過去へと誘いざなう。あれは二十歳はたちを過ぎたばかりのころだ。ヴェネツィアで初めて彼女に抱かれた夜のこと。フォーラの微笑みは、あの夜のテレジーナと同じ笑顔だった。

　テレジーナはヴェネツィアでは有名な高級娼婦だったが、一いち見げんのアレッシオを愛想よくもてなしてくれた。彼女はご主人様に捨てられたのだと言っていた。はぐれ者で、組織の裏切りに遭い続けてきたアレッシオと同じ境遇だったのだ。

「同じひとりぼっちなんだから、家族になればいいのよ」

　それもテレジーナの言葉だ。若かったアレッシオは娼しよう婦ふのお愛想と聞き流したが、あるいは真実の言葉だったのかもしれない。

「だめよ、あなたは弟なんだから大人しくしてるの」

　腹筋で身体を起こし、繋つながったままお姉さんぶるフォーラをベッドに組み敷いた。体重をかけると、楽しそうにはしゃいだ声がたちまち蕩とろけだす。

「あん、意地悪……」

　華きや奢しやな人形の身体は男の思うがままに反応し泣き声をあげる。昔から彼女はこうだった。挑発をするくせに、男が本気になるとなす術すべをなくしてしまうのだ。

　腰を打ちつけ、彼女の喘あえぎを貪むさぼる。

　確かにフォーラはテレジーナだった。

　体型も顔立ちも作り変えられてはいたが、この泣き声もスタンドの

明かりに浮かんだ笑顔もヴェネツィアの娼婦人形プツターナと同じ顔だった。

　━スタンドの明かり？

　そこでアレッシオは我に返った。

　さっきから、スタンドは消えている。

　さっきから、俺はフォーラの笑顔など見ていない。

　月明かりさえ届かないスラムの底でそんなものが見えるはずがない。なのにアレッシオの脳裏にはテレジーナと同じフォーラの笑顔が刻まれている。それを克こく明めいに思い出すこともできた。

　俺が見たものは、彼女がこうだったらいいという願望だったのかもしれない。

　脳が記憶を捏ねつ造ぞうしたのだろうか。だとすればアレッシオの魂たましいを作り上げている信条や理念すらも、全ては脳の捏造なのかもしれない。

　幾いく多たの修しゆ羅ら場ばを潜くぐり抜けた殺し屋が、そんな青臭い妄もう想そうで背筋を寒くした。

「フォーラ……」

　テレジーナは呪いの言葉だ。全てをかなぐり捨てるように細い身体を抱き寄せる。白い足が腰にからみつき、誘いざなわれるように
フォーラの奥へと潜り込んでゆく。

　唇を重ね、唾だ液えきを奪い合う。

　夜が明けてからも続いたそれは、自じ慰いのようであり、交接のようでもあった。

　次に目を覚ましたとき、陽はすでに昇っていた。

　隣でフォーラが寝息を立てている。いったいどこまでが夢で、どこからが現実だったのだろうか。夢ならばこんなに楽なことはない。しかしアレッシオの脳は全てが現実であればいい思っていた。

　人は愛するがゆえに恨うらみもする━アレッシオはそう思っている。しかし仮面の男マスケリーノは全く逆のことを言って彼女に恨みの心を植え付けた。

『人形は恨まない、だから愛さない』

恨むから愛があるのか。愛があるから恨むのか。二つは似ているがまるで違うことだ。

どうにも理屈っぽくなっていけない。こいつはきっとノヴェラのせいだ。寝相の悪いフォーラにキスをして自分の部屋に戻った。

毎朝の癖でテレビをつける。午前のニュース番組が、古こ物ぶつ商しようの別荘で起きた惨ざん殺さつ事件を伝えている。アレッシオは慌あわてて音量を大きくした。

弾丸パロツトラと一緒に乗り込んだベルッチの別荘が大写しになった。テロップで死者の名前が並ぶ。アントニオ・ベルッチ氏、妻のラウラ、娘のクラウディア──いつかアレッシオを睨にらみつけてきた気き丈じような娘の写真を背景にキャスターが興奮気味に原稿を読み上げている。

「どういうことだ」

バールで見かけたヴェネツィアの麻薬捜査官の顔が浮かんだ。そして、あの娘と懇こん意いになっていたリッカルドの顔──。

気分が悪い。いったいこの事件は弾丸パロツトラと関わりがあるのだろうか。

ニュースはすぐに終わってしまった。廊ろう下かに出て顔を洗っていると、物悲しい鎮ちん魂こん歌かの旋せん律りつが流れてきた。歯ブラシを咥くわえたまま屋上へ上がると、ノヴェラがバンドネオンを弾いていた。

「教会に来たのかと思ったぞ」

「リッカルドに聞こえるといいんですけれど」

「ますますお前は人形らしくなくなるな」

ノヴェラの胸もとで弾丸パロツトラのネックレスが揺れている。こいつはもう弾丸パロツトラのノヴェラなのだ。

腕を組んで白くくすんだ空を見上げる。

「俺はフォーラを抱いた」アレッシオは手短に事実だけを伝えた。

「ええ」

「怒らないのか」

「優しくしてくれたって分かりますから」

静かに微笑ほほえんだノヴェラが別の曲を弾く。昨夜、ノヴェラは部屋に戻らずここで夜を明かしたのかもしれない。

「親父バーボはどうしてフォーラが好きなんですか？」

「誰が好きなんて言った」

「僕がそう思っただけです」

「子供じみた話さ、あいつは俺の姉に似ている」

深呼吸をすると、スラムの空気がアルコール臭い口の中を洗うようだった。

事情はどうあれボスの女を寝取ってしまったのだ。ノヴェラともこれが金こん輪りん際ざいの別れになるかもしれない。アレッシオは痛みを伴う思い出話をノヴェラに語って聞かせた。バンドネオンの手を休め、ノヴェラは一言一言を円筒シリンダに刻み込むように聞いている。わずかひと月でこの自動機械人形オートマタの表情はずいぶんと精せい悍かんになった。

「俺は、姉を救えなかった自分が許せなかった。弱い自分を殺したくてこの世界に入り、ただ上を目指してきた」

ノヴェラはじっとアレッシオの言葉に耳を傾けている。

成功することで姉の死を忘れられると信じていたが、どうもそうではなかったようだ。

「あるいは俺は、失った家族を取り戻すためにここまで来たのかもしれない」

「それが、アレッシオの魂たましいですか」

「そう受け取ってもらって結構だ。ノヴェラ、お前の自分探しは解決したのか？」

言いたいことを吐き出したら少し楽になった。せっかくだからノヴェラの話にも付き合ってやろう。言葉を選ぶように考えていたノヴェラは、ゆっくりと蛇腹ベローを動かした。

「あのとき僕は、ハンドルを握りながら壊れてもいいと思っていました」

口をついて出たのは、アウトードロモでの体験だった。

「死という選せん択たく肢しが人形にはありません。なのにあのとき

は、その選択肢が自分の中にあるような気がしました。だとすれば、僕は人間でしょうか」

「どうだろうな、人間の中にも自分の死なんぞ想像もしない連中がごまんといるぜ」

「そうなのですか」

「そういう連中を大勢殺してきたよ」

　手でピストルをつくる。笑ったノヴェラが先を続けた。

「親父バーボ、僕が考えていることは、人間の脳と自動機械人形オートマタの円筒シリンダには違いがないのではないかということです」

「中身の話か」

「はい、脳も円筒シリンダも、どちらも外部からの情報に反応する仕組みです。違いがあるとすればそれは機能や構造ではなく、記憶という名の材料をどう扱うかなのです」

「どうしてそう思ったんだ」

「レースの後、僕はここでみんなと食事をしながら、仮面の男マスケリーノとベッドの上でしたことを思い出そうとしてみました。でも不思議と記憶を取り出すことができなかった。それはきっと、その記憶が僕にとって必要なくなったからなんです。そのことをフォーラが教えてくれました」

　ノヴェラの口調が熱を帯びてくる。

「僕が男娼プッターノだったころどんな男の相手をしたかは、もうあまり思い出せない。けれどアレッシオに怒られてペンネのアラビア風を食べたことや、リッカルドが死んだときのことは忘れないと思います。魂たましいとは、記憶に値打ちをつけるものなのかもしれません」

「お前がそう思うのなら、それが正しいのだろうよ」

「ありがとう、親父バーボ」

　バンドネオンを抱えたノヴェラはスラムの空を見上げて感慨深く呟いた。

「僕は出来損ないの骨董人形アンテイークでした。けれどいまは自分の中に魂を感じることがあります」

いったん息を吸って先を続ける。

「魂を持った人形は、ご主人様の願いを叶えられるかもしれません。きっと僕は物語ノヴエラではなく、魔法物語フイアーバになるのです」

「それはなんの話だ」

「僕の持っている最古の記憶は、隣で眠る作りかけのフォーラと、指揮棒バツケツタを振るう仮面の男マスケリーノの憎しみに歪ゆがんだ横顔です」

「ノヴェラ？」

いま、ノヴェラは確かに仮面の男マスケリーノと言った。彼を生み出した職人が、憎悪に任せて彼を作ったことは聞いていたが、まさかそれが仮面の男マスケリーノだったとは。

「お前はボスの……」

「はい、僕とフォーラを作ったのは仮面の男マスケリーノです」

バンドネオンの旋律が哀調を帯びる。ノヴェラはゆっくりと自分の境遇を語りだした。

それは彼が初めて食堂に来た日、アレッシオの尋じん問もんに『答えられません』と言ったことの中身だった。それをノヴェラの円筒シリンダが、あの頃とは異なる判断をするようになったということだ。

「僕がここに来た目的は二つ、ひとつが自分が人間になること、そしてもうひとつはフォーラを人間にすることでした。人じん狼ろうに対抗するためには、どうしてもそれが必要だったのです」

「人狼だと？」

「はい、闇に潜ひそむ人喰いの怪物です」

ノヴェラの紡つむぎだした物語は、まっとうな人間にはにわかに信じがたい御お伽とぎ話ばなしだった。

「僕たちは、闇の世界に生きる人狼を駆く逐ちくするために、最古の自動機械人形オートマタを模もして作られました」

「まさに御伽話フオーラだな」

人狼という怪物と、彼らを駆く除じよするために生まれた自動機械人形オートマタとの戦い。このベルモントに住む四十万という人間

は、そのような話を何も知らずに人形たちと共存しているのだ。

「怪物と戦うためにお前たちは作られたわけだ」

「はい」ノヴェラは強く頷いた。

「うちのガキどもに聞かせれば喜びそうな話だが、あいにく俺にも常識ってものがある。さすがに今の話は、別の誰かの口から聞くまでは信じられそうにない」

「別の誰か？」

　緑柱石スメラルドの瞳が不思議そうに見開かれた。

「ボスがお前たちをご所しよ望もうだ。お前は会いに行きたいか？」

「行かなくてもいいのなら、ここにいます」

「好きにしろ」

　ノヴェラと並んで屋上からスラムを見下ろす。怪物や御お伽とぎ話ばなしなどは雑音にすぎない。肝かん心じんなのは二人が何のために作られたかではなく、二人がどうしたいかだ。

「アレッシオはどうして行くのですか」

「俺の家族と、そうでない奴のためだ」

　天井を見上げて泣いていたフォーラを思い出す。

「フォーラだけがまだ弾丸パロツトラの家族になれていない。俺が迷っていたせいで、あいつを家族にしてやることができなかった」

「親父バーボ……」

　バンドネオンを置いたノヴェラは、懐ふところに隠していた銀の仮面マスケラをかぶった。

「フォーラをおかしくしたのも仮面の男マスケリーノです」

　言葉に熱がこもる。

「最初の日は答えられませんでしたが、今なら言える……僕は、仮面の男マスケリーノが嫌いです」

「なら、そんなものを被かぶるな」

「だめです、僕はいま醜みにくい顔をしているから仮面を取ることが

できない」

　仮面の奥で緑柱石スメラルドの瞳が光る。そして、ノヴェラが震える声を張り上げた。

「聞いてくださいアレッシオ。僕がご主人様を憎く思うのは、あの人が僕やフォーラを慰なぐさみものにしたからではありません。ご主人様がバンビーニの後ろ盾だてになっていたからです」

「バンビーニだと」

　ぐにゃりと、アレッシオの足もとで信じていた世界が歪ゆがんだ。

　ノヴェラが俯うつむく。銀の仮面マスケラが陽光を跳ね返し、彼の表情はまるで見えなかった。

viii

　古来、人は月を狂気の象徴としてとらえてきた。しかし月を忌いみ嫌う人間は稀まれだ。

　アレッシオにとっても月は心強い味方だった。街灯のない夜の仕事では、目標を見定めるのに月の力を借りなくてはならない。

　満月だった。

　深夜のドゥオーモ広場でタクシーを降りたアレッシオは、虚こ空くうに浮かぶ黄き金ん色の天体を見上げながら、眠らない旧市街を寝静まる旧市街へと徒歩で移動した。ドゥオーモを中心とした観光地と商業施設の周辺を除けば、旧市街の夜は静かなものだ。水銀灯と月明かりを頼りに、古い銀行と金融会社が軒のきを連ねる一角へ足を運ぶ。モンテ・オレーリアの建物は、その中にひっそりと佇たたずんでいた。

　モンテ・オレーリア。かつてはヴェネツィアの貿易商から始まり、いまは商社だけでなく宝飾産業や商業銀行にも手を広げている古い企業だというが、国内での知名度は決して高くない。アレッシオもノヴェラから教えられるまで、会社の名前すら聞いたことがなかった。

　灯りの消えた建物は老ろう朽きゆう化した煉れん瓦が造りのビルで、看板らしいものは出ていない。アレッシオは正面の入り口を通り過ぎ、先の路地から建物の裏手に回った。

　裏口の扉は分厚い鉄板だった。呼び鈴りんを押してしばらく待つと、中からガエターノが血相を変えて飛び出してきた。

「なにをしているアレッシオ、どうしてここが分かった」

「人形に聞いた、ボスはいるか」

「悪いことは言わないからすぐに帰れ、生きていたければボスを探ったりするな」

「仮面の男マスケリーノに取り次いでくれ、人形の件で話がしたいとな」

「やめろ」

「行ってこい」

　建物の中に身体をねじ込むと、舌打ちしたガエターノが真っ暗な廊ろう下かに姿を消した。

　紙巻きを咥くわえて火をつける。

　正体不明の仮面の男マスケリーノ、その隠かくれ家がについに足を踏み入れた。できることなら組織の一員となって歓迎される立場でこの場所を訪れたかったが、どうやらボスはアレッシオを取り立てる意思がないようだ。

　身体の半分を鉄扉の外に置きながら紙巻きをくゆらせる。油断をしてはならない。暗い通路の先からガエターノではなく鉛なまり弾だまが飛んでくるかもしれないのだ。

　俺はなぜ、ボスに冷遇されているのか。それが理解できなかった。余よ所そ者ものを嫌うというのならガエターノとて同じ立場だ。ましてやアレッシオには実績を上げてきたという自負がある。

　仮面の男マスケリーノが今の地位を得るのに必要だった三つの殺人を、アレッシオは実行してきた。たったひとりで、右手の怪物だけを頼りに、この街の裏側で抗争を繰り返していた三つの組織のボスを射殺したのだ。ひとつの勢力が潰つぶれるたびに仮面の男マスケリーノはその組織の縄なわ張ばりを乗っ取り、勢力を拡大していった。自分の働きで仮面の男マスケリーノが高みへ上って行くさまは小気味が良かった。

　にもかかわらず、仮面の男マスケリーノがベルモントを支配したとたん、アレッシオの元へは仕事がぱったりとこなくなった。あげく子供のお守もりを任され、今度はミラノへ行けという。

　使うだけ使ってお払い箱にするつもりだろうか、あるいは人形について知りすぎたアレッシオはミラノに行く前に始末されるのかもしれ

ない。

　大きく息を吐つく。ボスがなにを考えているか、全てはこれから分かることだ。

　人形を連れてこなかったアレッシオに仮面の男マスケリーノはどう接するだろうか。

　何かあったときの指示だけはしておいた。朝になってもアレッシオが戻らなければ、弾丸パロツトラはトラットリア・カプレットを捨ててスラムに潜もぐることになっている。いつでも銃を抜けるようにして、短くなった紙巻きを吐き捨てた。

　二本目の煙草たばこに火をつけたとき、懐中電灯の光がアレッシオを迎えに来た。

「来い、ボスがお会いになる」

　昇降機エレベータに乗り込んだガエターノは、ボタンの並んだパネルの下にあるメンテナンス用の蓋ふたを二種類の鍵かぎを使って開けた。中には飾りの彫られた銀色のボタンがあり、それを押すと昇降機エレベータが音もなく地下へと降りていく。

「ずいぶんと念入りだな」

「外見は古いが設備は最新だ。特に安全対策セキユリテイはな」

　地下二階の先は表示がなかったが、しばらく降りて昇降機エレベータが止まった。ドアが開くのと同時に、暗い回かい廊ろうに立てられた燭しよく台だいに電気の灯がともる。足元は石いし畳だたみ、壁も石造りで天井まで五メートルはある。そこは宮殿の回廊のように円柱の立ち並ぶ広い通路だった。

「これが銀の城か」

「どうなっても知らんぞ、俺は」

　ガエターノの後に続いて廊ろう下かを進む。すぐに扉が来ると思ったが、薄暗い回廊を三十メートルは歩かされた。

「おい、隣のビルの地下まで来ているんじゃないのか」

「それも仮面の男マスケリーノの持ち物だ」

　ため息をついたアレッシオは、奇妙な気配を感じて立ち止まった。

　柱を見上げる。四メートルほどの高さに人間がくくりつけられてい

た。よく目を凝こらすと自動機械人形オートマタのようだ。それが全ての柱にくくりつけられている。

「がらくただ。どうしてあんな風にしているのかは俺も知らねえ」

　肩をすくめるガエターノを抜ぬけ殻がらの自動機械人形オートマタが見下ろしている。不気味な光景に寒気を覚えながらも、これが仮面の男マスケリーノの世界なのだと自分に言いきかせた。

　仮面の男マスケリーノは利益で動いていない。

　これは美点ではなく、理屈が通じない相手だということだ。

　ノヴェラの話によれば、ブラッキアリ・ファミリーがバンビーニという組織をスラムに送り込んできたのを、ボスは黙って見守っていた。身中の敵に手を出さないように命令し、それどころか武器の調達に自分のルートの銃商人を使わせていたのだ。アウトードロモで、どうしてバンビーニがＭ９を持っていたのか不思議だったが、その話ならば合が点てんがいく。

　ノヴェラの持っている情報は彼が弾丸パロツトラと合流する前のものだ。だとするとノヴェラを弾丸パロツトラに預けてバンビーニと嚙かみ合わせる計画は、その頃から予定されていたのかもしれない。

　ようやく扉についた。本物かメッキか分からないが銀の扉だ。開けるとそこは前室で、広い室内に机がひとつ置いてあった。

「銃をよこせ」

　言われるままに渡すと、ガエターノがそれを机の引き出しに入れる。それから椅い子すに座り、腕を組んでアレッシオを見上げた。

「ようこそ銀の城へ。ただいまボスは会食中だ」

「お前はここで働いているのか」

「たまにだ、普段は地上にオフィスがある……おい、待て勝手に入るな」

「食事よりも用件が先だ」

　ボスに時間を与えれば与えるほど状況が悪くなるような気がして、アレッシオは奥のドアに手をかけた。静止するガエターノを押しのけて奥の間に入る。

　一瞬だが目が眩んだ。そこは目ま映ばゆいばかりの銀の部屋だった。柱にも壁にもテーブルにもキャビネットにも、全てに施された銀

の装飾が、天井からの光に乱らん反はん射しやを起こしている。これらの銀が全て本物ならば、いったい何億ヴィンチになるだろう。常じよう軌きを逸いつした成金趣味だ。

「これは、珍しい客だと思えばアレッシオじゃないか。夜更かしは健康によくないぞ」

　長いテーブルの奥に座った仮面の男マスケリーノが、口に料理を入れたまま声をかけてきた。ボスの後ろには下着のようなドレスを着た長身の女が立っており、フォークに突き刺した料理をボスの口元に運んでいる。テーブルのこちら側の椅い子すには、給仕の格好をした長い髪の女が背中を向けて座っていた。

「失礼しました。すぐに追い出します」

　駆け込んできたガエターノが、アレッシオの胸倉をつかんで引きずり出そうとする。ボスは手を上げてそれを制した。

「せっかくだ、食事をしていくがいい。ガエターノ、コックに言ってなにか作らせなさい」

「私はそろそろおいとまさせていただきます」

　背中を向けていた給仕姿の女が立ち上がった。ボスがとたんに猫なで声になる。

「ペルラさん、貴女あなたの時計がくるっていなければもう少し時間はあるでしょう。私の信頼する殺し屋を紹介しましょう。この男はアレッシオと言って、もとはヴェネツィアのちっぽけな組織の下したっ端ぱだったのですよ。それがへまをやらかして私のところに逃げ込んできたのです」

「存じ上げています」

　ペルラと呼ばれた女が無表情な声で応じた。顔立ちは陰気だが美しく整っており、左右の瞳は真珠の色をしている。人間ではなく自動機械人形オートマタだ。アレッシオはなにも言わずに、テーブルの真ん中の席に腰を下ろした。

「そんな無愛想なことでどうする。こちらのペルラ女史は教きよう煌こう庁ちようから来られたのだよ。どうだね、聖者とマフィアはこうして陽の当たらぬ地下で握手を交わすのさ」

「教煌庁ですか」

「見たまえアレッシオ、彼女の透き通った美び貌ぼうを。媚こびを

売ってばかりの娼婦人形プツターナとは格式が違うのだよ。おまけに彼女は頭もいい。教煌庁に置いておくのはもったいない逸いつ材ざいさ」

　教きよう煌こう庁ちようの悪態ばかりついている仮面の男マスケリーノが、いつもより口数を多くして彼女の機嫌をとろうとしている。ペルラが眉ひとつ動かさずに黙っているので、ボスの姿はまるで美女に言い寄っては追い返される喜劇の中の醜男ぶおとこのようだ。

　つれないペルラにため息をついたボスは、中断していたと思われる話題を続けた。

「そういうわけで、こんな地下でもテレビを見ることくらいはできる。ニュースは朝から大騒ぎじゃないか。あのいんちき骨こつ董とう屋やの一家が殺された。それも普通の殺し方じゃない、肉を噛かみ千ち切ぎられたような惨ざん殺さつ死体だ。これについての情報はないのかね？」

「こちらこそ伺いたいものです」

「とぼけられては困る。もしも変な連中が入り込んでいるのなら、駆く除じよするのは貴女あなたがたの役目でしょう」

「事件の発生からおよそ三日と十八時間、ですが通報からは五十二時間十七分四十六秒しか経っていません。私どもも情報を集めている最中です」

「なにを悠ゆう長ちようなことを言っているんだ。もう時間がないのだよ！」

　アレッシオは余裕を失った仮面の男マスケリーノの声を初めて聞いた。ペルラはそれすら受け流し、懐中時計サポネツタの文字盤に視線を落とす。

「確かに、もうすぐ面会の時間は終わりです」

「ペルラさん」

「ご安心を、相そう互ご不ふ干かん渉しようの約やく定じようを違たがえるつもりはありません」

「そうですか、せいぜいそうやって私に意地悪をするといい」

　仏ぶつ頂ちよう面づらになったボスが指を鳴らすと、背後に立った赤い髪の女がワインを口に含んで顔を近づけた。ボスの唇が開き、口移しのワインを飲み下す。女は妖よう艶えんな笑みを浮かべてペルラ

を見た。こちらは黄き金んの瞳をした自動機械人形オートマタだ。

「人形にも色々な使い道がある。艶なまめかしい肉体を鑑賞するのもいいが、肌を見せようとしない堅かた物ぶつ人形の服を剝はぎ取っていくのも楽しいものだよ、なあアレッシオ」

「俺に人形遊びは分かりません」

「それはもったいないことだ。紹介を忘れていたな、こいつはフィアーバといって、ノヴェラやフォーラの妹なのだよ。黄き金んの瞳は緑柱石ヘリオドールの大玉さ」

「魔法物語フイアーバ……」

　内心の動どう揺ようを隠しながら、アレッシオはフィアーバと呼ばれた人形を見た。少女を模したフォーラと違い、フィアーバは成熟した女の身体をしている。怜れい悧りな知性を感じさせる切れ長の鋭い目に黄き金んの瞳、厚ぼったい唇からワインに濡れた笑みがこぼれている。黒のコルセットにベビードールを組み合わせたようなドレスをまとい、モデルのように引き締まった身体を仮面マスケラの肥ひ満まん体たいに預けたフィアーバは、舌なめずりで唇のワインを拭ぬぐった。

「せっかくだ、挨あい拶さつをしてやりたまえ」

　仮面の男マスケリーノが美女の前髪を指先でくすぐる。

　そして、フィアーバと呼ばれたそいつが口を開いた。

「ココココココココココココ、コロ、コロ……ゴロ、ゴロロロ……」

　なんだこれは。喉のどを痙けい攣れんさせながら、言葉を成さぬ美女の声が老ろう婆ばのように嗄かれてゆく。呆あっ気けに取られて壊れた美女を眺めていたアレッシオは、鎖の音で我に返った。ペルラが懐中時計サポネツタを取り上げた音だった。



「残念だがペルラさん、貴女あなたの会いたがっていたフィアーバはこんなになってしまった。そこのアレッシオに殺し屋さんとでも言おうとしているのだろうがね」

「…………」

　真珠の瞳の自動機械人形オートマタは、なにも言わずにフィアーバを見つめている。仮面の男マスケリーノはやおらスープ皿を取り上げると、フィアーバの顔に叩きつけた。皿の割れる音がして、光沢の美しい髪を豆スープリボリータでどろどろにしたフィアーバが絨じゆう毯たんに転がってもがきだす。

「オーオオーオ、オー、オー」

「聡明なペルラ女史ならお分かりだろう。つまり彼女は魔法物語フイアーバになりそこなったのだよ。いまの名前は喜劇ラツコントだ。なかなか滑こつ稽けいな仕草で踊るだろう。普段は他の喜劇ラツコントたちと一緒に外の柱で遊んでいるのさ」

　地面に這はいつくばったフィアーバは、叫ぶのをやめようとしない。あるいは泣いているのかもしれない。助け起こしてやろうと手を伸ばすと、ボスの声が飛んできた。

「いいのかねアレッシオ、そいつの手を取って」

「どういうことです」

「このがらくたの円筒シリンダの中は豆スープリボリータのようにどろどろだ。綺き麗れいなのは顔だけで、頭もまるで働かない。だがな、こいつには心があるのだ。憎しみがあるのだよ。誰を憎んでいるかって、それは私ではない、ノヴェラとフォーラさ。こいつは兄きよう姉だいへの害意だけで動いているのだ」

　仮面の男マスケリーノは笑って両手を打った。

「さあ、美しいでく人形は退散だ」

　スープまみれのフィアーバが泣くのをやめた。よつん這ばいのまま、ランジェリーに包まれた尻をくねらせて扉のほうへ這ってゆく。

「尻だけは穴の中まで最高なのだがな、天は二物を与えずというやつさ。おや怒っているのかねペルラさん、頬ほおが高潮していますよ」

「…………」

「ああ、円筒シリンダの嗜し虐ぎやく心しんを刺激されて興奮してい

るのですか。いやいや隠さなくて結構。君たち人形の円筒シリンダは子し宮きゅうの上に付いているのだ。興奮するとたちまち子宮が熱くなるだろう。それが顔に出るのだよ、君らはそういう風に作られているのだ」

　ペルラの態度に腹を立てたのか、仮面の男マスケリーノは癇かん癪しゃくを起こした子供のように手が付けられなくなっている。

「アレッシオ、お前はすぐに兄妹をここに連れてこい。弾丸パロツトラの洟はな垂たれどもが皆殺しにされるのを見たくなければだ。どうだね可愛かわいいペルラ、魂たましいはこうやって揺さぶるのだよ。さすがにペルラはフォーラやノヴェラよりも遥はるかに人間に近い。私に強い憎しみを抱いているね。そんな君と交こう渉しようをしたいのだ。さあ行けアレッシオ、本物のマフィオーゾならボスの期待に応えてみせるのだ」

「ボス、いやペトルチアーニ、俺はまだあんたの兵隊じゃない。あんたは……」

　いきなり仮面の男マスケリーノが銃を抜いた。二発、立て続けにぶっ放してくる。

「アレッシオ、この野良犬がッ」

　本当の名前で呼ばれたペトルチアーニは激げつ昂こうしていた。素人しろうとの撃った弾は銀の壁に穴を穿うがち、アレッシオにはかすりもしていない。

「使えない、役立たずの裏切り者め」

　アレッシオが身を伏せるのにも構わず、ボスは銃を乱射した。狙いなどつけず、たちまち十五発全てを撃ちつくして引き金が引けなくなる。急にペルラが笑いだした。

「やはりあなたは仮面の男マスケリーノです。たとえジャケ・ドローの仮面を被かぶろうと、ここにいるのは仮面の男マスケリーノでしかありません」

「ジャケ・ドロー？」

「もういい、もう退がれアレッシオ。急に怒鳴ってすまなかった、少し外で待っていてくれ。私は彼女と話がある」

　今までの剣けん幕まくはどこへやら、絨じゅう毯たんの上に拳銃を放り投げた仮面の男マスケリーノが、ぐったりと椅い子すに沈み込む。

「五分だけ時間を延長いたします。お話をうかがいましょう」

　懐中時計サポネツタを持ち上げたペルラが口だけで微笑んだ。

　暗い天井に目を凝こらすと、回かい廊ろうの柱の一本にフィアーバが磔はりつけにされていた。

　セントポール教会でボスが話していた言葉を思い出した。円シリ筒ンダの深くを指揮棒バツケツタでかき回しても、人形はくるうか壊れるだけなのだという。柱の上で身じろぎもしない赤い髪の美女は、きっとそうやって壊されてしまったのだろう。

　他の柱にも自動機械人形オートマタたちが鎖や手て錠じようで縛り付けられている。アレッシオは煙草たばこを口に咥くわえたが、火をつけずに床に投げ捨てた。

　仮面の男マスケリーノは教きよう煌こう庁ちようの自動機械人形オートマタと交渉をしている。ペトルチアーニと呼ばれた瞬間のボスの怒りようは想像を超えていた。あの二人の間には、いったいどのような思惑が渦うず巻まいているのだろうか。そしてフォーラとノヴェラになんの関係がある。

　圧倒的な銀の煌きらめきに頭が麻ま痺ひしていたとはいえ、ボスの秘密を口外してしまったのだ。この場で粛しゆく清せいされてもおかしくはあるまい。しかし逃げるという選せん択たく肢しはなかった。アレッシオはまだ自分の話をなにひとつしていない。

　腕時計を見る。きっちり五分で扉が開き、ガエターノに送られたペルラが回かい廊ろうに姿を現した。真珠の瞳がまっすぐにアレッシオをとらえている。

「交こう渉しようは決けつ裂れついたしました。仮面の男マスケリーノは貴方あなたの失態を許すでしょう」

「どういうことだ」

　答えはない。アレッシオは質問を重ねた。

「あんたはフォーラを知っているのか」

「返答いたしかねます」

「自動機械人形オートマタなのにずいぶんと偉そうだな」

「必ずしも人間が上位で、人形が下位ということはありません」

「そこは俺も賛成だ」

　柱の上のフィアーバを見上げる。

「俺は人間だが、あの人形への扱いには腹が立った。あんたはここに晒さらされてる人形を見てどうも思わないのか」

「切り割って差し上げたくなります。仮面の男マスケリーノの糞くそ虫むしのような生せい殖しよく器き官かんを」

　ほんの一瞬だけ口の端はをもちあげたペルラが、黙って回かい廊ろうの出口へと姿を消す。困惑顔のガエターノに呼ばれてアレッシオはふたたび銀の食堂へ戻った。

「アレッシオ、さっきはすまなかった。私としたことが取り乱してしまうとはな」

「俺の落ち度です、撃ち殺されても文句は言えない」

「あのペルラというのは性しよう悪わるな娘でね、いつも私に意地悪をするのさ。自動機械人形オートマタなんてものは本来道具にすぎないのだがね」

「道具に心を持たせるのは何のためですか」

「前に道楽だと言っただろう、お前は私の言葉が信じられないのかね」

「あいにく俺もそこまで能天気ではありません。人じん狼ろうというのは何なのです」

「お前には関係のないことだよ！」

　また仮面の男マスケリーノが大声を出した。

「そうか、お前はノヴェラに入れ知恵されたのだな。心のないノヴェラをそこまで手なずけるとは驚いた。お前には調教師の資質もあるようだ。だがな、特技の披ひ露ろうはあとでいいのだよ。いまは一刻も早く人形を連れてくることが肝かん心じんだ」

「できません」

「お前はものの道理の分かる人間だったじゃないか。ノヴェラもフォーラもお前の物なんかじゃない、私の物だ。私は貸してやった人形を返してくれと言っているのだぞ。それができないとは筋が通らないだろう」

「俺は人形を借りたのではなく、人形の世話を押し付けられたのです。厄やつ介かいごとがあるなら力を貸すように言われました」

「ならばなおさらだ、さっさと連れてきたまえ」

「できません」

「何故なぜだね」

「彼らがそれを望んでいない」

「お前はマフィオーゾの恥だよ、アレッシオ」

　ため息をついた仮面の男マスケリーノが、脇の下をぼりぼりと掻いた。

「俺がなんであれ、ノヴェラは戻りたくないと言っている。あんたがバンビーニに武器を渡したことを知っているからだ」

「ほう、ノヴェラはそれで私を憎んだというのかね」

　身を乗り出した仮面の男マスケリーノが声を弾ませた。仮面の下で小さい瞳が爛らん々らんと光っている。

「素晴らしい成果じゃないか。ならばフォーラはどうかね？」

　仮面の下に喜き色しよくが浮かぶ。

　リッカルドの人懐っこい笑顔は、この醜悪な笑顔に踏み潰つぶされたのだ。

「あんたの人形遊びはおしまいだ！」

　詰め寄ったアレッシオはペトルチアーニの襟えり首くびを締め上げた。

「ボス、あんたはバンビーニを踊らせてリッカルドを殺した。弾丸パロツトラの将来を担う参さん謀ぼう役をだ。組織の人間を守れない奴にボスを名乗る資格はない」

「アレッシオ、お前はもう弾丸パロツトラのお守もりではない。関係のないことなのだよ」

「ガキどもをどうするつもりだ」

「どうもせんよ、生き残れるかどうかは彼ら次第だ」

「マフィアをなんだと思ってる」

　マントを締め上げる。

「勇ゆう敢かんな男だな、アレッシオ。そこまでして何の得がある」

「損得じゃない、あんたがフォーラを捨てたからだ」

「誰が捨てるものか。フォーラは私の大切な切り札だ」

「いいや、捨てている。あんたはフォーラの心を捨てたんだ。人間になるように命令しておきながら、主人であるあんたがフォーラを人間とみなしていない、そうだろう。俺はあいつらに同情してるんじゃない、俺に対してもそうだと言ってるんだ。ボス、俺はあんたの言うことはなんだって聞いてきた。だがあんたは俺をいつまでも信じない」

「当たり前だ、お前のような野良犬を信じる組織がひとつとしてあったか」

「ついになかったさ、三つの殺人を命令したあんたがそう言うんだからな」

　仮面の男マスケリーノは五週間で三つの組織マフィアを壊滅させた。それは兵隊の力だ。それだけの兵力をこの男は持っている。

「俺はあんたの組織に可能性を感じていた。オルマ・ロッサのような」

「だからお前を遠ざけたのだ。マフィア・マニアなどお呼びでないのだよ。お前もあの子供たちと何も変わりはないのだ、アレッシオ」

「あんたもマフィアだろうが」

　胸倉をつかむ。そのとき、衣装の下から歯車の音がした。

　ぎりぎりぎりぎり……。

　この音をアレッシオは知っている。ノヴェラの、そしてフォーラの身体から聞こえてくる駆動音──歯車に引き絞しぼられる鉄線の音だ！

　直感が脳に電流を送り込む。手を離したアレッシオは急いで飛びのいた。

「いまのは……」

　注意深く仮面の男マスケリーノと銀色の室内を見渡す。

　なにも起きなかった。

　マントの下に何らかの仕掛けがあるのかと思ったが、そうではないようだ。

「私は欠けつ陥かんのない魔法物語フイアーバを完成させる！」

　仮面の男マスケリーノが叫んだ。

「物語ノヴエラが魔法物語フイアーバになり、御伽話フオーラを蘇よみがえらせるのだ。それこそが失われた錬れん金きん術じゆつの再生、究極の古代復興運動リナツシメントが訪れるのだ」

「あんたがどんな夢を見ようと勝手だ。だがあんたの気まぐれを信じ込んだあいつらは、必死に人間になろうとしている」

「知った風な口をきくな。お前は人形の気持ちを分かったつもりでいるのか！」

　アレッシオにつかみかかろうとした仮面の男マスケリーノは、不自由な足をもつれさせて転倒した。

　まだ話は終わっていない。突っ伏したボスの手を取ったアレッシオは目を瞠みはった。

　──これは、人形の手だ！

「ボス、あんたは……」

　仮面の下でペトルチアーニが笑う。

「そうだアレッシオ、私の両手両足は人形だ。私は半分機械人形ハーフマタなのさ」

　たじろぐアレッシオの手を人形の手が握り返した。

「人形は復ふく讐しゆうの道具だ、あの糞くそったれの狼どもへの！」

　道楽ではない。義手義足の半分機械人形ハーフマタは復讐のために錬金術を復活させたのだ。

「お前はフォーラを知った気になっているだけで、その実何も知らないのだ。私が仕組んだ秘密も何ひとつだ！」

　唾つばを飛ばしながら半分機械人形ハーフマタのペトルチアーニが叫ぶ

「人間になろうとしているだと？　ならば作った私が言おう、人形は人形だ。人形が人間になるなどというのはな、道具の円筒シリンダが錯さつ覚かくを起こしているにすぎんのさ」

「道具の錯覚か、あんたがどんな目で俺を見ていたのか分かったよ」

　仮面の男マスケリーノの本心も知らずに、おめでたいアレッシオは組織に希望をつないできた。昔のアレッシオならば自や棄けになっていただろう。しかしいまは違う。シャツの下で弾丸パロツトラのネックレスが揺れている。

「マフィア・マニアには配役など与えられておらんのだ。分かったのなら舞台を降りろ。ここにあるのはお前の知らない御お伽とぎ話ばなしだ」

「分かった、俺はあんたの物語から降りる。ただしノヴェラとフォーラを連れてだ」

「何を言っている？」

「あいつらはもはやあんたの道具じゃない、弾丸パロツトラだ。あんたが押し付けた俺のファミリーだ」

「ファミリーだと？」

　急に声の調子が落ちた。仮面マスケラの奥でペトルチアーニの目がぎらぎらと光っている。

「アレッシオ、まさか貴様は抱いたのか。ノヴェラではなくフォーラを」

　人形の手が、薬指にはめられた緑柱石アクアマリーナの指輪を握り締める。半分機械人形ハーフマタのペトルチアーニはゆさゆさと全身を揺さぶりはじめた。それは怒りの地鳴りだった。

「性の逸いつ脱だつをしないマフィアが、私の許可なくフォーラを抱いたのか。フォーラは私が作ったのだぞ、あれは私の物だ！」

　仮面の男マスケリーノは激発した。泡を吹きこぼしながらアレッシオに食って掛かった。

「私は昔からお前のことが嫌いだった。オルマ・ロッサのように誇り高い男になるなどと、くだらん夢想を吐きこぼす糞くそちんぴらなのだからな！」

　ボスの目が怒りに燃えている。

「その薄汚い脳みそに刻み込むがいい。私から全てを奪った連中の名はオルマ・ロッサ、穢けがらわしい人じん狼ろうマフィアだ！」

　最後は絶叫に近かった。ペトルチアーニは自らマントをかなぐり捨

て、衣服を破って肩口の結合部を晒さらした。

「死ぬ前に教えてやる、私の組織ファミリーなどどこにも存在しない！　もとより暴力を認めるつもりなど毛頭ないのだ。お前はカスだよアレッシオ、人を撃つしか能のないカスだ、踏み潰つぶされるべき毒虫だ！」

「ペトルチアーニ、フォーラの秘密とは何だ」

　懐ふところに手を入れる。拳銃は……ない！

　ペトルチアーニは両手にはめた指輪をシャンデリアの光に翳かざして叫んだ。

「殺せ、裏切り者の野良犬をなぶり殺すのだ！」

ix

　前室に駆け込むと、蒼白となったガエターノが待ち構えていた。

「銃を返せ」

「今日はなんなんだ、ボスはどうされた」

「死にたくなかったらこの部屋を出るな」

　ペトルチアーニの人形の身体を見てしまえば、ガエターノは生きていられまい。

「やばいぞ、俺たちはとんでもないボスに関わっちまった。このままだと……」

　このままだとどうなる？

　ペトルチアーニは復ふく讐しゆうの夢想に取り憑つかれている。先のことなど想像もつかない。

　アレッシオは机の引き出しからM84を取り返して回かい廊ろうへ駆け出した。ボスの声はここまで届いていただろうか。柱の上から無数の目がアレッシオを射抜いている。さっきまでは光の入っていなかった瞳石ジエンマがぎらぎらと輝いて、背筋の凍るような視線が降り注いでくる。

　まずはこの銀の城を脱出することだ。そしてノヴェラとフォーラをどこかへ隠さなくてはならない。石いし畳だたみの回廊を全力で駆け抜けた。

じゃらり。

すぐ後ろで鎖の音がした。

銃を手に振り返る。柱の上から人形が落ちてきた。

フィアーバだ。重力に任せて落下した女の身体が地上すれすれで半回転し、大きく開いたヒールの両足が石畳を踏みしめる。とてもこれがスープ皿をぶつけられてよつん這ばいになっていた人形とは思えなかった。両手には白い光を弾き返す銀の手て斧おの。

銃を抜いた。狙うは頭──いや、円筒シリンダは腹の中だ。

じゃらり、じゃらり……次々に柱の上で鎖の外れる音がする。ここはだめだ。アレッシオは銃の狙いをつけたまま昇降機エレベータに向かって走った。

フィアーバが跳躍する。引き金を引いた。三発、全てが腹の中心に命中する。撥はね飛ばされたフィアーバは宙返りをして着地をした。また突っ込んでくる。

なぜ破壊されない。そうか、あの黒いコルセットが防弾なのだ。

だとすれば拳銃では勝ち目がない。昇降機エレベータのスイッチを押して振り返ると、石畳を蹴ったフィアーバが斧を投げつけてきた。

凄まじい勢いで回転した凶器が眼前に迫る。身をひねって躱かわし、本体を銃で狙う。

右の柱に飛びついたフィアーバは、すぐに柱を蹴けって回廊の左側へ飛び移った。そのまま柱をよじ登ると、天井から吊るされた鎖をつかみ、空中に身を躍らせた。

昇降機エレベータの扉が開く。飛び込んで一階のボタンを押した。鎖につかまったフィアーバが空中ブランコのように迫ってくる。

引き金を引いた。頭を狙った一発目は外し、次弾が肩口に命中した。扉がゆっくり閉まるその向こう、回廊の奥で別の人形が三体、石畳へ降り立つのが見えた。

「早く閉まれ！」

ドアの閉まる速度がもどかしい。隙間から廊ろう下かを覗のぞくと、鎖につかまったフィアーバが勢いをつけて二本目の斧おのを飛ばしてきた。垂直に回転した銀の斧がアレッシオのこめかみをかすめ、ズドンと昇降機エレベータの壁に突き刺さる。引き金を引いた。フィアーバが鎖から落下し、石畳の上に着地する。かわりに別の人形が昇

降機エレベータに突っ込んできた。

「邪じゃ魔まだ」

　ドアをこじ開けようとする。

　こいつは電気式イミテーションだ。腹に拳銃を突きつけて引き金を引いた。

　一発では倒れない、二発、三発、ようやく円筒シリンダが砕けた。腰の関節から水銀が吹き出し、痙けい攣れんを起こした人形が動力を失う。そいつを蹴り飛ばしてドアを閉めた。

　昇降機エレベータは音もなく昇っていく。ようやく息をついた。

　しかし、下からドアに斧おのを打ち付ける音が響いてくる。ここで非常停止でもされたら一巻の終わりだ。地下二階のボタンを押して急いで外に脱出した。

　地下二階は駐車場だった。アレッシオはスロープから地上へ戻り、無人の旧市街を大通りにに向けて走り出した。

　空には満月、この狂った夜にふさわしい月が浮かんでいる。

　ペトルチアーニが殺人指令コントラクトを下した相手は、回かい廊ろうで磔はりつけにされていた出来損ないの自動機械人形オートマタどもだ。組織を持たない仮面の男マスケリーノがどうやって他の組織を壊かい滅めつさせたのか、アレッシオはようやく理解した。あの人形たちが仮面の男マスケリーノの兵隊だったのだ。

「人形が相手か」

　舌打ちをした。撃ったのは九発だ。弾は薬室に一発と弾だん倉そうに三発しか残っていない。予備の弾倉と合わせて十七発だ。

　アレッシオの拳銃の弾は.380ACP弾。相手が人間なら一発で仕留められるが、人形の円筒シリンダを撃ち砕くには至近距離からでも三発必要だった。ましてやフィアーバは、弱点の円筒シリンダを防弾のコルセットでガードしているのだ。

　正面のビルから人形が降ってきた。予想以上に相手は速い。電気式イミテーションの古い型、手にしているのは銀の鉈なただ。そいつが振り上げる前に引き金を引く。一発ではやはり円筒シリンダを壊せない。

　二発、三発。やはり三発必要なのだ。条件反射で弾倉を取り替える。残りは十四発。鉈を振り上げた人形が崩れ落ち、路地から別の二

体が姿を現した。

　水銀灯に照らし出されたそいつらは、十八世紀風のドレスを見にまとった娼婦人形プツターナのようだった。人形の手が翻ひるがえり、ナイフの光が空を裂さいて飛んでくる。アレッシオは横っ飛びで猫のように路地に逃れた。この暗さでは飛んでくるナイフなど見分けられない。手が自然に動く。三発で一体を撃ち倒し、路地の奥へと走った。

　残りはたったの八発だ。なんとか一体を二発で倒すことができなければ、もう人形二体にしか通用しない。

　深夜の旧市街に靴くつ音おとが谺こだまする。背後からは、かちゃり、かちゃりと人形の迫せまる音。

　普通の自動機械人形オートマタと違い、連中の動きは滑らかさのない昆虫のようだ。そしてその運動能力は人間を遥はるかに凌りよう駕がしている。

　──こんな時、あの男がいれば。

　アレッシオの脳裏を、いつかバールで会った若い芸人の姿がよぎった。

　首を振って妄想を払い落とす。落ち着け、何を怖おじ気けづいているのだ。

　走って車道のある通りに出た。

　このまま西へ走ればドゥオーモ広場だ。しかし距離がある。背後で気配がしてアレッシオは身を竦すくめた。ナイフが頭上を掠かすめて飛んで行く。振り向きざまに撃つと、娼婦人形の肩に命中した。無駄だ弾だまだ、舌打ちをして円筒シリンダを狙い引き金を三度引いた。

　無人の通りを走る。これで壊した人形は四つ、残弾も四発だ。喜劇ラツコントどもは何体いるのだろう。少なくともまだフィアーバが残っている。水銀灯に揺れる影の向こうに目を凝らすと、行く手の路地から新あら手ての人形が姿を現した。給仕姿の女が三体、どれも銀の鉈なたを持っている。

　多すぎる。アレッシオは大通りを反対方向へ駆け出した。三発使って一体は倒せても、二体同時に来られたら殺やられる。おまけに連中の走る速度はアレッシオよりも速いのだ。

「まだだ」

　手の中の怪物、そいつが吼ほえた。

　先頭の喜劇ラツコントの円筒シリンダを二発で打ち砕く。引き返して次の鉈をかいくぐった。振り上げたもう一体の腕を押さえつけ、建物の壁めがけて投げ飛ばす。人形の軽い身体が石壁に激突した。突進したアレッシオは靴くつの裏で腹を踏み砕き、拳銃を押し込みながら発射した。

　がくがくと震えながら喜劇ラツコントが崩れ落ちる。あと一体だ、振り向いたところに鉈が振り下ろされた。

　退くな！

　アレッシオは石いし畳だたみを蹴って前へ踏み出した。鉈ではなく人形の腕が肩に当たる。銃を構える余裕はない。そいつを突き飛ばした。倒れた人形に銃を向けるのと、背後で一体目の喜劇ラツコントが立ち上がるのが同時だった。

　やはり二発では円筒シリンダを破壊できなかったのだ。前後の喜劇ラツコントが鉈を振り上げる。アレッシオは横っ飛びに逃げた。弾だん倉そうは空だ、残弾は薬室の中の一発限り。さらに新手が一体、路地から姿を見せた。

「仮面の男マスケリーノめ、いったいいくつ壊したんだ」

　息が切れてきた。二体の喜劇ラツコントが背後に迫るのが分かる。連中は四つん這ばいで追いかけてきているのだ。かちゃかちゃと、声も出さずに昆虫のように。

　通りの前方から二つの人影が近づいてきたのはそのときだった。

「アレッシオ！」

　知った声だ。続けて銃声が空気を震わせる。

　背後に迫った喜劇ラツコントには命中していない。それでもアレッシオの声は弾んだ。

「馬鹿野郎、引きつけて撃てと教えただろう」

　二つの人影はルーカとノヴェラだった。

　最悪の事態に備えて応援を頼んでおいたのが幸いした。アレッシオの背後に迫った壊れかけの一体に、ノヴェラが五発の銃弾を浴びせる。肩や顔、そして腹部に命中して人形が膝を付いた。ルーカはもう一体を引きつけて、至近距離から四発を腹部に命中させた。

「なかなか上手いぞ」

「軽口たたいてる場合かよ」

　渡された弾だん倉そうを銃じゆう把はにこめる。最後に姿を現した喜劇ラツコントの腹部に三発。きっちり当てて円筒シリンダを撃ち砕いた。

「ノヴェラ、その仮面をつけてきたのか」

「こいつ復ふく讐しゆうの仮面だって言うんだよ」

「復讐だと」

　こっくりと頷いたノヴェラは、銀の仮面マスケラを着けたまま右手のＭ９を見つめていた。アレッシオやルーカと違い、人を傷つけることのなかった自動機械人形オートマタのノヴェラが、同じ人形の円筒シリンダを破壊したのだ。

「迷っているのか」

「違います」

　首を振ったノヴェラは自分が破壊した人形を起こすと、その顔をじっと見つめた。

「彼女は僕が最初に殺した人形です、僕という物語の登場人物だ」

「物語だと」

「はい。僕は、僕の物語を作るために来ました」

　頷いたノヴェラが銃を構える。路地から再びよつん這ばいの喜劇ラツコントが姿を現した。腹を伏せているので円筒シリンダを狙えない。

「話の続きはあとだ、撃て」

「はい」

　ノヴェラの銃口が火を噴き、頭と腕に被弾した電気式イミテーションがもんどりうった。仰向けになったところにルーカがとどめを刺す。

「なんだいこの人形は」

「仮面の男マスケリーノの兵隊だ。助かった、恩に着る」

「よしてくれよ親父バーボ、他も全部手はず通りにしてあるぜ。弾丸パロツトラは荷物をまとめているし、フォーラはノヴェラが連れ出してくれた」

「よくやってくれた、武器は手に入ったか」

「ああ、ここに入ってる。言われた通り、仮面の男マスケリーノの名前で買い付けたよ」

　ルーカが肩にかけた大きなバッグを開くと、銃商人から仕入れた短機関銃ミニウージーと散弾銃スパスが黒光りのする銃身を覗のぞかせた。

「上出来だ、しかしこんな物で仕事をすることになるとはな」

　散弾銃スパスなどヴェネツィア時代に何度か撃ったことがある程度だ。拳銃とは勝手は違うが、こいつなら一発で人形を戦闘不能に追い込めるだろう。

「周りを警戒していろ、まだ来るならここでかたをつける」

　散弾銃スパスに弾を込めながら、通りを警戒するノヴェラに声をかけた。

「物語っていうのは、どういうことだ」

「記憶を都合よく繋ぎ合わせたものが物語です」

　道路の向こうを見つめながらノヴェラが答える。

「都合だと？」

「ええ、僕の都合いいようにです。要らないものは忘れ、自分のいいように記憶を繋つなぎ合わせて物語をこしらえているんです」

「それが魂たましいか」

「はい、その答えはすぐ近くにあったような気がします。その周りを僕はずっとぐるぐる回っていたのかもしれない」

　ノヴェラの声は晴れ晴れとしている。

「続きは移動しながら聞こう」

　念のために銀の鉈なたを拾い、通りをドゥオーモへ向かう。背後からエンジンの音がした。

「車だ」

　ルーカが安あん堵どの息をつく。エンジンの音がアレッシオたちを狂気の世界から現実の世界へと引き戻したようだ。

「タクシーだと助かるな」

　言いながらアレッシオは散弾銃を構えた。

「この音は小型車じゃねえよ、バスか何かだ」

「こんな時間にか。ルーカ、お前は短機関銃ミニウージーを持て」

　やがて、通りの向こうから路線バスが小山のような姿を現した。

「なんだよ、あれ？」

　ルーカがぽかんと口を開ける。アレッシオも言葉を失った。

　やはりここは御お伽とぎの国ベルモントだ。

　通りを走ってきた車しゃ輛りょうはバスに間違いなかった。しかし、そのシルエットは狂気の世界と地続きだ。

　ごつごつといびつな小山のような影。バスの車体の至るところに、樹液に群がる虫のように人形どもが取り付いていた。その全てが銀の武器を月光に光らせ、重いエンジンの音を響かせて近づいてくる。

「そっちのを使え。早くしろ、拳銃では間に合わん」

「打ち方を知らねえよ」

「ざっとでいいから撃つんだ」

　人形を山のように乗せたバスが姿を大きくする。銃声が轟とどろいた。

「まだ早い、引きつけろ」

「俺じゃねえよ」

「僕も撃っていません」

　ということは……。

　アレッシオは血の気けが引くのを覚えた。人形どもが銃で武装しているのだ！

　連中はこっちの先読みこそすることはないが、その射撃は恐ろしく正確だ。ノヴェラを見ていれば、それは分かる。

「ふざけやがって」

　狙いをつけて散弾銃スパスをぶっ放した。

　バスのタイヤが破は裂れつし、巨大な車が斜めに滑る。

「撃て！」

　もう一発、へばりついた人形が撥はね飛ばされる。ルーカが短機関銃ミニウージーを掃そう射しゃした。

　バスが歩道に乗り上げ、水銀灯に激突する。あおりをくらって二、三体が押し潰つぶされる。

「逃げるぞ、路地に入れ」

　止まったバスからバラバラと人形が歩道へ飛び降りる。パン、パンと背後から銃声が聞こえてきた。ノヴェラが応おう射しゃする。散弾銃スパスを持ったアレッシオも引き金を引いた。

　散弾が人形の外がい殻かくを粉砕する。喜劇ラツコントが二体、撥はね飛ばされるように転倒して動かなくなった。しかしバスからは次々と新しい人形が降ってくる。

　路地を曲がった。土み産やげ物もの屋やの立て看板を盾たてにしたルーカが短機関銃ミニウージーを構える。看板の陰に飛び込んだアレッシオは、路地に入ってくる人形に片っ端から散弾を浴びせた。背後を守るノヴェラも引き金を引く。

「仮面を取れ、狙いがつけにくくなるだけだ」

「はい」

「お前の物語はどんな筋書きになるんだ」

「読むのは本ができてからです」

　人形の腹部を正確に撃ち抜いて弾だん倉そうを換える。一連の動作はルーカに見習わせたいくらいスムーズだ。

「でも、きっと仮面の男マスケリーノの好きな話にはなりません」

　散弾銃スパスを構えるアレッシオを振り向いたノヴェラは、顔をくしゃくしゃにして笑った。

X

月には大地を動かす力がある。

月は夜の大地を照らし、潮しおの満ち引きを作り出す。

月の影響を受ける人じん狼ろうは、きっと大地と繋つながっているのだろう──。

星型の石壁にスチール弦の硬質な音色が吸い込まれていく。

ベルモントからアルノ川を渡った丘の上、闇に包まれたベルヴェデーレ要よう塞さい。観光客の姿も見えなくなった夜の芝しば生ふにフランチェスコはいた。

あぐらをかき、市場で買った安いギターを右の太ふと腿ももに乗せ、爪つめを使ってかき鳴らす。

古い時代の衣装を着て楽器を奏でる、この街に溶け込むにはそれで充分だ。フランチェスコの足元には人間どもの放った硬貨が転がっている。陽が沈み、観光客の姿が消えてもフランチェスコは芝しばの上にいた。土の底からは大地の唸うなりが聞こえる。西の空が薄うすら朱あかく染まる頃から、延々と六本の弦をかき鳴らしている。

フランチェスコはいまだに人間という連中が理解できない。

連中は暖かい土を冷たい石で塗り固める名人だ。放っておくとそこらじゅうを石だらけにしてしまう。そう、丘の上に建てられたこの要よう塞さいのようにだ。

煉れん瓦がや石いし畳だたみで大地を隠いん蔽ぺいする。そんな連中を理解しろというほうがおかしい。

そういえば、あの男も変わった人間だった。

カッキアーノの近くで出会った男のことをフランチェスコは思い出した。そいつは両手が白い骨になっていたのだ。骨の周りの肉は腐り落ち、鼻の曲がりそうな腐臭を撒まき散らした男は半狂乱になっていた。

この忌いまわしき御お伽とぎの国にフランチェスコがいるのも、その男との出会いが始まりだった。

そいつが言ったのだ。

魔法物語フイアーバという名の、新しい銀貨アルジエントが生まれ

るのだと。

　正体を聞き出す前に、白はつ骨こつ男おとこは死んでしまった。医者は血が腐ったせいだと言っていた。

　血と肉を腐らせる能力……いったいどのような悪魔が作られたのだろうか。

　なだらかな勾こう配ばいの向こうで、ベルモントの灯りが瞬またたいている。

　この灯りのどこかに悪魔のような人形が潜ひそんでいる。

　白骨男の言葉を信じるならば、兄妹の魔法物語フイアーバはまだ教きよう煌こう庁ちようの手の内には落ちていない。人間のマフィアどもが娼しよう婦ふとして使っているのだそうだ。

　フランチェスコの役目はそいつを攫さらうことだった。魔法物語フイアーバを手に入れることで、副頭領ヴイーチエカーポのシルヴィオはオルマ・ロッサを制圧できるだろう。

　そしてオルマ・ロッサは変わるのだ。

　牙きばを抜かれた人じん狼ろうどもに教えてやろう。狼の本能を、牙と爪は何のためにあるのかを。

　かき鳴らすラスゲアード。

　ゆったりと風に乗るように流れていた弦の音が、夜の訪れとともに高調する。

　フランチェスコが奏でているのは、全身を流れる血に宿った故郷の音曲だ。

　それはロマの曲。

　この大地を流る浪ろうする民の音楽、白い肌の人間どもに虐しいたげられた民族の生み出した旋律だ。

　四本の白い指が木目の上を踊る。荒々しい弦の音が石壁に反響する。

　ギターの音色にフランチェスコの魂たましいは故郷へと誘いざなわれる。

　はるか昔、フランチェスコはロマの娘から産み落とされた。

それは祝福とは程遠い誕生、浅黒い肌の娘から生まれた白い肌の子供だった。

娘は犯されたのだ。相手は顔も分からない。だから母親となった娘は、いつも仕方なさそうにフランチェスコの手を引いていた。

それでもフランチェスコは彼女の子供だった。母の家族とともに国々を放浪し、食うために奏そう楽がくを覚えた。技ぎ芸げいを持たないロマは生きることすら許されないのだから。

ロマというのは、彼らの言葉で『人間』のことだ。

浅黒い肌を持ち、定住しない生活をしているが、ロマも他の人間と同じものだと思っていた。しかしどうやらロマは人間ではなかったらしい。流る浪ろうの果てに訪れたルーマニアでフランチェスコはそれを知ることになった。

あのころのフランチェスコは大地を枕にして静かに暮らしていた。

それを壊したのは、神の名を口にする人間どもだった。

教煌庁の説く聖なる教えは異民族の殺さつ戮りくを正当化する。あらゆる土地からロマは追放され、あるいは奴ど隷れいとして捕らえられ、神の名の下もとに殺された。

フランチェスコの仲間が襲われたのも、静寂に包まれた夜だった。

奴らはロマに仕事を奪われると思ったらしい。前触れもなくいきなり襲われた。テントに火をかけられ、ロマは子供も大人も炎の中を逃げ惑った。

銀の十字架を持った人間が、自分と同じ白い肌の人間が、ロマを次々に槍で突き刺した。まだ若かったフランチェスコの母親を組み伏せ、寄ってたかって肉体を貪むさぼり、そして最後に素そ朴ぼくで優しい笑顔を浮かべることのできる顔に錆さびた鉈なたを振り下ろしたのだ。

遥はるか昔の光景を、フランチェスコはいまでも鮮明に思い出すことができる。

空を仰ぐ。

そう、こんな丸い月の夜だった。

襲撃の終わった草原で、俺は母親の死体にもたれて月を見ていた。人間どもは子供の俺を殺すかわりに、母親を殺したのと同じ鉈で腹を切り裂いて遊んだのだ。

　虫の息のロマの子供を月が静かに照らしていた。もうすぐ母親のところへ行ける。そう思うと目の前に迫った死すら怖くはなかった。

　そこにあいつが来た。

　ルーマニアの闇に棲すむ狼。その毛むくじゃらの男は血の海に浮かぶ俺を見下ろしていた。

　血の匂いを嗅ぎつけ、生き残った俺を喰らおうとしていたのだ。

「お前たちをひとり残らず殺してやる」

　目が霞かすんでなにも見えなかった。俺は相手が誰かも分からずにそう言った。

　狼は笑って食事を始めた。ロマの反撃を受けた人間どもを息のあるうちに貪むさぼり食ったのだ。

　夜が明けても、俺は食われなかった。

「お前は半分人間だ」そいつが言った。

　確かに俺は半分人間だった。半分はロマ、半分は人間の血が流れている。

　そんな俺に向かって狼は言った。

「呪いを打ち消すことのできる血をやろう」

　そいつの血を享うけたのは、二百年以上も昔の話だ。

　そしてフランチェスコは別の生き物になった──。

　満月は真上から照らしている。

　ロマの生み出したＣの旋せん音おんは狼の心を打つ。

　弦の音の中に唸うなり声を聞いた。

　俺の声だ。

　満月の夜、俺はこうして月と大地の狭はざ間まに生まれ変わる。

　瞳を満月の黄き金ん色に染め、狼の宴うたげを始めるために！

　眉み間けんに皺しわが寄る。循じゅん環かんするコードが速度を増し、杉材のネックがみしみしと音を立てる。

奴らはロマを人ロマと認めない。

エジプトから来た民族などと呼び、ロマの出自すら偽いつわろうとする。

許せるはずがない。

だからフランチェスコは奴らに与えるのだ。

正当な報復を！

真実の復ふく讐しゆうを！

四本の指が弦を弾く。

めりめりと、皮ひ膚ふの下から何かが現れる。

心臓の鼓動が、噴き上がる激情が音に乗り移り、月が巨大になる。

かき鳴らすラスゲアード！

スチールの弦がぶち切れる。ネックがへし折れ、旋律が破壊される。

フランチェスコは満月に向かって叫んだ。

狼の咆ほう哮こうだった。

跳躍する。

石いし畳だたみは匂においを残しやすく、狼の追跡を容易にする。

人間どもは馬鹿ぞろいだ。狼を恐れては煉らん瓦がの家を次々に立てている。

おかげで嗅ぎつけた。

あの別荘で嗅いだ獲物の匂いを、狼の嗅覚が捉えたのだ。

屎し尿にようの臭うスラムで、紛らわしいいくつもの匂いを嗅ぎ分けるのに時間がかかってしまったが、幸いなことに今夜は満月だ。満月は狼に味方する。

赤い屋根を蹴って大地の引力に身を任せた。暗闇を見通す黄き金んの瞳は、石畳の上の構造物を全てとらえている。標識の上に毛むくじゃらの肉体が止まると、鉄の支柱がぐにゃりとへし折れた。

オロスコピーア通り──曲がった標識の文字を読み取った。

郊外の別荘で嗅かぎつけた匂においは、スラムの教会で途切れていた。しかしほんのわずかな匂いを嗅ぎ分けて、ようやくここまでたどり着いた。

魂たましいが煮えたぎっている。脳みそから立ち上る湯気が視界をおぼろげにする。しかし五感は研ぎ澄まされている。

石の上を走った。土にくらべてこの走りにくさはどうだ。大地を塗り固める人間どもを喰らうことには、なんのためらいもない。

灯りのついた建物の前で足を止める。

ここだ。ここに手がかりがある、あるいは恐ろしい魔法物語フイアーバが待ち構えているだろうか。

いずれにしろ今夜はフランチェスコにとって最高の日だ。

怒りが全身の体毛を逆立てている。復ふく讐しゆうには満月がふさわしい。

扉を壊して中へ入った。宴うたげの始まりだ。

悲鳴を上げたのは人間の子供だった。子供ばかりがこの家に集まっている。目当ての人形も子供の姿をして、この中にまぎれているかもしれない。

手近なのをひとり摘つまみ上げた。肉の匂いがするからこれは人間だ。腹に噛かみ付くと口の中で血と臓ぞう物もつの味が弾けた。

美う味まい、しかしこの食堂はずいぶん雑然としている。躾しつけがなっていないのだ。

そんなことはどうでもいい。人形はどこだ。

悲鳴があがる。腰を抜かした子供が逃げようとする。邪じや魔まだ、足を持って振り回す、壁に当たった頭が砕けて、赤い血を撒まき散らしながら子供が肉にく塊かいに変わる。そいつを捨てて別の子供を拾い、かじりつく。美う味まい、こいつも人形ではない。

唸うなり声がするのは俺の声だ。

舌なめずりをする、これは人じん狼ろうの饗宴だ。

煉れん瓦がの家の中を仔こ山や羊ぎどもが逃げ惑う。いちいち潰つぶすのが面倒だ。ええい動くな。両手を振り回しながら群れの中に飛び込んだ。腕で跳ね上げ、爪で切り裂く、足で踏みつけるとぽきぽきと骨の折れる音がする、机を振り回しては投げつけ、押し潰す。

血の匂いが立ち上る。まだだ、美味い仔山羊はまだまだいる。

ふいに火薬の弾ける音がして、鉛なまりの粒が脇腹に食い込んだ。

振り向くと、赤いコートの仔山羊が人間の武器を持っていた。こいつだけが雌めすの仔山羊だ。なにか写真のようなものを抱きしめて、がたがた震えてこっちを見ている。

そんな鉛弾がなんだというのだ。

吼ほえた。窓がびりびりと震える。仔山羊たちがいっせいに建物の奥へ逃げようとするのを追いかけ、次々と捕まえた。一口ずつかじってはそこらに投げ捨てる。

調理場の棚たなを振り回し、食器をあたりに飛び散らす。二、三匹は棚で押し潰した。最後に残したのは赤いコートを着た雌の仔山羊だ。そいつを両手でわしづかみにする。

いい匂いだ。

手の中の仔山羊も人形ではなかった。しかしなにも残念なことはない、ならば次の手がかりを探しに行こう。さいわい、ここでいくつもの匂いを覚えることができた。

実に楽観的な、いい気分だ。



　小さい鳴き声をあげた雌めすの仔こ山や羊ぎがフランチェスコの腕を引っ掻かいた。

　カリカリ、カリカリ……剛ごう毛もうに覆おおわれた狼の腕を掻き毟むしる。これはなんとも気持ちがいい、もうしばらく掻いてもらおう。

「助けて、ノヴェラ……！」

　小気味よい鳴き声をあげながら、小さな手を精一杯動かしている。血の匂いが建物の中に立ち込め、狂騒に侵されていたフランチェスコの脳裏に理性が戻ってきた。

　赤いコートの小娘を引き寄せる。口に入りそうなほど小さな顔を覗き込んだ。

　器量のいい娘だ。怯えてはいるが、意思の強いはっきりした瞳だ。

　この娘がやがて大きくなり、子供を産む。そうして二人か三人か人間が増えるだろう。人間の命はこの大地よりも重いというのが奴らの決まり文句だ。ましてやロマなどよりはるかに重かろう。そんなに重い命が二つ三つ増えてしまうのだ。やがてそれが百、二百になる。この狭きよう量りような世界がそんな重さに耐えられるだろうか。

　娘はまだ手を引っかいている。泣いているのだろうか、人じん狼ろうは人喰いだが子供をいたぶるような真似はしたくない。

　ぼりっ、と後ろから嚙かみついた。

　口の中に温かいスープの味が広がる。娘の身体が痙けい攣れんを起こした。音を立てて吸い上げると、割れた頭ず蓋がい骨こつの隙間から新鮮な具が流れ込んでくる。舌した鼓つづみを打ちながら、戦場のような室内を見渡した。ここは食堂だろうか、確かに美う味まいスープも上質の肉も転がっている。血まみれの店内は食材の見本市のようだ。

　赤いコートの肉にく塊かいを放り投げる。ここで食べ過ぎては腹に石を詰められるかもしれない。好物ばかりを選んで血の飢えを満たすことにした。

　面白いものだと思う。若いころは太ふと腿ももや胸の肉のような分かりやすい味が好物だったが、だんだんと歳をとるうちに臓物の複雑な味わいを好むようになる。獲物の匂いはこれで忘れない。別荘を襲ったときもこうやって匂いを覚え込ませた。

食い残しを気にすることはない。銀貨アルジエントだの魔法物語フイアーバだのといった人形どもに、血の足跡を見せつけてやる。

奴らを支配し、人間どもを従わせるのだ。

大地の神の作り出した牙と肉の摂せつ理りに。

xi

靴くつ音おとを響かせて、夜のヴェッキオ橋を渡る。

こんなに長い距離を走ったのは初めてだ。隣を走るルーカが息を切らしている。

三つ並んだアーチの見晴台から、アルノ川の暗い水面に揺れる水銀灯の明かりが見える。息を吸い込むたびに湿った空気が体内を循じゅん環かんして、口から吐き出される。

「車をつかまえるぞ」

「でもタクシーは足がつくって」

「そんなことより連中が心配だ」

停車していたタクシーのドアをノックして、居眠りしていた運転手を叩き起こす。拳銃を持った若者にスラムの住所を告げられ、運転手はすぐに車を出した。

車の静かな振動に身を任せたノヴェラは、窓の景色に瞳を泳がせた。

みんなはどうしているだろう。

円シリ筒ンダが不安を覚えると、外から入ってくる情報が色合いを暗くする。

エンジンは不吉な唸うなりをあげ、タクシーと警察の車カゼツラがスピードを増してすれ違う。闇空の中、満月だけが不気味に光り、虚こ空くうにぽっかりと黄き金ん色の穴を空けている。

ノヴェラは確信した。ここに見えるものは全て、僕の物語の背景であり登場人物だ。

この物語に語り手はいない。瞳石ジエンマの映し出す情報が、五感から細管や鉄線を経由して伝わる全ての情報が、円筒シリンダの歯車に記録され蓄ちく積せきされてノヴェラの記憶になる。その膨ぼう大だいな記憶が自分の中で編集されて、自分という物語になるのだ。

記憶を順番に並べても、決して物語にはならない。

記憶を物語へと練成するのが魂たましいだ。

「アレッシオは変な顔をしていたね」

「お前がややこしいことを言うからだ」

タクシーはスラムへと急ぐ。このエンジンの唸うなりも僕の物語の一部だ。窓を流れるベルモントの夜景も、お転てん婆ばなフォーラも、親父バーボも、弾丸パロツトラも、初めて撃ち殺したあの人形も、仮面の男マスケリーノすらも……。

平行に並んでいた記憶を自らの意イ図トで繋つなぎ合わせ、物語にする。

その糸イトこそが自我であり、自己であり、魂だ。

そのことに気づけば、意識の中に入り込んでくる全ての情報がノヴェラには愛しかった。

『人間になるということは、物語を持つということです』

ノヴェラの出した答えを、アレッシオはどう思っただろうか。

性別も年齢も人種も関係がない。全ての人間は、未完の物語を書き進めるために時を刻んでいる。それだけでいい、それが人間の証なのだから。

「ノヴェラ、どうした」

気がつくと、ノヴェラはタクシーの後部座席でルーカの肩にもたれかかっていた。腹の中から新しい情報が伝わってくる。円筒シリンダの軸じく受うけに使われた緑柱石スメラルドが悲鳴を上げているのだ。

仮面の男マスケリーノに敵対してはならない──この体内の異変は、瞳石ジエンマの命令をノヴェラが破ったからだ。瞳石ジエンマに背いた人形は、円筒シリンダの軸受けが砕けて自壊してしまう。ノヴェラの体内で、その予兆が軋きしみを上げている。

「なんでもない、僕なら平気だ」

そうだ、物語はまだ完結していない。

軸受けが壊れる前に、食堂トラツトリアのみんなを逃がすことができればいいのだ。

ルーカの腕時計を覗き見る。

時刻は午前零れい時じを回っている。アレッシオはもうフォーラと会えただろうか。

銀の城に乗り込む前に、フォーラだけを外のホテルに移しておいたのだ。具体的な場所を知っているのはアレッシオとルーカだけ、瞳石ジエンマの指輪に操られるかもしれないノヴェラは、その場所を聞かなかった。

仮面の男マスケリーノと決けつ裂れつしたとなると、弾丸パロツトラにも累るいが及ぶかもしれない。あのバスに乗っていた人形のうちの何体かが、トラットリア・カプレットを目指していてもおかしくはない。

「急いで食堂を引き払わせろ」

別れ際にアレッシオから受けた指示に従って、ルーカはドゥオーモ広場の公衆電話から食堂トラツトリアに連絡を入れた。スラムに潜もぐるのをやめてベルモントを離れたほうがいいかもしれない。いずれにしろ今夜が勝負の分かれ目だ。

しかし、誰も受話器を取らなかったのだ。

狭いタクシーの中、隣に座ったルーカがひっきりなしに足をゆすっている。

「いったいどうなってやがるんだ」

「別の兵隊が動いて、僕とフォーラを確保しようとしたのかも」

「ありえる話だな。あるいはみんなもう逃げ出したか……」

「だといいけど」

後ろ向きな言葉が出てしまいそうになるのを飲み込んで、気を取り直した。

いくら仮面の男マスケリーノでも、子供たちを意味なく殺したりはしないだろう。いざとなればノヴェラが身代わりになることもできる。

アウトードロモで一緒に戦ってからというもの、ルーカはノヴェラに信頼を寄せている。だからノヴェラもリッカルドのようになって、弾丸パロツトラのリーダーの期待に応えたかった。

飛び去る夜景と不安げなルーカの横顔、きしむ円筒シリンダとエン

ジンの唸うなり。車はオッタヴィーノ地区を横切り、すぐにランビキ地区のスラムに入った。

　静かだ。

　スラムは不気味なほどに静まり返っていた。

　タクシーを降りたときから奇妙な空気が伝わってきている。トラットリア・カプレットだ。自分たちの暮らしていた建物から、異様な気配と臭気が立ち上っている。

「ノヴェラ、気を付けろ」

　アレッシオのように黒いスーツを着たルーカは、ノヴェラを庇かばうように前に立って、食堂の入り口に近づいた。いやな予感がする。予感なんていうものを感じるようになったのも、魂たましいの仕し業わざだろうか。

　ドアは取っ手が壊されていた。半開きになって中の様子が見える。

　□□！

　先に覗き込んだルーカが両手で口を押さえた。スーツの背中が震えている。

　背伸びをしたノヴェラの瞳石ジエンマが、ルーカの肩越しに食堂の様子を映し出した。

「人じん狼ろう……！」

　かつて仮面の男マスケリーノから何度も聞かされた人喰いの怪物──その人狼が、血まみれの食堂の中でうずくまっていた。

　人狼が、なぜトラットリア・カプレットに？

　血の匂いがする。刹せつ那な、円筒シリンダの歯車がノヴェラの感じたことのない回転を始めた。

　これが。

　これが僕の物語なのだろうか。

　リッカルドは合キ成メ獣ラの運転席で血まみれになって死んだ。

　あのときノヴェラは激発した。円筒シリンダの中で感情が爆発したのだ。

なのに、涙は零こぼれなかった。

今は感情が爆発しない。冷え切ってしまったかのようだ。

なのに、涙は頬ほおを濡らしている。

人狼は誰を食べているのだろう。

アリーゴ？　エツィオ？　ウルバノ？　レナート？

それともニコロ？

──リタ？

どうしてここに人狼がいるのか、それは問題ではなかった。

問題は、人狼がノヴェラの家族にどんなひどいことをしたかだ。

水滴が視界を曇らせる。

娼しょう館かんで男と寝たことは忘れても、この感情は永遠に円筒シリンダの楽譜スコアから消えないだろう。

そうだ、ここが僕の戦場だ。

弾丸パロツトラの家族になった僕の物語だ。

アレッシオに言われて外していた銀の仮面マスケラ、それを再び顔にかぶせた。

「ルーカ、逃げるんだ」

ルーカは悲鳴を嚙かみ殺している。人間が人狼に対抗することなどできるはずがない。スーツの肩をつかんで引き戻した。

「逃げられるかよ、こんなの……誰がやられてるんだ」

「分からない、けれどあいつは狼だ」

軸じく受うけに負ふ荷かをかけ続けていた円筒シリンダの歯車が、さらに高速に回転をはじめる。

身体を流れる水銀が熱を発して、ノヴェラの意識を戦いへと駆り立てようとしている。

「ルーカ、僕は人間になる方法が分かった気がする」

「ノヴェラ……」

「こんな気持ちは初めてなんだ。これは僕が操られているからじゃない」

　物語が生まれるのは、僕の魂たましいが「こうありたい」と願うからだ。自分の姿を欲求するから物語は編あまれてゆく。

　銃を抜いた。

　リッカルドのＭ９□□鉛なまりの銃弾では狼に通用しないだろう。けれどこれは弾丸パロツトラを守るために使われるべき拳銃だ。

「狼はもう僕たちに気づいている、どちらかが食い止めないと逃げられない」

「お前にあいつが殺せるのか」

「狼は銀の武器じゃないと殺せない。僕が引き付けるからルーカだけでも逃げるんだ」

　蒼白になった顔でルーカが囁ささやく。

「無理だ、やめろ」

「無理じゃない。僕は狼を殺すために作られたんだ、あの仮面の男マスケリーノに」

「けど、お前は人間になったんだろ」

「そうだよ、僕なら戦える。仮面の男マスケリーノではなく、弾丸パロツトラのために」

　弾丸パロツトラを守るためのＭ９、その銃口をルーカに突きつけた。

「自動機械人形オートマタは死の危険を絶対に回避する。生命維持の本能が円筒シリンダに刻まれているんだ。けれど僕は違う、僕の物語を自分で書き上げてみせる」

「ノヴェラ……」

　円筒シリンダがまた軋きしみをあげた。宝石の軸じく受うけが怒り狂っている。

「いつから『僕』に戻ったんだ？」

　ノヴェラの言葉を受け止めたルーカが、同じＭ９を抜いた。

　互いの胸もとに突きつける。

「俺の仲間が殺されてるんだ、誰が生き残るかじゃねえ、誰があの化け物をぶち殺すかだ」

　拳銃を突きつけたまま、ルーカは銃を入れていた鞄かばんから短機関銃ミニウージーと銀の鉈なたを取り出した。

「それは……」

　仮面の男マスケリーノの人形が持っていた、銀の武器だ！

　がちゃりと金属の音がして、狼の動きが止まる。

「その仮面は似合わねえよ、こっちによこせ」

　鉈に気を取られた隙に、銀の仮面マスケラをルーカに取られた。

「明日こいつを売っぱらってさ、みんなで美う味まいもんでも食おうぜ」

　ルーカが笑う。ノヴェラも笑った。

　もしも僕たちに明日が来たら、きっとそうする。

　そのためにも人じん狼ろうを殺さなくてはならないのだ。

　ドアを蹴破って食堂に突入した。

　ルーカが左、ノヴェラが右から、うずくまる人狼の背中に銃弾を叩き込む。

「立ち止まるな、動いてないとだめだ」

　鋭く咆ほう哮こうした毛むくじゃらの塊かたまりがテーブルの上でゆっくりと振り向いた。

　人狼！

　これが本物の人狼。仮面の男マスケリーノが正気を失うほどに恐れ、憎んでいた月夜の怪物……！

　想像以上だった。圧倒的な質量の肉体、巨大な顔の大部分が鋭い牙きばを並べた炎のように赤い口だ。そしてその顔には刃物で切り裂かれたような醜みにくい傷が無数に走っている。

「この野郎！」

　ルーカの短機関銃ミニウージーが掃射音を上げる。低く吼ほえた狼が身を捩よじった。十発単位の９ミリパラベラムが狼の脇腹に赤い穴を穿うがつ。それでも怪物はまるで怯ひるんだ風がない。

　これが人狼の肉体だ。

　ノヴェラは狼の巨体に吸い込まれそうになっていた。はっと我に返り、引き金を引きながら目をそむけると、血の海になった食堂の全ぜん貌ぼうが視界に入ってきた。

　生きている弾丸パロツトラはいなかった。

　少し前に夕食を囲んだ食堂のあちこちに赤黒い血がこびりつき、食い千切られた子供たちの死体が転がっている。

「リタ！」

　ノヴェラの足元でリタが宙を見上げていた。息はない。後頭部が割れ、流れ出した大量の血液が床の上でどす黒く固まっている。おませでしっかり者の少女の顔は恐怖に固まっていた。

　リタは死んでしまった。さよならの一言も告げられなかった。

　これが……僕の物語だ！

　床を蹴けった。一緒にサッカーボールを蹴って遊んだ仲間の、アウトードロモでリッカルドの応援をした仲間の死体を踏み越えて狼へと突き進む。ルーカの短機関銃ミニウージーが掃そう射しや音おんをあげ、狼が身を屈めた。

　この身体は、どこまで動けるのだろう。

　テーブルに足をかけて跳躍した。四メートル上の天井が迫ってくる。天井から釣り下がった電灯の傘かさに手をかけて、チェーンの反動で狼の後頭部にとりついた。両足を首にからめて身体を固定し、巨大な頭部めがけて引き金を引く。

「グオオオッ」

　血ち飛沫しぶきがあがった。

　凄すさまじい反射速度で狼が巨体をひねる。

　夢中で引き金を引いた。二発目、三発目━銃弾が頭を外れ、首筋と頬に打ち込まれる。まだだ、こいつにはこんなものじゃ足りない。首をひねって銃弾を躱かわそうとする狼の頭だけを狙う。四発目、五発目、まだ頭ず蓋がい骨こつは砕けない。狼の顔が血にまみれ、血の泡

が唸うなり声をくぐもらせた。

　六回目の引き金を絞しぼろうとしたとき、横合いから狼の拳が飛んできた。

　一撃。

　跳ね飛ばされたノヴェラは壁に激突して床の上に落ちた。

「大丈夫か！」

　駆け寄ってきたルーカの手から銀の鉈なたをひったくる。

　弾切れの短機関銃ミニウージーを投げ捨てたルーカは、Ｍ９を狼に向けながら真っ青な顔をしている。

「大丈夫、やれるよ」

　立ち上がろうと思ったがバランスが悪い。見るとノヴェラの左腕は肩からもがれていた。

「好都合だよ、僕らの水銀血液にも銀の武器と同じ力があるんだ」

　肩口から水銀が滴り落ちてくる。ルーカを安心させるように笑ったノヴェラは、鉈の刃を傷口に当て、刀身に水銀を塗りつけた。

「人形は便利にできてるよね。ルーカ、俺が行くから援護は任せる」

「分かった……死ぬなよノヴェラ」

「死ぬのは狼だ」

　拳銃を腰に差して隻せき腕わんのノヴェラは立ち上がった。横っ飛びに走りだしたルーカが銃を撃つ。ちゃんと十四発で弾だん倉そうを交換し、また引き金を引く。

　人じん狼ろうの意識がルーカに向かう、ノヴェラは銀の鉈を構えて突進した。わずかな隙さえあれば、きっと奴の首筋にこいつを叩き込める。

　狼が低く吼ほえてこっちを向いた。恐ろしい勢いで振り下ろされる巨大な腕の一撃を、きわどいところで躱かわした。ふたたび狼がルーカに向けて突進しようとする。

「ルーカ、危ない！」

　鉈を置いて拳銃を狼に向ける。

　──違う、鉈で殺せ！

　声が響いた。だめだ、鉈を打ち込む前に狼の爪がルーカを引き裂いてしまう。

　──いいんだ、殺せ！

　瞳石ジエンマの声だ。

　円筒シリンダの楽譜スコアに刻まれた瞳石ジエンマの命令が腹の中で不協和音を鳴らす。

　うるさい、瞳石ジエンマは黙れ！

　狼の頭部めがけて銃撃した。二発命中して血まみれの狼がこっちを向く。ルーカは部屋の反対側へ逃れた。

　これは僕の物語だ。

　再び鉈なたを手に取った。リタの顔を思い出すと胸がギュッと締め付けられる。この衝動は、仮面の男マスケリーノに対して感じたものの数倍だ。腹の中で円筒シリンダが炎を噴き上げた。

　僕はリタが好きだったのだ。

　あの子もたぶん、僕のことが好きだった。

　だから、魂を持ったノヴェラはなすべきことをしなくてはならない！

「俺は弾丸パロツトラだ！」

　ノヴェラは突進した。ルーカの拳銃が炸さく裂れつ音おんを何度も響かせる。人じん狼ろうの太い腕が全ての銃弾を受け止めた。

　狼の血が噴きだして床を濡らす。だが人狼という怪物は、肉体の傷をすぐに再生してしまうのだ。銀だけがそれを許さない。

　腕の太さなんて関係ない。思い切り振り下ろした銀の鉈が空を切った。テーブルの角を蹴けって、竜巻のように腕を振り回す狼の攻撃を回避する。

「狼め！」

　身を屈め、足を狙った。滑り込んで銀の鉈を水平に薙なぐ。狼の巨体が宙に舞った。転がって逃れると、さっきまでノヴェラの顔があった床を巨大な獣の足が踏み抜いた。

バランスを崩くずした、いまだ。

跳ね起きたノヴェラは再び床を蹴った。床板を踏み抜いた狼に飛びかかる。

鉈を手に、狙うは狼の頚けい動どう脈みやく。

一いつ閃せん！

しかし狼が早かった。

振り下ろした鉈なたが狼の腕に弾き飛ばされ、壁に突き刺さる。

狼の拳がノヴェラの身体を浮き上がらせる。次の一撃で右足が根元からへし折られ、ノヴェラは床の上に転がった。

「ルーカ、逃げろ！」

身体の中のあちこちで細管が切れている。力が入らないのは発条バネと鉄線がつながっていないからだ。

視界には狼と壁に突き刺さった銀の鉈。もう銀の鉈を使うことはできないだろう。

──もう逃げろ、戦いはフォーラの役目だ！

瞳ジエ石ンマはまだ仮面の男マスケリーノの命令を叫んでいる。

黙れ、物語はまだ終わっていない。

「さよなら、フォーラ」

片腕で身体を起こしたノヴェラは、血でぬかるんだ床を這はいながら妹の名を呼んだ。

もう瞳石ジエンマには従えない。

僕が楽譜スコアに刻むのは、弾丸パロツトラの物語だ。

「ルーカ、逃げろ！」

ノヴェラの声を聞いてもルーカには逃げることなど想像もできなかった。

自分が巻き込んだんだ。親のいないこいつらを。

足元の床は血でぬかるみ、恐怖に目を見開いた弾丸パロツトラの死体があちこちに転がっている。異臭を発する肉にく塊かいの全てが、

ルーカの大切な家族だった。

　全ては、あの怪物がやったのだ。

　ノヴェラや仮面の男マスケリーノの敵だという、あの狼の怪物が。

　引き金を引いたアレッシオに言われたように確実に相手に命中させ、撃ち尽くす前に弾だん倉そうを交換する。どうしても、こいつだけは殺してやる。

「ノヴェラ、お前なにしてる！」

　自分以外の銃声を聞いたルーカは叫び声をあげた。

　ノヴェラが自分の首を拳銃で打ち抜いたのだ。人間ならば頚けい動どう脈みやくのあるところだ。シュッと水流が煌きらめき、夥おびただしい量の水銀が噴き出してくる。

　聖せい別べつされた水銀は、銀と同じ力を持つ。

　ノヴェラは噴き出した水銀を銃口に流し込んだ。そして狼の頭に狙いをつける。

「くそっ！」

　叫びながらルーカは銃を連射した。ノヴェラは命がけで狼を食い止めようとしている。それを少しでも助けるのが、いまのルーカの役割だ。

　水銀を流し込んだ銃口が火を噴いた。

「グオオオオッ！」

　狼が雄お叫たけびを上げて身をよじる。効いているんだ。ルーカは狼の脇腹めがけて滅茶苦茶に引き金を引いた。

　十四発で弾だん倉そうを排出した片手片足のノヴェラは、新しい弾倉を口に咥くわえて交換を済ませた。また水銀を流し込んでは、銃弾をぶち込もうとする。

　狼が突進してきた。

　その頭部めがけてノヴェラとリッカルドの拳銃が火を噴く。

　拳銃の弾は銃身の溝みぞに沿って高速に回転しながら発射される。射しや出しゆつの勢いで水銀はほとんど飛び散ってしまっているだろう。だが、わずかに残った水銀はノヴェラの魂だ。それが狼を苦しめ

ている。

　狼の突進をノヴェラが躱かわす。ルーカが引き金を引いても、怒り狂った人狼はノヴェラだけを狙っている。まずい。噴き出す水銀が壊れかけたノヴェラの動きを緩かん慢まんにしている。

「よけろノヴェラ！」

　だが遅かった。

　叫んだルーカの目の前で、人じん狼ろうの腕がノヴェラの腹をぶち抜いた。

　華きや奢しやな身体が毛むくじゃらの腕に貫かれて宙吊りになる。

　人狼はそれだけでは済まさなかった。水銀の苦痛が奴をくるわせているのだろう。

　鋭い爪がノヴェラの上半身を切り裂き、鉄線と細管が肌の下から姿を現す。左腕でノヴェラを宙吊りにしたまま、人狼の右手が黄き金ん色の髪をわしづかみにする。

「殺させるかよ！」

　壁に刺さった銀の鉈なたを引き抜いて、ルーカは狼めがけて突っ込んだ。

　この食堂トラットリアでみんな殺された。けれどノヴェラまで死なせやしない。

　脇腹に銀の鉈を食い込ませた。怒り狂った狼の咆ほう哮こうが食堂全体を震わせる。

　もう一撃だ！

　抜いた鉈を再び振り上げたとき、狼の右腕がノヴェラの首をもぎ取った。

　人狼は強大だ。丸太のような腕が華きや奢しやなノヴェラの身体をばらばらにする。ルーカの頭の上にノヴェラの血水銀が降り注ぐ。

　まだ親が生きていたころ、手を引かれて行った動物園のことをルーカは思い出した。そこで生まれて初めて虎の巨大な前足を見た。他の猛獣とはスケールの違う圧倒的な存在だった。

　我に返った。ほんの一秒にも満たない瞬間、ルーカは過去の自分を見つめていた。

　破壊されたノヴェラの首が床に転がる。転がって、厨ちゆう房ぼうの入り口を塞ふさいでいた赤いコートの死体にぶつかる。そこにあったのはリタの死体だ。赤いコートの胸もとにはリッカルドの写真が抱かれている。

「糞くそったれの化け物が！」

　ルーカの頭の中で何かが切れた。もう止められない。

　ルーカはその場で両足を踏みしめて、狼の脇腹に鉈の第二撃を叩き込んだ。

「グオオオオ！」

　狼が再び吼ほえた。拳が振り下ろされる。無意識にそいつを鉈で防いでいた。しかし圧倒的な質量がルーカの身体を跳ね飛ばす。厨ちゆう房ぼうの壁にぶつかったルーカは気力だけで立ち上がった。

　鉈はどこかへ飛んでしまった。拳銃を構える。巨大な人狼の黄き金んの瞳が食堂からルーカを睨にらみつけている。気け圧おされるな、アレッシオのように集中しろ！

　奴の弱点は脇腹だ。さっき穴を開けたところに、今度は銃弾をぶち込んでやる。

　狼が突っ込んできた。引きつけて撃て。あいつの腹に当てるにはどの距離だ。

　狼が跳躍する。血まみれの厨房に転がってＭ９をぶっ放した。

　一発だけ命中した。くぐもった唸りをあげて毛むくじゃらの巨体が着地する。床に転がったノヴェラの頭部。そいつを狼の足が踏み潰つぶした。

「その足をどけやがれ」

　剣つるぎの切きつ尖さきのように鋭くした意識を、怒りの動どう揺ようがぶれさせる。

　最後の弾だん倉そうを装そう塡てんする。銃を乱射しながら狼に突進した。怒りに狂った狼も銃弾を浴びながらまっすぐに突っ込んでくる。そして、ルーカの喉のど笛ぶえを狼の手がつかんだ。

　潰つぶすなら潰せ！

　顔に向けて引き金を引く。黄金きん色の瞳を弾丸が撃ち抜いた。

「グオゥゥゥ！」

　叫んだ人じん狼ろうは、ルーカの身体を石いし窯がまの中に押し込んだ。

　身体が炎に包まれる。突然の激痛がルーカに襲い掛かってきた。

　痛え！

　全身が蒸気になったような灼しやく熱ねつ。懸けん命めいに目を開いても網膜の水分が音を立てて蒸発し、炎の中のルーカを闇の底に突き落とす。

　ニコロの石窯の中でルーカはもがいた。

　皮ひ膚ふが沸ふつ騰とうする。細胞が焼けている。全身が麻ま痺ひして言うことをきかない。

　ひでえよ、親父バーボからもらった背広が焼けちまう。

　声にならない叫びが喉の奥にわだかまる。次の瞬間、下半身に強い衝撃を感じた。

　焼ける、スーツが、皮膚が、脳が焼ける。

　やがて沸騰した意識が途切れ、灼しやく熱ねつの地獄からルーカを解放した。

xii

　遠くで音が鳴っている。

　か細くて今にも消えてしまいそうで、かと思うと僕の意識いっぱいに強く響く。

　あれはバンドネオンの音。

　僕の指が紡つむぐバンドネオンの旋律だ。

　暗闇の中にいた。

　グレゴリオ聖歌の旋律に導かれ、僕は闇の中で意識を取り戻した。

　それは人形の奏でる、神に捧げる歌。

　肉を捨て、自らを聖せい別べつするための音曲。

　バンドネオンは教会のオルガンと同じ役割を持って生まれた神聖な

楽器だ。

ボタンから送られる音階の情報、蛇腹ベローが送り出す空気圧の情報。

それらを音楽に昇華させるのがバンドネオンなら、それは人の脳と同じことだ。

情報を受け入れて、感情を送り出す。

押すボタンを間違えれば音は乱れ、正しく弾けば美しい和音が奏でられるだろう。

ならば何万個もボタンの付いたバンドネオンは、魂たましいを持つことができるだろうか。

耳を傾ける。

バンドネオンの音は鳴り止まない。

神聖なる楽器で奏でられた聖歌は、狼を退散させるはずだ。

ルーカは無事だろうか……。

僕は闇の中を手探りに歩いている。

ここはどこだろう。

僕の手にバンドネオンはない。

けれど響いているのは僕の弾いたバンドネオンの旋律だ。

そうか。

この音は僕の耳から入ってくるのではない。

円筒シリンダの楽譜に刻まれた、記憶の旋律が鳴り響いているのだ。

僕は歩いてなどいなかった。

それどころか軀く体たいすら持っていなかった。

僕はひとつの円シリ筒ンダになって、暗闇の中に転がっている。

深い海の底に沈んだ無機物のように、音も、光も、匂いも、温度もない世界にいる。

ぎりぎりぎりぎり……。

歯車が回る。

円筒だけになっても、水銀がみんな流れ出してしまうまで歯車は回り続ける。

だから僕はまだ存在している。

深海の底に意識を泳がせて、円筒シリンダの内側を流れる記憶に耳を傾けている。

あのころ、僕はご主人様に飼われていた。

あのころ、笑顔というのは、誰かに見せるために作るものだった。

あのころ、僕の記憶は全てが同じ色をして、同じ重さを持っていた。

闇の中でページをめくる。

それは色いろ褪あせた記憶の彼方。

煤すすけたフレスコ画のような記憶を繋ぎ合わせて、僕の物語ノヴエラが作られてゆく。

──はじまりは水銀の海。

僕は、うねる銀色の水流から生まれた。

祈りの言葉と錬金術の秘技によって、水銀は聖せい別べつされる。

煌きら々きらと光る海を漂っていた僕の両目に、緑柱石スメラルドの瞳石が埋め込まれた。

空は灰色。

くすんだ雲の色。

そう、僕は青空を見たことがなかった。

僕が見上げるのは、暗い天井と灰色の雨雲だけ。

そして僕は手を繋いで生まれた──彼フオ女ーラとともに。

──仮面の男マスケリーノ。

僕は生みの親の下で喘あえいでいた。

人間のように考え、話し、口をきく僕を、仮面の男はことのほか可愛がってくれた。

あの人はどこで間違えたのだろう。

あの人の望みが満たされていたのなら、僕はこの闇の中にいなかったはずだ。

──娼館の出来事。

[redacted]。

[redacted]、[redacted]。

[redacted]、[redacted]。

[redacted]。

──真珠の瞳。

その人は真珠の瞳をしていた。

トスカーナの田園地帯、大きな農場の近くにある白いブランコ。

僕とフォーラは銀色の風に揺られながら、よく彼女の話を聞いた。

僕たちは何のために作られたのか、そして自動機械人形オートマタとは何なのか。

ペルラ姉様は、まだフォーラを待っているのだろうか。

──可愛いフォーラ。

『よろしくノヴェラ、私があなたの妹なんですって』

『眠れないの？　それなら御お伽とぎ話ばなしを聞かせてあげるわ』

『ノヴェラはそんな格好をしちゃダメよ、男でしょ？』

『あんたは弟なんだから、大人しくしていればいいの』

『どうして私のやることに文句ばっかりつけるの？』

『邪魔よ、ノヴェラ』

僕は妹フオーラが好きだった。

なんて可愛らしい子なんだろうと思っていた。

あのころ、僕にはフォーラしかいなかったのだ。

彼女のためなら、どんな辛いご奉仕にも耐えることができた。

なのに、僕は嫌われてしまった。

──それは、ガイアの蝎さそり。

古いビルの地下。

人々の声。

喝かつ采さい、嘲ちよう笑しよう、罵ば倒とう、そして拍手の音。

見世物が次々に姿を現す。

そこにいたのはガイアの蝎。

そこにいたのはフォーラだった。

僕を見て、フォーラの笑顔が凍った。

僕を見て、その美しい顔が醜みにくく歪ゆがんだ。

僕は美しい服を着て、仮面の男に腰を抱かれていた。

フォーラは蝎になって、好奇の渦の真ん中に這いつくばっていた。

──アレッシオと弾丸パロットラ。

そして僕は彼らに出会った。

記憶に色がついたのはいつからだろう。

あのとき、ペンネのアラビア風を食べさせられたから？

アレッシオに屋上で話を聞いてもらったから？

それとも、リッカルドに言われた言葉？

僕の物語はここから始まった。

それはほんの短い時間だったけれど、この円シリ筒ンダに刻まれているのは僕だけの物語だ。

楽にやろうぜ。

復讐の仮マス面ケラとおませなリタ。

アウトードロモの合キ成メ獣ラ。

ルーカ━僕の友達。

初めて人形を撃ち殺したこと。

血まみれのトラットリア・カプレット━。

ぎりぎりぎりぎり……。

歯車が回る。

残りわずかな水銀が、行くあてもなく円シリ筒ンダから零れ落ちる。

これが、僕の物語だ。

記憶を繋ぎとめた糸イトは、ふいに途切れている。

その先はない。けれど物語の結果として存在するのが、僕という魂たましいだ。

僕の物語はどこで終わるのだろう。

ルーカは無事に逃げられただろうか。

ふいに光が差し込み、僕は暗い海の水みな面もに漂っていた。

光は空から、厚く垂れ込めた葬式の雲を割って差し込んできた。

グレゴリオ聖歌が鳴り響き、円シリ筒ンダの周りからいくつもの輝きが立ち昇る。

リタ、ルーカ、弾丸パロツトラのみんな━光の向こうではリッカルドが二本指の敬礼をしている。

弾丸パロツトラの子供たちが駆け出してゆき、リタが光の中でリッカルドに抱きついた。

あの子は僕とリッカルドと、どっちが好きなんだろう。

きっとリタのことだから『どっちもよ』なんて言うだろう。

ああ、それにルーカは逃げられなかったのだろうか。

決まりの悪そうな顔で親友にそっぽを向いている。

リッカルドのことだ、優しい顔でずいぶん辛しん辣らつな嫌味を言

うんだろう。

　それでも、みんな一緒にいる。

　なぜって弾丸パロツトラは家族なのだから。

　銀の円シリ筒ンダは、空と大地の狭間に浮かんでいた。

　僕はその中から彼らを見上げている。

　空に昇るのに円シリ筒ンダは重すぎる、だから僕は手を振った。

　あのとき零こぼれなかった涙を流し、円シリ筒ンダの中から大声で叫んだ。

　さよなら。

　僕に言える言葉はこれだけ。

　みんなと一緒にいられたのは、ほんの僅かな時間だったけれど。

　それでも弾丸パロツトラのネックレスは僕の胸で光っている。

　いま僕の見ているものが何なのか、そんなことはもう考えなくていい。

　円シリ筒ンダの見ているものが僕の真実なのだから。

　ぎりぎり……ぎり……。

　赤い屋根の街を見下ろすと、車の中にアレッシオとフォーラがいた。

　アレッシオはまた腕組みをして眉み間けんに皺しわを寄せている。

　あんなに煙草を吸ったら病気になるんじゃないだろうか。

　けれど、何度注意しても親父バーボは言うことを聞きやしないのだ。

　その隣で、フォーラは楽しそうに満月を見上げている。

　あのとき瞳ジエ石ンマは叫んでいた。

　食堂トラツトリアから逃げてフォーラと戦え、ルーカを捨てて妹を助けてやれ……。

　でも、フォーラの隣にはアレッシオがいる。

　僕のかわりにフォーラを守ってくれる。

　僕のかわりにアレッシオを守ってくれるから。

　止まりかけた心の中で、二つの言葉が溢れている。

　ありがとう。

　ごめんなさい。

　けれど僕には、どちらか片方の言葉でこの物語を締めくくることなんてできない。

　だから言う。

　二つの思いに円シリ筒ンダを震ふるわせて言う。

　たとえ相手に伝わらなくても、僕の物語を閉じるために。

　さよなら。

　物語はこの言葉で終わる。

　きっと、誰の物語にもこの言葉は刻まれるのだ。

　さよなら、親父バーボ。

　さよなら、フォーラ。

　歯車が止まる。

　円シリ筒ンダが銀の塊になり、僕は水銀の海底へ還ってゆく。

　──さよなら。

xiii

「なにか言ったか」

　ふとノヴェラの声を聞いたような気がした。

「いいえ、妖精の仕業じゃないかしら」

　フォーラがきょとんとした顔でこっちを見る。スラムに向かうタクシーの中、後部座席の薄汚れたシートにアレッシオはフォーラと並んで腰を下ろしていた。足をぱたぱたさせたフォーラは、車の窓から見える満月の夜空を眺めている。

「とっても綺麗な月よ、ご主人様は見ないの？」

「見ているさ」

　三本目の紙巻きを灰皿で押し潰す。

　フォーラの無邪気な仕草を視界の片隅に置きながら、アレッシオは腕を組んだ。ミラー越しの運転手は煙たそうな顔でハンドルを握っている。

　旧市街の裏路地でルーカたちと別れたのは、いまから三時間も前だ。喜劇ラツコントを巻いたアレッシオがホテルに着くと、別れたばかりのルーカからメッセージが届いていた。

『食堂トラツトリアからの応答なし、様子を見に行く』

　それは胸騒ぎのする伝言だった。

　ホテルからいくら電話をかけてもトラットリア・カプレットにはつながらない。二時間以上待ったが、ルーカからは何の音沙汰もなかった。

　食堂の様子はどうなっている。仮面の男はガキどもをどうしようというのだ。

　いやな予感がひしひしと迫ってくる。抗争に明け暮れていたヴェネツィア時代に何度も感じたことのある、流血の予感だ。

　喜劇ラツコントどもが狙っているのはアレッシオだ。だからルーカとノヴェラを食堂トラツトリアへ行かせたのだが、自分が行くべきだったのかもしれない。

　夜のベルモントをタクシーが滑る。

　──無事でいてくれ。

　神への祈りに頼ってしまわぬように、アレッシオは不安を懸命に押し殺した。隣に座ったフォーラがそんな殺し屋の顔を不思議そうに眺めている。

　ランビキ地区に入った。

　満月の夜、どうしてスラムはこんなにも静かなのだ。胸の奥に黒い予感が広がってゆく。

「平気よご主人様」

　建物に切り取られた空を見ながらフォーラが呟いた。

「なにがだ」

「御お伽とぎ話ばなしの狼は、猟師に撃ち殺されるのよ」

　黄金の巻き毛を玩びながらフォーラが歌うように口ずさむ。

　空を仰ぐと、やや西側へ移った満月が静かにアレッシオを見下ろしていた。

Ｊ□さいろー

J.Sairo

本文担当。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～II

２０１５年10月９日　電子書籍版発行

者　Ｊ□さいろー

作　ニトロプラス

行人　立川義剛

集人　野村敦司

集　望月ミツル

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００７年８月22日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451022-5